江戸名所図會　八

ル 4
3605
8

明顯山祐天寺　同所西の方五丁斗を隔つ善久院と号せし享保年間二世祐海和尚祐天大僧正の遺跡の地を奉して當寺を草創し則祐天大僧正を開祖とす常行念佛の道場にして鉦鼓の聲は山林に谺せり（此称名は開山祐天大僧正臨終の期開闢より連綿として絶ることなし）毎年七月十六日より同廿五日に至る迄の間阿弥陀経千部讀誦修行道俗群参す

本堂　本尊阿弥陀如来（御長一尺五寸許）恵心僧都の作にして開山生涯持念の尊像なりとぞ　開山祐天大僧正真像（等身佛にして八十二歳の影像三輪利鑑の作なり　本尊の龕前に安置す）

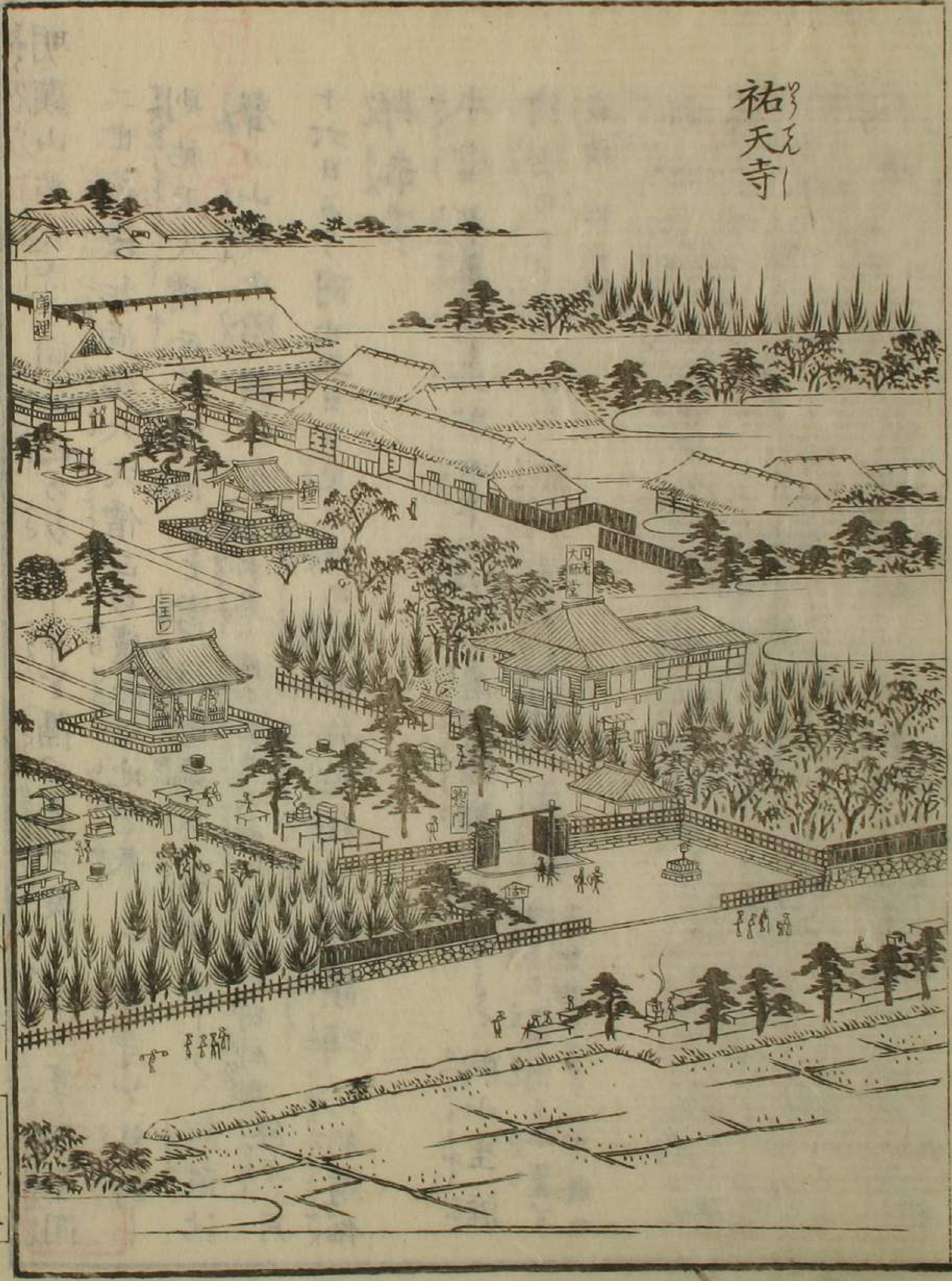
鯨鐘　堂前右の方庫裡の前にあり（一位大夫人桂昌院殿御寄附）

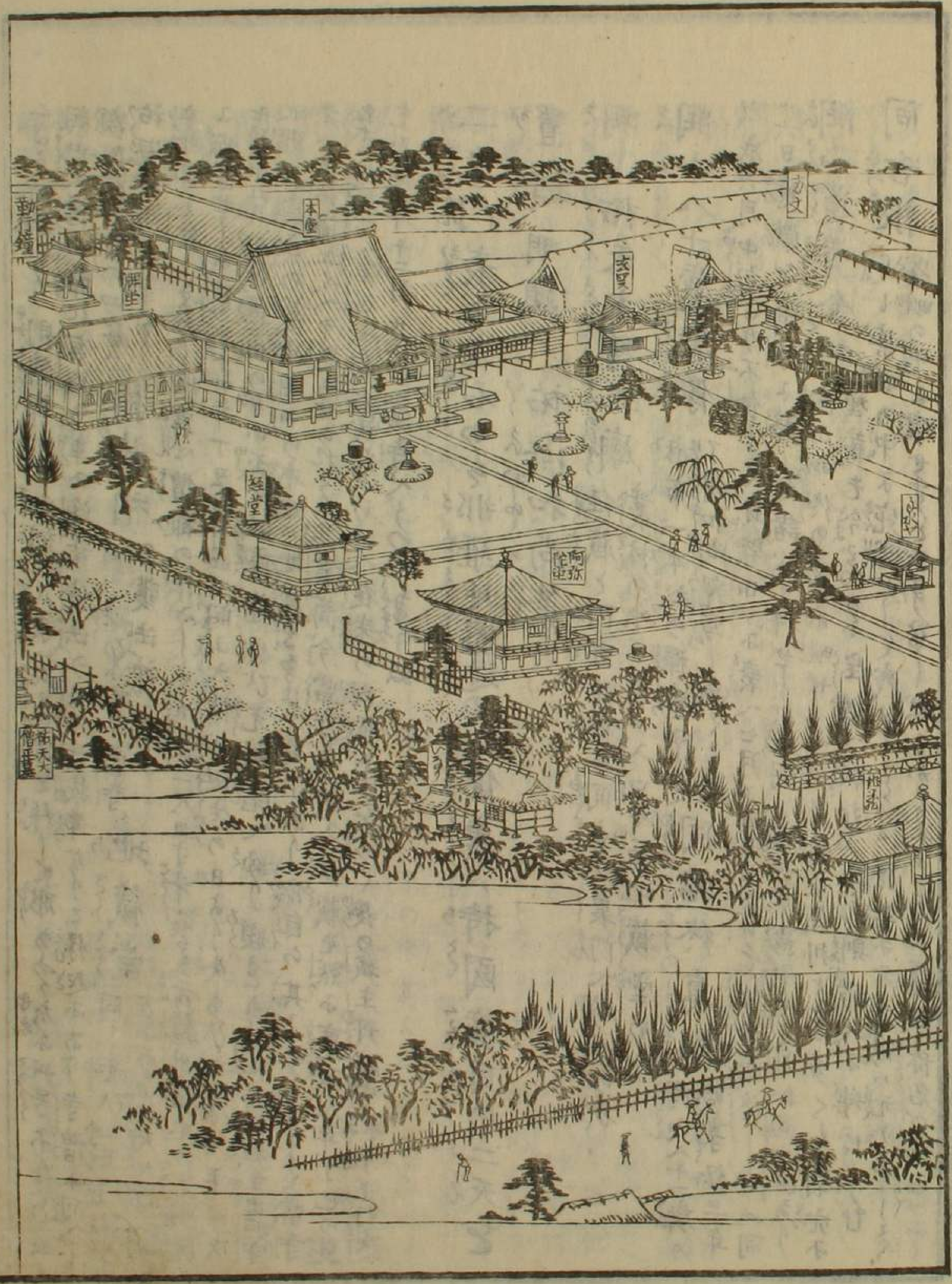
圓光大師堂　同し並ひにあり　法然上人（在世の時河内國に天野四郎と云強盗ありしが終に上人の化導に帰入し出家して教阿弥陀佛と号く（此時三十八歳）常に上人に随従して教化に預りし後に上人相摸國川村と云所へ下向の頃生涯の記念として自彫造して送りありし霊像なりとぞ故ありて當寺にうつしはへりしとなり）

經蔵　堂前左の方にあり（額經蔵の二字ハ祐海和尚の筆なり）

阿弥陀堂　同し左に並ぶ（開山傳授佛と称して恵心僧都の作如来と号す）

志賀文庫
昭和十九年四月五日 故三上参次氏遺族 三上信吉氏寄贈
3605 8


祐天寺（いうてんじ）



なるその是なり則僧都一代彫刻の如来ハ此尊像を拝して彫あらはすに此号ありと云

開山大僧正常に有信の輩に浄業傳法の時の持授佛なりと縁起にあり寺僧に問へし

額阿弥陀堂の四字ハ祐海和尚の筆なり

稲荷祠 同し並ひにあり當寺の護法神とす

地蔵堂 同し並ひ二王門の外の左にあり祐天大僧正の本地佛と称しまつる尺恵心僧都の作なり長二尺五寸斗あり元信州松本の光明院に安置せしに寛永十四年丁丑四月四日開山大僧正誕生の日より失なひ享保三年戊戌七月十五日開山遷化の日に至て此霊像再ひ光明院へ帰り顕れ給ふ松本の城主出羽守水野忠周侯の夢中に開山の本地ハ地蔵尊なるよし霊示あり依て自ら其尊を遷して當寺第二世祐海上人へ送らせられしり其書簡今當寺に傳て秘蔵せり然るに寛政九年丁巳の夏松本の城下倉品七郎右衛門といふ人従来の因縁あるを以て後の城主丹波守松平光行侯へ乞ひ同年十二月廿三日當寺へうつし奉りぬ

二王門 表の左右にハ那羅延密迹の二像裏ハ持國廣目の二天を置

額 明顕山 祐海和尚筆

開山祐天大僧正廟 経蔵と阿弥陀堂の間より裏門へ行左の方叢林の中にあり入口に石地蔵堂あり

開山八十歳影像 麻布一本松の禅室にて了月和尚親写し画くと云

同臨終真影 開山八十二歳の時享保三年戊戌六月中旬より不食しく身躰日々に衰へ七月十五日に至りて称念臨終し給ふ同十六日遺骸を倚子に移して諸人に拝せしむ此期に写せし影にて了月和尚の画なり

開山遺骨舎利 開山命終の後荼毘せしに全身悉く舎利となり多くは廟穴に埋蔵す今ある所は宝塔へ収むるその則諸人に拝せしむ

同舌根 是も荼毘の中にて宛然として残れりといふ縁起に云舌根ハ元火にやけしく荼毘の中にて壊せすと云事なし然るにかく止るその八累年称名の功徳也

その化導に妄語なき

開山大僧正書写六字名号 奇特尤多し就中劔難七太刀身代名号狼牙落名号火中出現不焼名号疱瘡守名号等の現益ハ普く世にもちひられありといへとも故にあけてかそふへからす其余の名号奇特尤多し寺記にあり

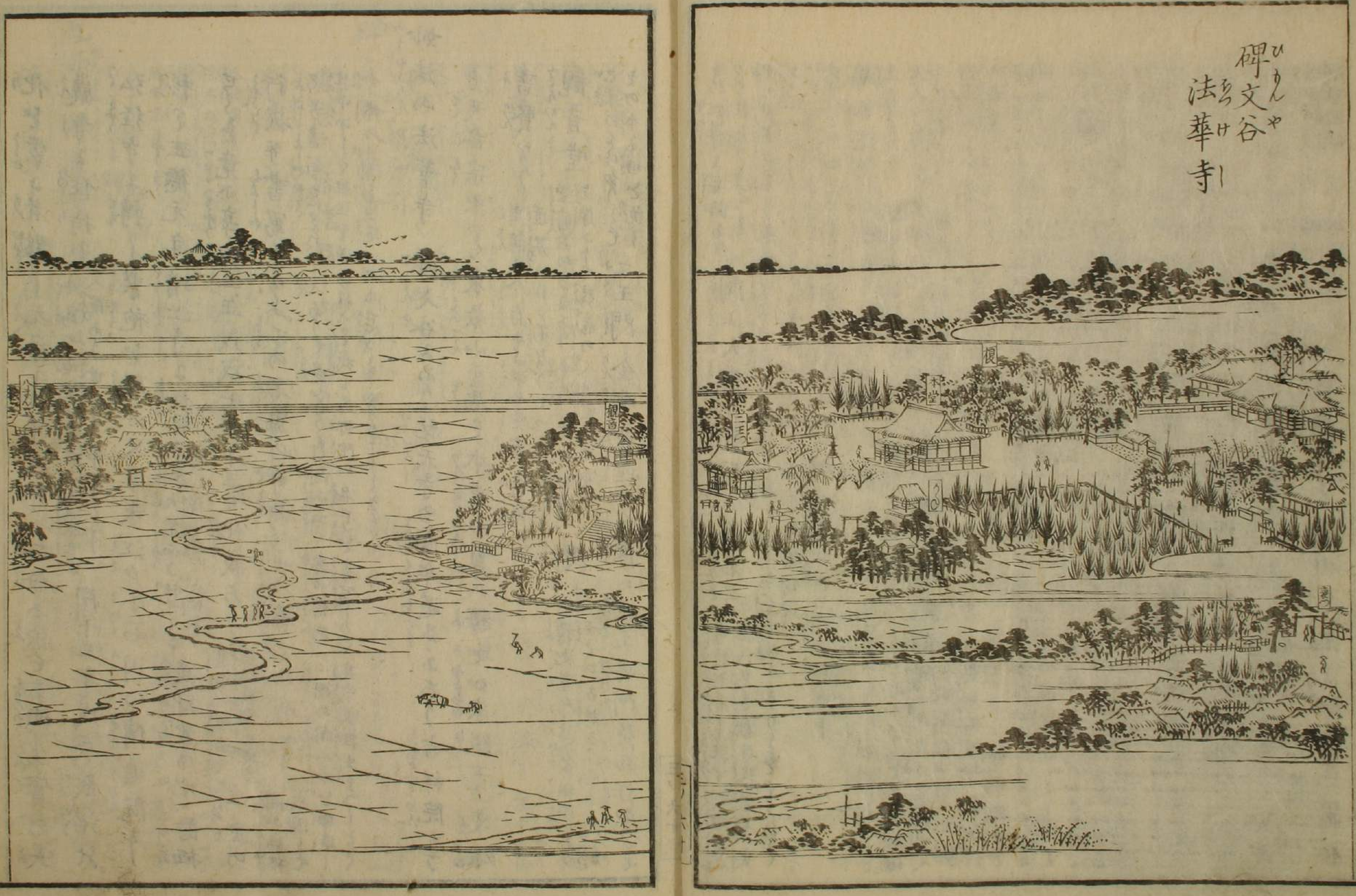
開山大僧正長悦像 開山小石川の傳通院在住の頃元禄年中大樹将軍家御前におゐて法問説法ありし上覧ましく長悦と号へしと

瑞春院殿 御感賞のあまり御親ら御まなひを下さる依て上意ありし鶴姫君様へ進せられ御雛祭の首席にかさらせ給ふ后ち増上寺在住の頃開山上人へあつけられ當寺に収む此故に毎年三月當寺にて雛祭の儀式執行あり

蜀江錦九條袈裟 増上寺在住の頃桂昌院殿御所へ御血脈を御法号をさつけし時

累済度如法衣 二十五條なり累ハ下總國岡田郡羽生村の與右衛門といふ者の妻なり顔形類少き悪女なるく心さへかたくなれハ夫與右衛門是を悪ミ情なくも正保四年丁亥八月十一日絹川といへる川へ突落し殺して後死骸を八同村なる浄家法蔵寺といへるに葬りぬ其後妻五人迄累の怨念にとりつかれて狂死し猶六人目の妻の娘菊といへるに取付せしか開山大僧正の化益により寛文十二年壬子三月十日の夜に至て累の廿六年の怨執悉く散して生死解脱の本懐を遂せしかハ暫く世に知る所なり委しくハ解脱物語といへる草紙にえそうり

開山明蓮社顕誉上人 愚心と号す 祐天大僧正ハ奥州岩城郡新妻邑の産なり 父ハ西村善内といへる者の子にして寛永十九年壬午正月元日生る幼名三之助と云 檀通和尚に従ひ縁山に修学せ世に知る所の累か怨霊解脱の誉ハ尤著し 此寺ハ師の歳三十六其頃檀通師に従ひ北総飯沼に在住しける時の現益なり怨霊の因果ハ解脱物語といへる草紙に詳なり 後故ありて武州牛島に潜居す道俗


碑文谷法華寺

化を蒙る者夥し元禄十二年己卯 台命に依て下總生實の大巖寺に住持し（牛島の庵室より直に大巖寺に入院あり世以て希有とす）同十三年戊辰飯沼弘経寺に轉し紫袍を賜ふ又辛未江戸小石川の傳通院に移る正徳元年増上寺に住せらる（大僧正に任せらる縁山第三十六世なり）後目黒の地へ隠栖せらるゝ竟に享保三年戊戌七月十五日化寂あり（當寺ハ則祐天大僧正終焉の地なり）一世の行状并書寫しあふ所の名號の奇特ハ世人普く知所なり（開山臨終の頃まで名号書写怠られし人ありて是をとゞむ開山云く恵心僧都ハ一期の間如来を彫造し其中ハ往生をとくべしとて其中にして往生を遂られたり我も又弥陀の名号を書写して其中に往生すべしとて命終の日に至る迄一日も怠らるゝ事なかりしとなり）

妙法山法華寺 碑文谷にあり祐天寺の南半道斗にあり吉祥院と号す天台宗にして東叡山に屬す本堂本尊ハ釋迦如来脇士ハ文殊普賢なり（里諺に今存せる所の堂宇ハ飛騨匠某が作る所なりといへり）

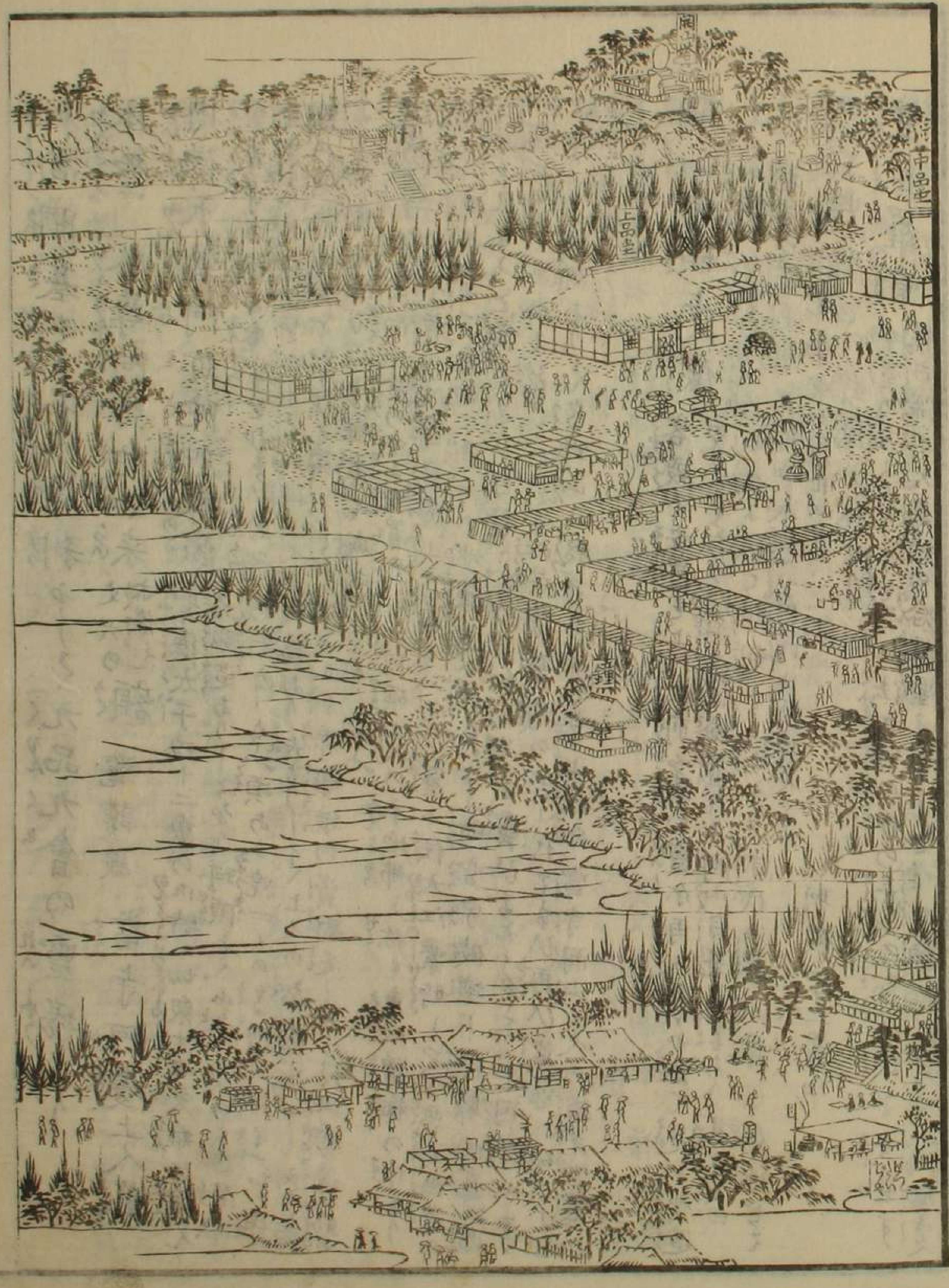
觀音堂（堂前左の方にあり本尊ハ十一面觀音の立像にして参籠の人此堂に通夜す） 榎木（釋迦堂の後左の垣添にあり至つての古株なり當寺開創已来のものなりとてその株に垣を繞す） 二王門 金剛密迹の二像ハ佛工安阿弥の作なりと

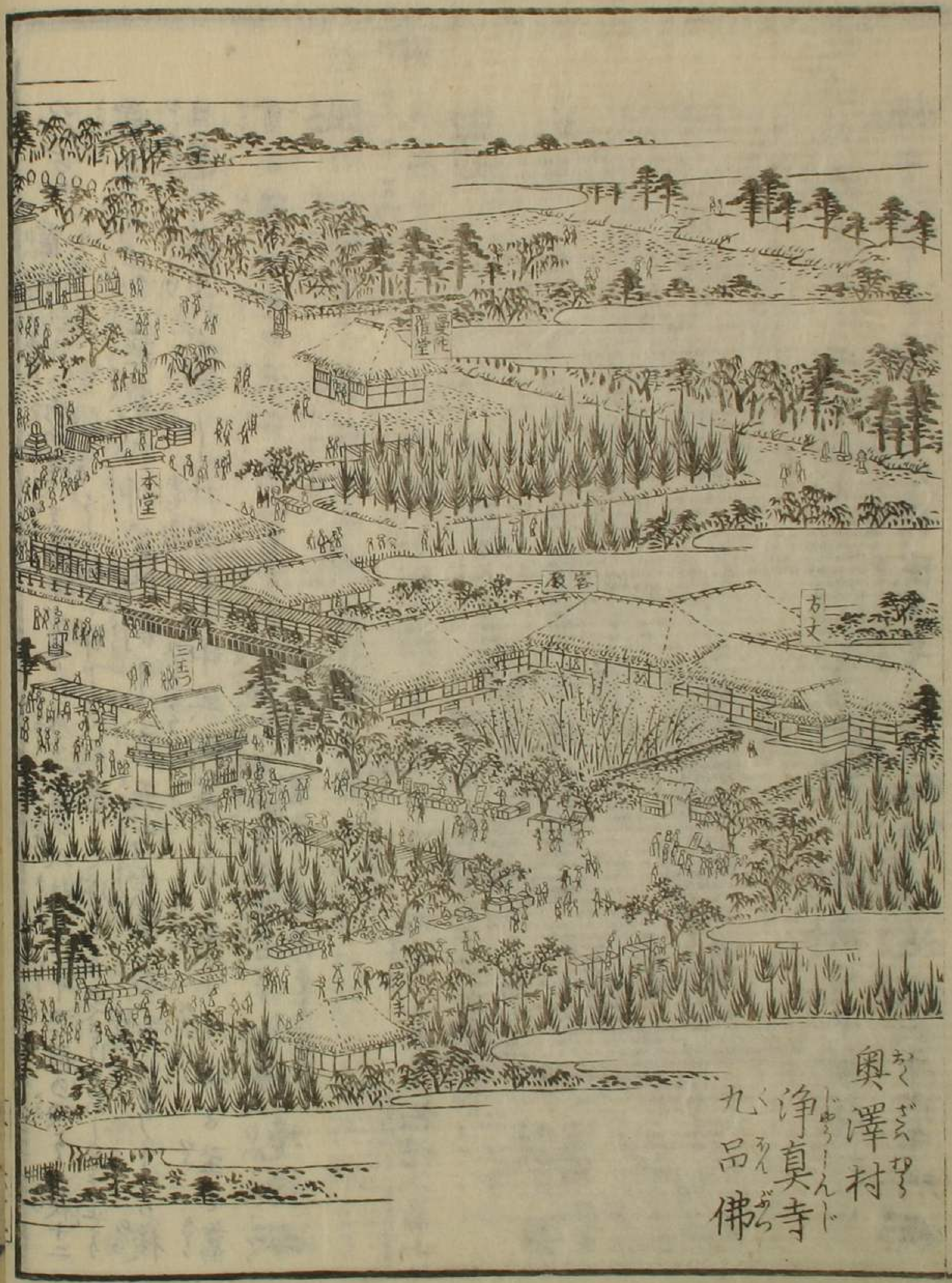
いへり（靈威尤著く流布世人尊信せりかるが中にも寛政紀元の年己酉の頃より後十二年斗の間靈驗著しく頻に都下の人群参して道もさりあへざりしが近頃ハ少し止むとぞ）

當寺其先ハ慈覚大師の開創にして天台宗の古刹なりしが後日蓮の宗化に歸し日源上人中興開基となる竟に元禄に至て舊貫に復し元の天台宗を唱ふ（今堀内妙法寺に安置せし日蓮大士の像ハ當寺よりうつせしとぞ）境内楓の二樹多く春秋共に頗る壯觀たり

碑文谷八幡宮 同所耕田を隔て南の方一町斗にあり相傳ふ畠山重忠の崇信せし御神なりといふ（神躰ハ秘物なりと云或ハ云束帯の銅像なりといへり）別當ハ天台宗にして法華寺末神宮院奉祀す（昔ハ此地の農民の内宮氏なる人社司たりしとなり此宮氏ハ重忠の家臣の遠裔なりといふ或人云八幡宮の西にあたる地ハ往古の鎌倉街道にして路傍に古碑ありしとなりされどもいつの頃にか此地の土民鎮守八幡宮の社地へ埋蔵しけりと或ハ日源上人大卒都婆に碑文を書して埋めし所の名なりともいへり又江戸麻布子といへる草庵にハ忠玄といへる沙門卒都婆一基を建しより碑文谷と唱ふるともありて共に詳ならざるを以て略せ）

九品山淨眞寺 碑文谷より一里あまりを隔て西南の方奥澤村にあり浄土宗にして唯在念佛院と号す（京師知恩院に屬せり）延宝六年戊午珂碩





奥澤村 浄真寺 九品佛

和尚開基まる所の浄刹にして九品九會の霊場なり

本堂　本尊阿弥陀如来　丈六の額　龍護殿　當寺珂慶上人筆

内佛本尊阿弥陀如来像　木像也　聖徳太子四十二歳の御時一切衆生の災難を除ん為に彫造ありしとかり　珂碩上人御年十八のとき深川霊岸寺の傍に庵室をむすび念佛修行ありけるに或暁一人の老僧此本尊を背負来りて其来由を示し珂碩上人に附属あり夫よりしく上人の智徳盛にして此霊像の縁賤の道俗利益をかうむる者ツ々かくして遂に九品佛彫造の資財足しかうハより諸佛天三万六千躰悉く成就しけりとかり

地蔵尊　本堂の向小堂の中に安置す　開山珂碩上人の本地佛と称す　恵心僧都の作なり　此尊ハ昔丹波國箕濃山に立せ給ひしをその麓に住む大江繁時といへる悪逆無道の猟人一時山に至て急雨に逢ひ件の地蔵堂に休らひし時堂宇破壊し佛躰雨露の為に浸されたまふを憐みて自冠りたる笠を尊躰に覆ひまゐらせしかし因縁によりて繁時一度死して冥府におもむくといへども此尊像繁時の苦に代りたまひ再び娑婆へかへらしむとかり　其後故ありてる野山に移しをかひしを了山法印當寺開山上人の道光を慕ひ是を附属ありしとかり

開山珂碩上人像　客殿に安置す上人生前如来の霊示再三なるに依て是を彫造ありしとかり此背像に添置れし開山自筆の書あり其文に曰

此像ハ如来の御告三度に依て彫刻まる所なり末代の輩此像に結縁せよ
現生の諸災難を除き未来ハ必浄土に導へし
万治元年戊戌七月廿四日　珂碩　四十二歳印

此故に世人除厄の影像と称せり

曼陀羅堂　本堂の左にあり中尊ハ弘法大師の作の三尊の弥陀像を安置す往古深川大島村の念佛堂にありしを堂守浄帖といへる沙門當寺へ移しまゐらする其餘五智如来および超載永劫佛五劫思惟佛等を安す此等の像ハ面ぬくらかにして他の像よ異なり

中品堂　同じ右に並ぶ中品中生中品上生中品下生以上三品の阿弥陀如来の像を安置す

上品堂　本堂に向ふ上品中生上品上生上品下生以上三品の阿弥陀如来を安す

下品堂　同左に並ぶ下品中生下品上生下品下生以上三品の阿弥陀如来を安す

以上九品の阿弥陀如来九躰を安置す各座像にして一丈六尺あまり佛像一躰毎に圓光ありて附まる所の小佛一千十一軀にて九躰共にあまれり是も開山珂碩上人の彫造にして開山常に一日三銭を貯へ造佛の費に充寛文四年より同七年に至て其間凡四年竟に九品の弥陀像全く成就まうけるを始めとかり此本尊も初ハ霊岸寺の地にあまりしか洪波の為に破らるる後延宝六年戊午ことごとく此地に移しまうりとかり或云珂碩上人諸堂不成しく遷化せらるる後来珂憶上人河州玉手山安福寺より来りて建立せしよし九品堂の額ハ何れも珂憶上人の筆なり

開山堂　上品堂の後古城跡堤の上にあり　開山珂碩上人七十二歳の影像なり椅子にかかり杖を脇に置とあれとも立像にして合掌せり　奥澤九品佛縁起　躰損あり　狩野可孔

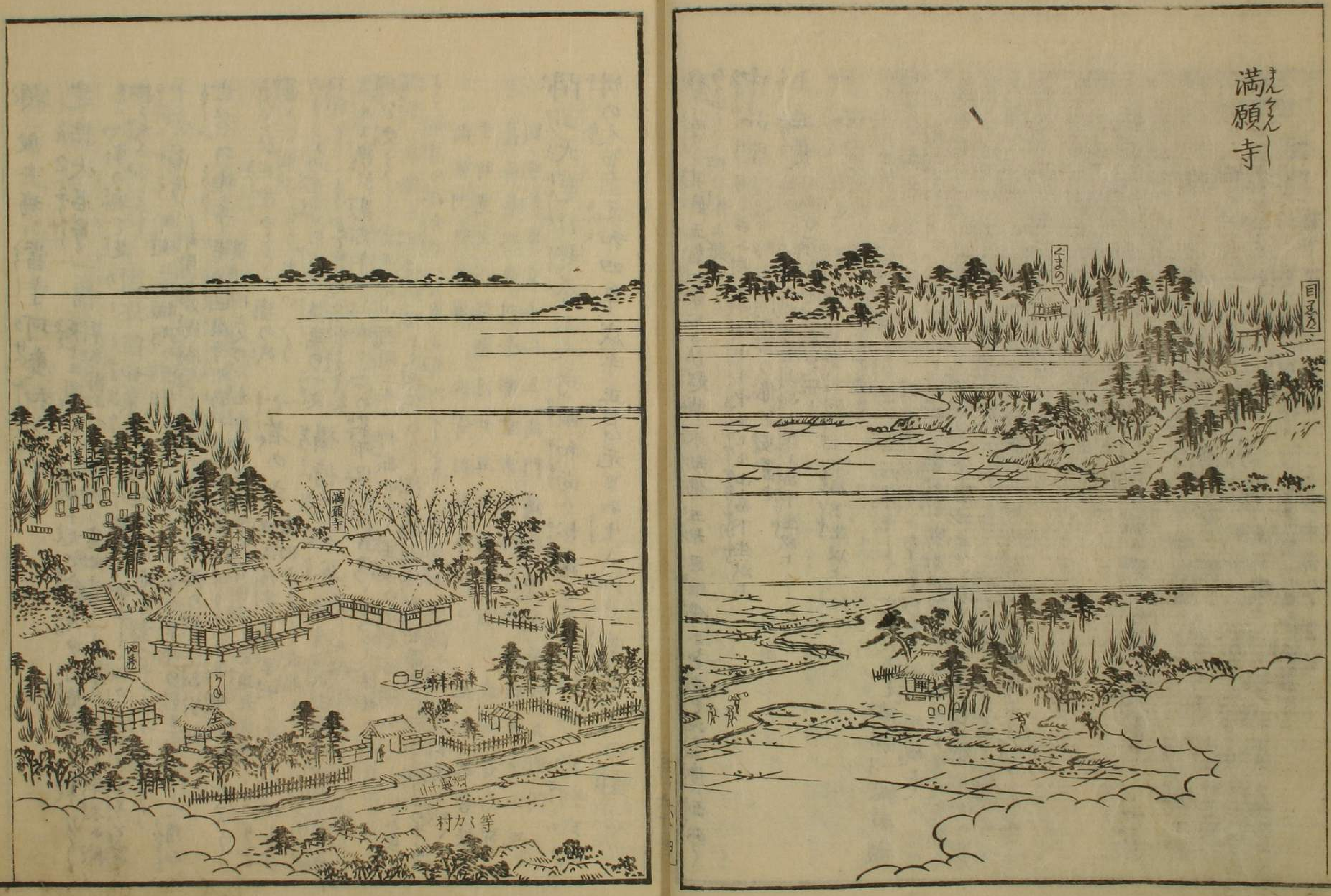
開山珂碩上人廟　開山堂の右のつづきにあり奥の院と唱ふ近頃石の龕を造り傚く

星の井　開山廟の前小坂の上にあり　有信の人偏に称名すれハ白日といへとも水底に衆星の光を見るといへり

鐘樓　本堂の右にあり九品の阿弥陀如来の像を鋳上くる寛永五年に造る所の鯨鐘なり

樓門　同じ所にあり樓上中央に二十五菩薩の像を安置す樓下中央に金剛密迹の二王の木像を置り

満願寺（まんぐわんじ）



額 般舟場 當寺珂慶和尚筆

芝枯大名号一幅 長十三間巾九尺白布十反を合せ用ゆ珂憶上人の筆なり草木國土悉皆成佛の意世に佳しく書れしが故に草木に掛をハ六字の通りを芝枯るが故に名とす

阿弥陀如来画像 珂憶上人の筆中にて細字の六字名号をもつて佛躰の御姿を書つらねし像なり

十念名号 珂碩上人臨終の頃筆せられしとの名号と云故に名残名号とも号く其余高徳の輩の名号多し徒弟の輩師の別れを惜みて請ひ

亡者の帷子 昔芝西應寺町鳥羽屋三郎左衛門なりける人の妻難産にて死しけるを後珂碩上人の十念脉背を授て冥府の苦みを遁れ成佛しけるよろこび其證として亡霊の残し置ける帷子なりといへり

亡者の文 堤氏何某の先妻女の死霊珂碩上人の徳化によりて成佛しけるよろこびに託あまりかの先妻の亡霊後妻の一文不通なりしの手をかり用ひて出る文ありと云

攝待大茶釜 當寺に収む毎年四月千部の時に託出し此茶釜にて茶を煎じて衆人に施す寛文年中山城宇治の茶師宮本仁左衛門といへる人継母の怨念によつて病を受けしが當寺開山珂碩上人の利益にあり深川大嶋村常念佛堂の堂守浄正のすゝめにより病頓に平愈す其頃珂碩上人再興ありしにより仁左衛門より報恩の為宮本仁左衛門より寄附申しけるとなり来由ハ寺記に詳なり其銘に曰く

南無阿弥陀佛　奉寄附鑵子一口　為二親菩提
于時寛文八年霜月廿五日當九百日　武州豊島郡
葛西荘大島村念佛堂常住物沙弥浄性施主山城
國宇治里宮本仁左衛門鑄物師釜屋八右衛門

開山大蓮社超誉上人珂碩和尚ハ松露と号じ俗姓ハ野村氏武州の人なり元和四年戊午正月元日に生る江戸覚真寺の圓岩に投じて薙染し十八歳にして業を珂山和尚に受（珂山和尚を下總生実大巌寺に住を）和尚後年武陵の霊巌寺に住持せる頃師も亦従つてかしこに移る初越後國泰叟寺に住し後此地の郷民の招に應じ歳七十七の時武州に歸り世田ケ谷奥澤に幽棲を遷（當寺）遂に元禄七年甲戌十月七日化寂を（本朝浄土高僧傳に元禄八年報壽八十許にして入寂せしとあるハ誤なり）師の姿貌温雅にして慈恩尤深く奇験孔多し凡在世の感應ハ勝数をへつべく其うち最煥灼としる人々是を傳ふ（以上浄土傳燈系図上人傳本朝浄土高僧傳の意を換る）

當寺ハ不断念佛の道場にして閑寂玄隠の浄舎なり毎年四月三日より同十二日に至る迄十日の間阿弥陀経千部讀誦修行七月十六日より同十八日迄虫拂にて當寺什宝を出し諸人に拜せしむ

此寺境内ハ昔小田原北条家の属将吉良家の老臣大平左馬（或出羽守とも）といひし人の構へなりし塁隍の旧跡なりとぞ今も北より西南の方へ

繞らし堤の形空堀の跡を存す後門の方ハ大沼ふかくありし
とあり今ハ耕田となれりとぞ

大平山 奥澤新田村にあり大平出羽守の砦の跡なりとぞ
按ずるに等々力村満願寺所蔵の天文弘治の古文書に大平清九郎と云ふ名往々見え
又大平左馬と云も此人のゆかりなるべし

致航山満願寺 二子街道等々力村道より右にあり新義の真言
宗にして山城醍醐報恩院に属す開創の時世詳ならず中興
開基を定栄法印と号す慶安年間寺領の寄附の朱章を賜ふ
本尊ハ大日如来なり當寺ハ世田谷の吉良左兵衛佐源頼康の祈
願所にして其頃ハ頗る盛大の寺院なりしとあり 世田谷私記追加に云 當時往古政忠の男
經辨住職を豪徳寺所蔵の吉良系図にも政忠の子経辨満願寺開とあり當寺ハ
天文弘治天正等の年号ある吉良頼康北條氏康氏政等の證状或ハ書簡等すべて十八通
并あり其文中に世田谷深澤村の満願寺とあるハ其故を志られ昔等々力ハ深澤に属し
小名なりしか又ハ深澤より等々力へ引移しけるか今考へがたし又同古文書の
中一通にを医王山満願寺ともあるハ後世
致航山に更めしならん猶可考
總門の額致航山の三大字ハ小篆
にして廣澤先生の筆又本堂の向拜に揭く満願寺と書せしハ

息男九皐の書なり

大蔵村年貢八十貫文皆納　石井戸新開弐貫文満願寺へ一貫分
先役ニ七百五十文之済　○先ニ二百五十文徳　御免之
芝村十一貫文皆納　高田分二十貫文皆納
瀬戸河原十二貫文皆納　熊沢分五貫文　皆納
弘治二年丙辰十二月十八日

吉良家朱印

世田谷之内満願寺之事谷中屋敷田地分之田畑任先規之旨寺家
再興有之諸役以下動以一切停止之者也委細於佐渡守可申分候
之致白

天文廿一年壬子二月大吉日　　左兵衛満佐判
　　　　　　　　　　　　　　芸音寺

世田谷之内深沢村満願寺分諸役等諸役之事一向不可有之
為後日證状如件

天文二十三年甲寅卯月大吉日　　木工助頼康判
　　　　　　　　　　　　　　満願寺

於当山満願寺再興了為永代諸役不入者也尚就子孫弥
不可有此旨仍為後日證状如件

甲寅二月吉日　　木工助頼康判
　　　　　　　満願寺

此古文書満願寺并ひ農家などに散在しく全くうつしとめつ

廣澤先生之墓　同境内堂より後の方岳の上にあり
廣澤先生ハ細井氏通称を次郎太夫と称へり或ハ思貽菴蕉林庵等の号あり
江戸に遊んて書法を雪山にまなび詩冠ハ柳澤侯に仕ふ後致仕しく城西
青山に隠る紫微字様觀鵞百譚撥鐙眞詮篆體異同歌奇文不載酒字扶長歌
等の著述あり碑面左のごとし

正面　廣澤先生細井君之墓
左面　豪德院不狐有鄰大居士
背面　諱知愼字公謹號廣澤姓藤原氏
　　　細井父知治母山本氏
　　　萬治元年戊戌十月乙亥八日壬申
　　　生遠州懸川
　　　享保二十年乙卯十二月己丑廿三
　　　日戊子卒于江戸城西于寝享年七
　　　十八
右面　孝子知文建

其余先生の父母及ひ息男九皐等またく細井一家の塋域と地ほしく垣をめぐらし
ろ中おこなく同姓の人の墓碑あり孝子知文とハ則九皐のことをいへり

赤坂御門　糀町の方より青山へ行道赤坂への出口あり此御門ハ
北斗形とて江戸御城の御構へ多き中にも殊更勝れる縄張

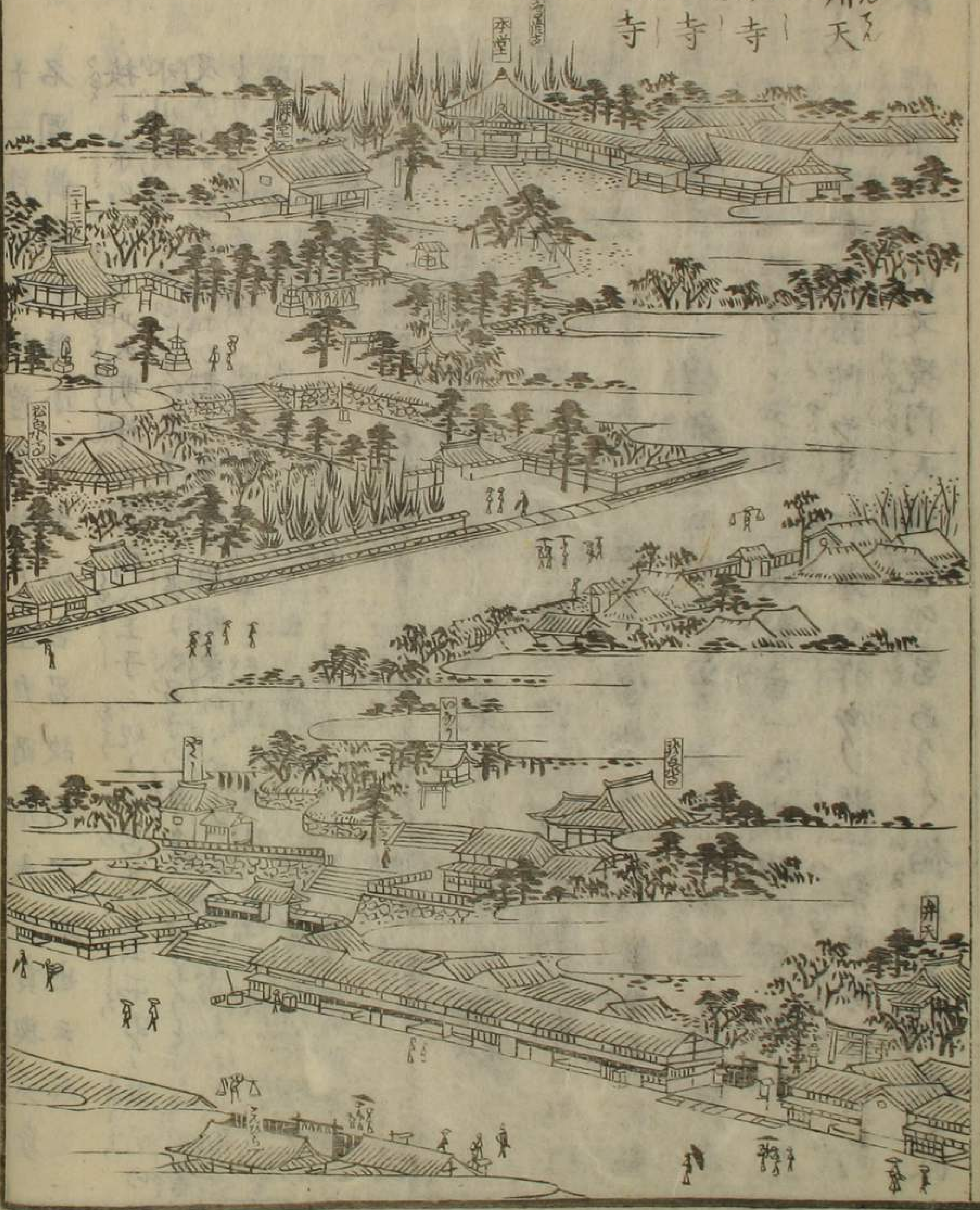
赤坂氷川社

なりとのみ 或人の説に赤坂ハ畠山の辺の坂なれハかく云と按に赤坂の地名ハ永禄二年小田原北条家の所領役帳にも江戸赤坂六ヶ村千葉殿所領也とあり又武蔵國風土記に荏原郡赤坂庄とあり今ハ豊島郡に屬せり

氷川明神社 赤坂今井にあり 別當ハ
聖護院派の觸頭にして大乗院と云 此所を世に三河臺と呼ふ天和の頃松平參河守様の御屋敷ありしゆへ名とす 祭神當國一宮に相同し
赤坂の總鎮守にして祭礼ハ隔年六月十五日永田馬場山王權現
と隔年に修行す
享保十五年己酉今の地に遷座社を造營ありと云 江戸名勝志樵鹿子等の草帝に當社元一木村にありしを
按に當社を古呂故宮とし又享保中一木より今の地にうつし奉るよし諸書に見え
れとも詳ならす寛文江戸図に古呂故宮と称するもの今の一木に記しく
氷川明神同絵図に今の地に記しあり去ろハ各別の社なるへし
江戸名所記に天暦年間江州甲賀郡に蓮林と号ける沙門此所にて四明の法灯をかゝげ
念三十の観行を凝し東國遊化の頃此所にて一夜を明し夢中に靈木を
得て土中より十一面観音の像を感得し安置し一木観音と称す蓮林化
の後治暦二年丙午関東大に旱を万民當社に雨を祈るに験あり夫より
氷川明神と崇めまつるとあり

古呂故天神社 同所一木の地赤坂田町にあり或ハ小六に作る 別當ハ
洞家の禪宗にして清徳寺と号す
武蔵國風土記残編曰 荏原郡赤坂庄小六天神或
古呂故圭田三十五束三毛田天武天皇三年甲戌
十一月始行神禮有神戸巫戸所祭大巳貴與少彦
名園韓神也號小六者以古呂故岡之名也云云
按に紫の一本に此大明神元當國八王子の辺に木呂子と云所あり其所の
氷川明神を此所へうつせと道灌の書に木呂子の某なと云すありと云又同書
及び江戸名所咄の書に慶長の頃關東の小六とて美貌の聞えある馬追
ありしか此赤坂に住を常に氷川明神を篤信し後其家富て依て社の破壊を
再修す故に後に小六の宮とあれとも記と等しからし江戸砂子に小六明神を
日本武尊の垂跡なりとあり諸説紛々として詳ならす姑く風土記の説を用也
へき欤猶可考のミ

信康山龍泉寺 同所一ツ木町道より右側にあり 浄土宗にして花洛
知恩院に属せり開山を隨流和尚と号す寛永十一年の開創なり
當寺佛元和尚ハ扶宗の志厚く曾て字信録千巻を著し刊行
して普く学徒に示せり尾州の産なり 當寺に子安觀世音を安
置せり聖觀音にして傳教大師の作なり又同し相殿に薬師佛
をも安せり同作なりと云 世に一木觀音一木薬師と号す 本尊ハ立
像御丈三尺餘の弥陀如来行基の作なり脇士觀音勢至此両
像ハ作者しれす 又境内天満宮の宮ありて稲荷を相殿とす



一木辨天　龍泉寺　松泉寺　専修寺

天満神の神像ハ東叡山慈眼大師作らせらるゝ所なりとぞ
云傳ふ
平河山浄土寺　源照院と号ス同所龍泉寺より半町程南の方
同し側ニあり浄土宗ニして縁山ニ属す本尊阿弥陀如来ハ座像
四尺餘作者詳ならズ開山ハ教誉聖公上人と号す中興を源蓮
社本誉利覚一故と号けるゝ當寺昔ハ御城内平河口の辺ニ
ありしを元亀三年今の地ニ移されしと云
一行山専修寺　同所寺町ニあり當寺も縁山ニ属する所の浄刹
ニして本尊阿弥陀如来ハ恵心僧都の作丈三尺開山ハ寂蓮社
曇誉上人と号ス昔ハ青山ニありし勢至菩薩を安せし草堂
なりしか永禄年間開山上人一宇の梵宇とし其後赤坂氷川
明神の辺ニ移ると又寛永ニ至て同寺町ニ地をかへらると遂ニ
元禄ニ至て今の地ニ移す　往古より安置の勢至菩薩の霊像ハ今於當寺ニ存せり金銅ニして甚古佛なり

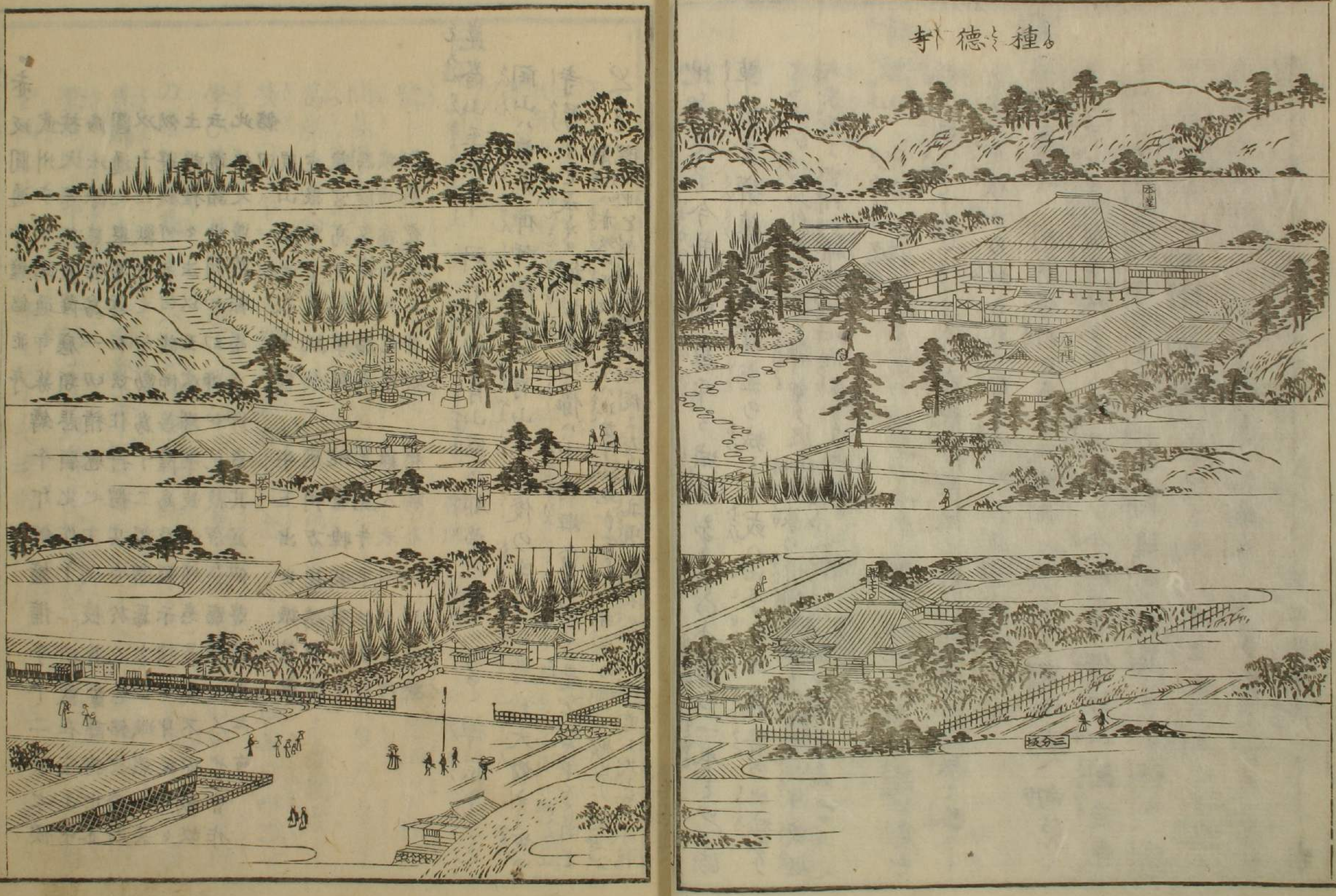
一木原　今赤坂傳馬町の裏通僅に一木町の名を残せり昔ハ此辺なべて一木原といひ矢盛荘七郷の中なる古き名なりと云 中古より上下と二ッに分り川上一木ハ四谷鮫か橋の辺をいふ今四谷にある坂下禅閣薬王寺といふ薬師如来の霊場あり昔ハ境内に大木の榎ありし是を一木と云 又下一木ハ此赤坂にして同所清岸寺にも薬師ありて薬王寺の霊像と同作にして共に一木薬師の称ありむかしハ此寺にも大樹の榎ありしとぞ後の人一木と書しを後大樹なりしより一本と書改めたると云伝ふ 北条五代記 大永四年正月十三日北条氏綱上杉朝興に打勝敵の首とも實検し一木原に獄打揚作法のごとく勝鬨を執行なるよしみえたるも 北条家の所領役帳に大田大膳亮所領の中に一木貝塚の地名を加へより貝塚を糀町にありしかれハ糀町の辺も一木の内なりといふ 或人云此地町屋にありしハ天正十九年の頃なりと

狩野興意墓　同所三分坂下霊鳳山種徳寺の境内にあり當寺ハ大徳寺派の禅園にして昔ハ相州小田原にありしを天正十九年糀町に引き後又當所に移さる開山ハ東光知灯禅師と号す
医王水も當寺の霊泉なり

今井古城址　氷川明神の西北の方松平藝州侯の中屋しきの地をいへるも今井四郎兼平か城址ありといふ紫の一本といへる草紙にハ齊藤別當實盛の城とし或ハ田子先生義賢の出城なりともいひ傳ふれとも共に詳ならず 北条家の所領役帳に大田新六郎渡辺丹後なと云る人此地を所領に加ふ又北条氏家系に宮内少輔勝行北条家より此所を所領にすとあり

赤根山　紀州公御中屋敷の地をいふとぞ昔ハ此地に多く茜を産せし故に茜山とよびたるとなり今紀伊國坂と呼ふ地昔ハ赤坂と称へしとなり赤根山の坂なれハかく赤坂とぞ号けりと云

圓通寺舊跡　同所寺町にあり此地申の方より寅の方へ向ひて下る坂を圓通寺坂と云も此故なり今此地に佛智山圓通寺ととなふる日蓮宗の寺あれとも古の圓通寺とハ異なり往古廢せし圓通寺の洪鐘ハ圓通坊といへる沙門建立せる所とぞ銘ハ深草元政法師の撰せる所なり其鐘今ハ亡びて年ひさしといへとも古きを存せんか為草山集に出るを以てこゝに記して其旧跡を失ハさらしむ



種徳寺

赤坂圓通寺鐘銘並序

武州赤坂圓通寺募鑄千斤銅鐘備弁十二辰之候
按大集經菩薩應類悲願化作十二時獸在宝山中
修法縁慈而為一切精魅之主制彼撓亂護持世界
圓通之舉其意在茲住持僧某介於人乞銘於余因
以十二獸弁之句勤為十二顏贈馬客曰雖然如其
似遊戯何余曰諸佛菩薩為聲類示種々身現種々
土設種々法以至吹螺擊鼓鳴鐘悉是莫不遊戯故
云遊諸世間如幻師如児戯余亦窃學之人世會作
此銘又遊戯翰墨為佛事其為似遊戯也亦宜

銘曰

鼠山流光人未驚
虎狼野干氣縱横
龍宮高處擊華鯨
馬腰忽變聖胎成
猿啼霜降月色清
狗不夜吠王舎城

牛王出世振梵聲
兎角方便誘群情
蛇室睡破覺心生
羊鹿牛車休復真
雞人未唱客先行
猪觸金山轉崢嶸

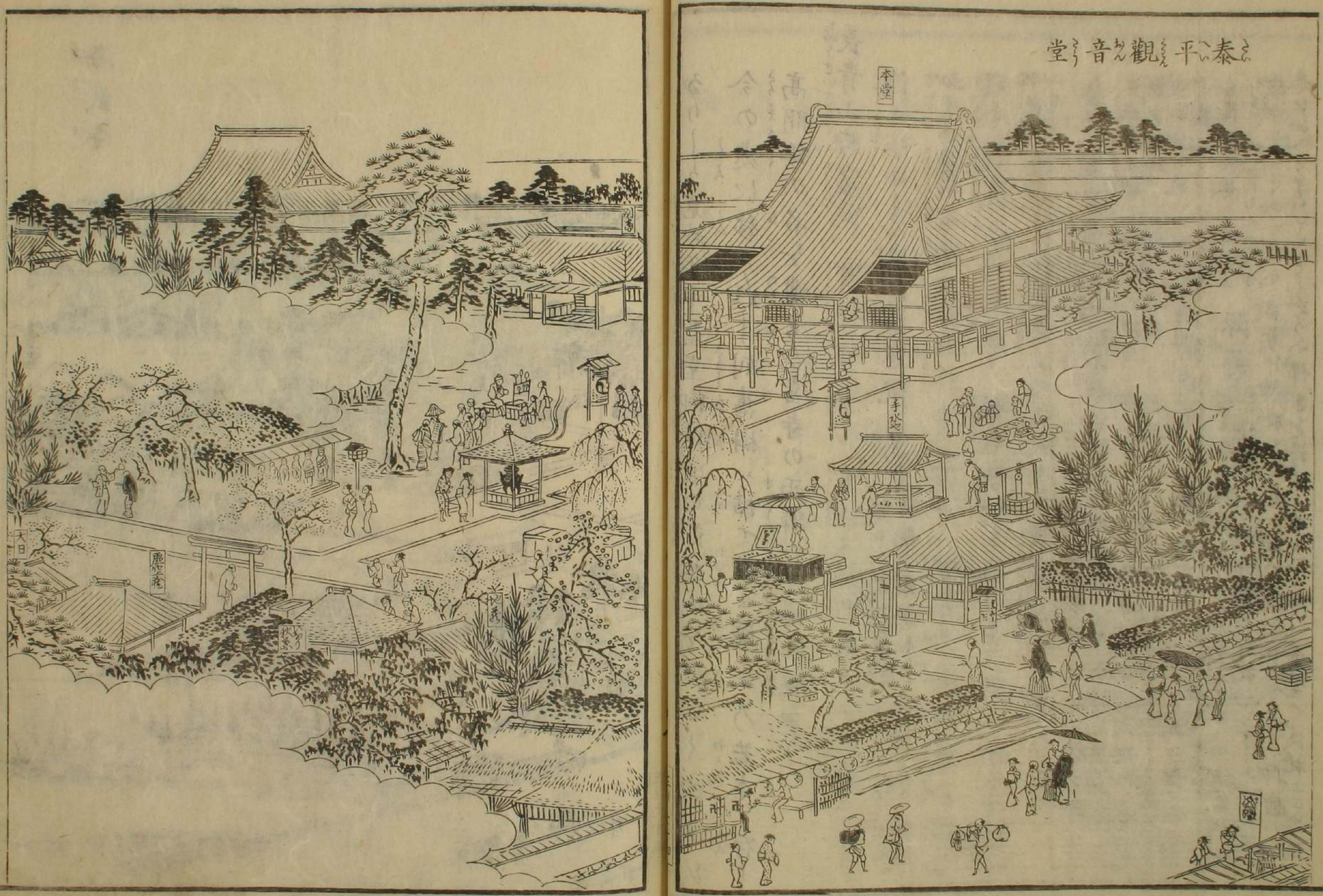
崑崙山玉窓寺　同所右側青山家の邸第の間にあり禪宗なり
開山ハ普光禪師開基ハ青山氏忠俊の女玉窓秀珍大姉なり故に
寺号とも本尊観世音の像ハ中将姫沓を以て是を製する所と
いふ
青山ハ赤坂の西渋谷より八北なり此地ハもとより麻布の郷に属せり天正の
後此地を青山因幡守忠俊にたまふ其頃ハ渋谷筋への街道も共に構への中
ゆへに殊に廣かりしなり其中間に小路を開き兄弟路を隔て住居せられし
なり忠俊の寺ハ道より北にありて玉窓寺といふ則當寺是なり又道より南にあるを
幸成の寺とす今ハ梅窓院是なり或人云此地ハ天正の頃山口重政の第宅ありしを
後年の高木主水正正次に地を割て与へられしとなり左ありて後此地を青山
家に賜ふといへり其地の廣かりしにより
いつしか青山と唱へ来るまゝなり

百螺山鳳閣密寺真言教院　當寺ハ醍醐の院室にして戒定慧院と
號し諸國呪驗末寺の總網なり本坊ハ和州吉野郡鳥栖山に在て
開基根本理源大師諱を聖寶僧正と號す光仁天皇乃皇子
葛聲王の令子なり弘法大師の内弟真雅僧正に投して剃度し
螢雪の功年を積南都の諸名公に叅して法相三論華嚴唯識を
學ひ慧業日々に進ミ給ひしかハ萬乘の聖主一時の公卿尊師
の徳を仰慕しまつる事浅からす時に宇多天皇寛平元年己酉
尊師年五十八大和國金峯山に毒龍栖てあり霖雨洪水五穀
登らされハ山中修歴の徒もこれかために癈絶をこゝに於て天皇宸襟
を悩し給ひ師に詔を下して毒龍を降伏せしむ師勅を奉りり

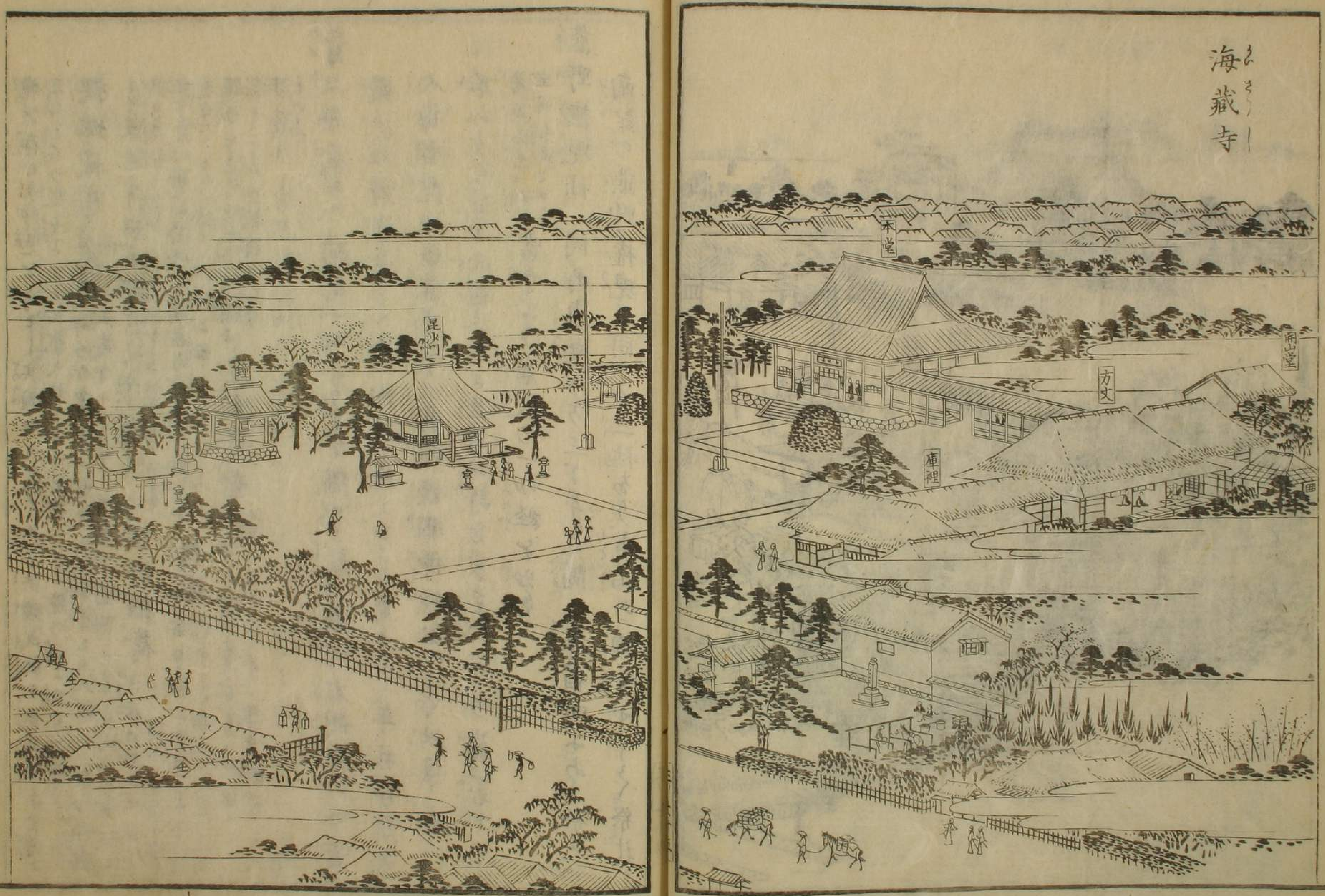
金峯に分入て法威を震ふて龍を伏し抖擻修行の道を再興し次て奏聞を經て吉野郡に一寺を創建し給ふ鳳閣寺是なり即尊師の上足貞崇僧正をもつて第一世とし昌泰三年始て此處に於て峯受灌頂の密法を興行し爾来七百餘年を經て元禄年中中興俊尊僧都寺號を東都に移して一派總綱の役寺とし　神祖御由緒の地遠州白山二諦坊康松院を兼領して天下泰平國家利民の御祈願所とし毎年の四月八日七月十九日には順逆二峰の神事柴燈護摩の儀式あり此日諸人群参す當寺本尊不動明王は靈驗の尊像にして里人出世不動尊と称して常に詣人あり脇壇には神變菩薩理源大師の像を安置す寺内に三峯權現稲荷の小祠あり境内に櫻樹有暮春の頃清賞あり此樹は當寺の一代俊賢僧都葛城山より種を取しめてこれを昌平坂の舊地に殖て髙間櫻と名つけらる名木なりしが寛政年中聖堂御造営の節替地を賜ひし當寺此今の處に移されし刻舊樹は枯て僅に蘖生乃若木と存し高間櫻の名を遺せり當寺の西隣は即梅窓院なり

長青山梅窓院　實樹寺と号す青山久保町道より左側にあり淨土宗にして京師知恩院に屬す　當寺は青山家累世布金の佛閣なり　本尊阿弥陀如来の像ハ聖徳太子の作なり當寺ハ寛永年間戴蓮社頂誉冠中南龍和尚開基し觀智國師を請して開山祖とす　國師ハ縁山中興開山なり　惣門の額長青山の三大字ハ黄檗悦山の筆なり

泰平觀世音　自然銅にて丈三寸三卜の千手大悲の靈像なり天竺佛と称して不空三藏傳持し鑑真大師天平十五年来朝の頃齎来し聖武帝に献り南都大佛殿の傍にありしを源頼義公兄弟奥州追討の頃此靈像を奉持して陣中守護とす凱陣の時奥州伊達郡に安置ありしが故ありて青山家に傳り後又當寺におさめしと云靈驗いちじるしくて常に參詣絶す　羅漢堂　中尊ハ紫銅の釋迦左右ハ十六阿羅漢并ひ二十五菩薩等の像を安置す何れも順誉上人の作なり　鯨鐘　樓に揭る宝永七年十二月當寺第八世法蓮社壽誉鐘的上人の時旧鐘を鋳改んとせしに或夜龍女夢中に告て云く我今畜身を解脱せんが為一面の鏡を携来れり師願ハくハ是をかへてまひくをもとめて佛果を得せしめたまへとあり夢覚て後枕上正に一面の



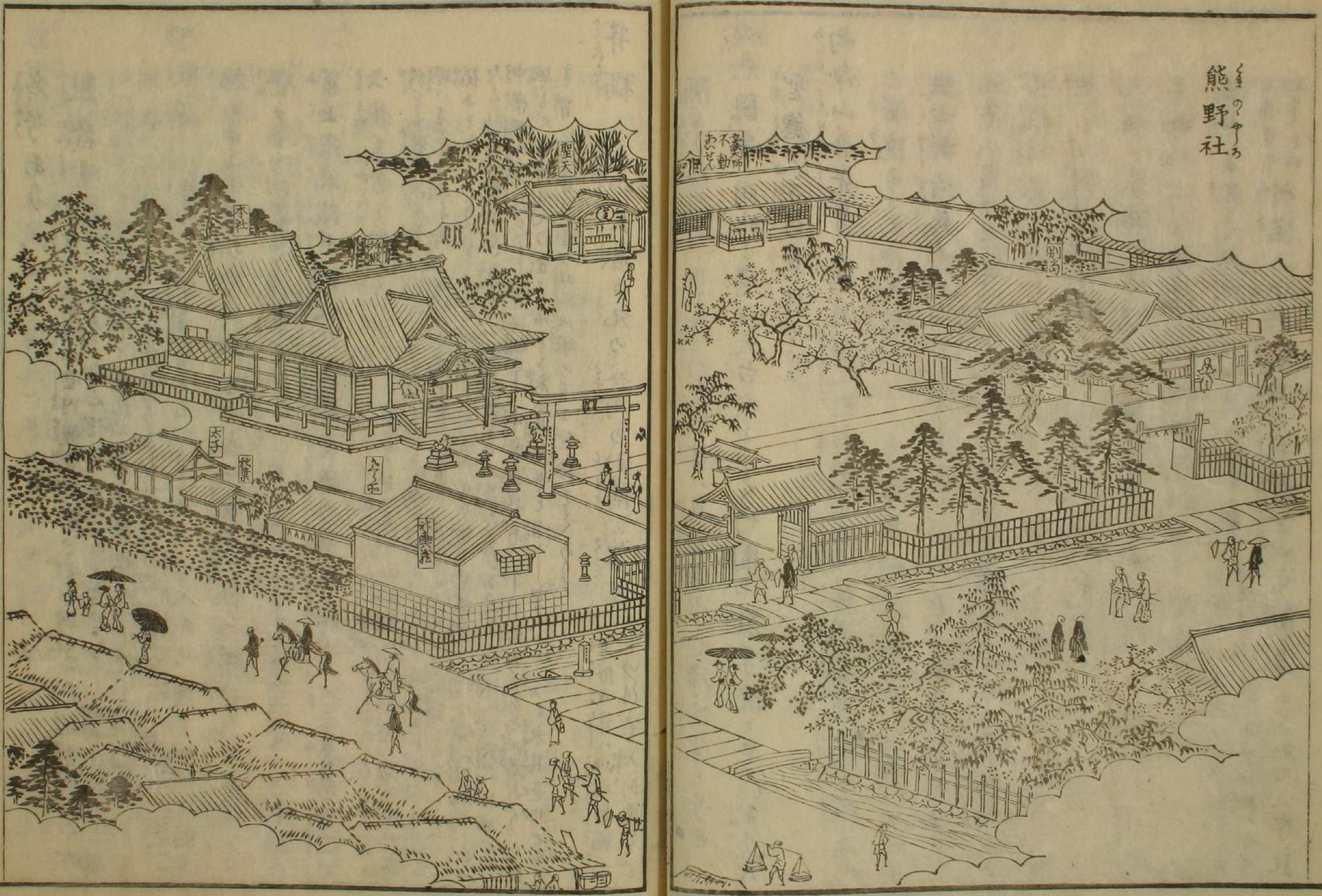
泰平観音堂


海藏寺
かいさうし
本堂
開山堂
方丈
庫裡
毘沙門
鐘

鏡を存せり所是を寺とし其鐘をも加へて終に洪鐘成就を依其澄として愛に
ゑゑし所の龍女は宝光祐龍大姉と法号を授へられ鏡の面に其号を鐫ましむ
楔地蔵尊 慈覚大師の作なりといふ當寺九世順誉上人北總行徳の海濱
湊村の法傳寺にいませし頃夢中霊應によりて同所の海岸に
しく感得あり海岸楔ありて本尊を得らし
於て其楔と思ひしハ則此なるなり故に名とも
百済稲荷 享保の始和州百済
より像山へ下向の僧に
記しく此梅窓精舎に鎮座ありて永く衆生を
度せんとありて依て一社に奉すと云ふ
拾櫻 當寺第二世峰誉上人門
前にして苗木を讀ひて
親栽られしとて今堂前に
存せる所の垂枝櫻是なり
虚空蔵堂 卵塔の奥にあり本尊ハ座像にして
法尺二尺ありてあり當寺順誉上人
作られし
といふ

青山海蔵寺 同所一町ちまを隔て乾の横町右側にあり黄
檗派の禅宗にして始ハ海蔵庵と号て寛文十一年井伊侯夫
人掃雲院殿の営建なり其頃鉄眼禅師をして此草庵に
居らしむ竟に正徳三年に至て公許を蒙て一字の蘭若とす
菊岡沾凉云開山宝州和尚と云ミ 當寺より唐板の一切経を出せ
熊野権現社 同所東南の方三丁斗を隔て原宿町にあり祭る所
南紀の熊野権現に同しく三社あり青山の鎮守にして祭礼ハ

隔年九月廿一日に修行も別當ハ真言宗にして浄性院と号を
心見観音 同北に隣る天台宗にして竹園山教学院と号ス本尊ハ
聖徳太子の真作といふ
南命山善光寺 同所百人町右側にあり信州善光寺本願上人
の宿院にして浄土宗尼寺なり本尊阿弥陀如来ハ丈長一尺五寸
脇士観音勢至の二菩薩ハ共に一尺てあり称徳天皇の景雲
元年八月十五夜法如尼和州當麻の紫雲庵にて念佛誦持の
頃信州善光寺の如来来現ありしを拝しまり直に一刀三禮
にして其尊形を摸さる是則當寺の本尊なりとも
當寺ハ永禄元年戊午の創建にして始ハ谷中にありしを中興
光蓮社心誉知善上人明観大和尚の時宝永二年
台命に依て此地へ遷されるとあり 今谷中に善光寺坂と号るハ其旧地なるか故にして其旧跡ハ今の
玉林寺の地なりと云 什宝に中将姫自の毛髪を以て製造せる所の六字孔



熊野社（くまのゝやしろ）

名号あり

觀音堂　本堂の左に並ぶ堂内観音百躰を安じ本尊ハ聖観音にして其丈二尺ばかりあり恵心僧都の作なり當寺むかし谷中にありし頃火災にかゝりし時自ら火中を遁れ出給ひし霊像なりとて故に字して火除とも又ハ火災の時榎に飛うつりしにより榎観世音とも称するといへり

斥候塚　一名を去我苦塚ともいふとあり百人町の通り田村下総矦邸の中にあり相伝ふ渋谷の金王麿斥候の塚なりと此塚に登れハ四方を顧望すれハ二三里か間ハ手にとりつへく遠くハ冨士筑波信甲相武の青嶽房總の翠嵐画くかごとく憂悲苦悩を去依て号とすといふ　或人云此ものゝ塚のたくひ府中むさしのゝあたりあまたかしこにあり古へ府中野火留のあたり迄一向の原野にて行とも秋の果もなく月の入へき山の端さへなき名のみしあるの大原なとハ旅人の道に迷ハさらん為に所々にかゝる塚を築き置て其上より望めハ道筋ことくく見ゆる様にそなへしものならんといへり又府中の北に冨士見塚或ハ佛の岱八国山なとのたくひ四五箇所ほと存せり此所にあるも又其たくひなるへし又或人云去我苦塚と云ハ申楽塚の誤なるへし昔此所にて申楽興行ありし旧跡なるか故に此名あり斥候塚も又見物の人の登り居たる故に物見塚と唱へしなるへしと云々未其是非を志らす昔の鎌倉海道の旧跡此塚の下に僅残りあり

笄橋　青山長者か丸の谷間の小溝に架せり　里俗云昔ハ此小川を龍川とよひ大河なりしと云々

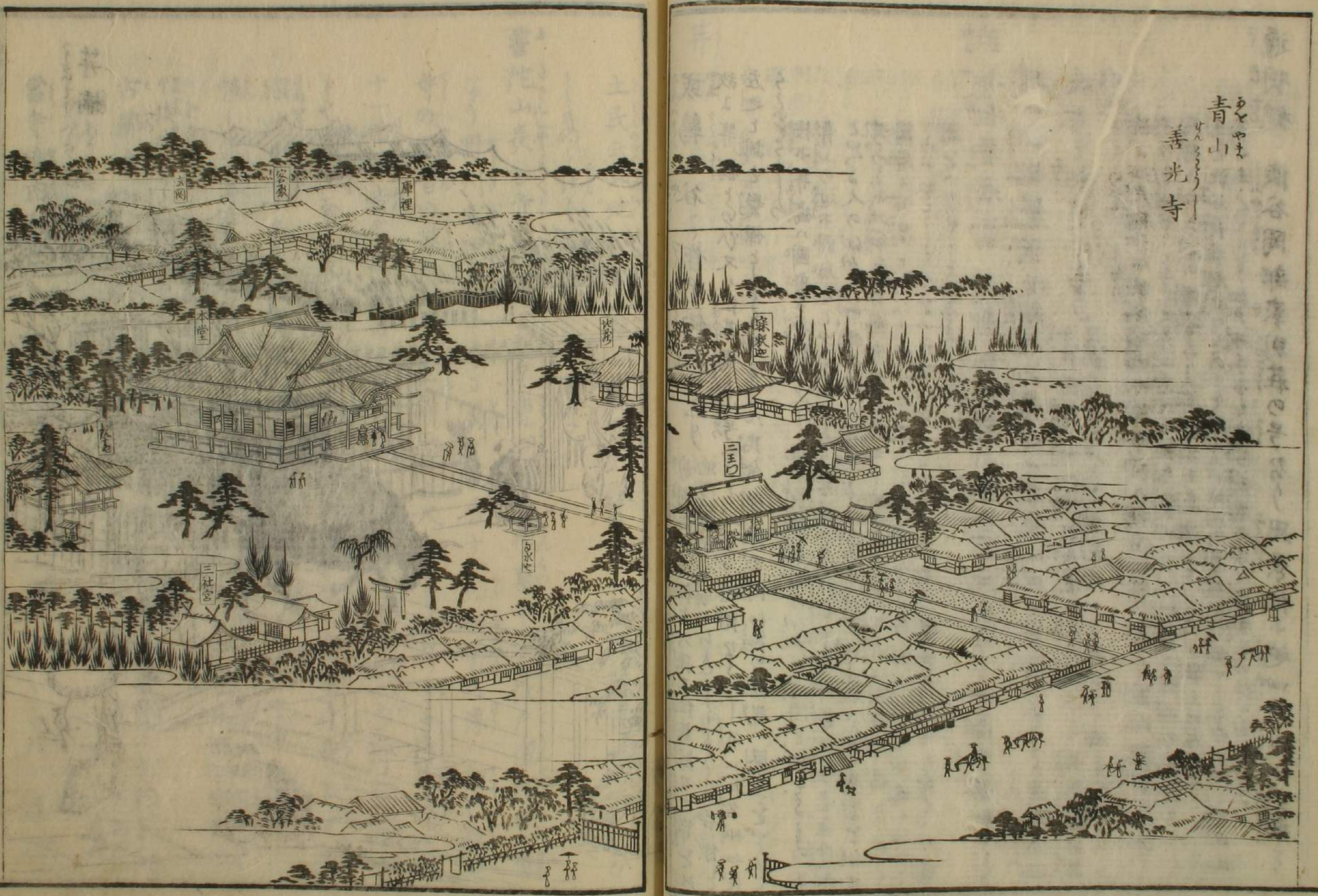
或鶉か谷に作る鉤匙とす　菊岡沾凉云往古六孫王経基佩刀の笄を此地の関守に与へられしにより名付と故に笄橋といひ又ハ経基橋とも号るといへとも臆説なるへし　笄ハ和名抄加美左之と訓せ髪搔とし可ならん　其余髪搔に因むの諸説ハ繁きをいとひてこゝにもらしつ

按に笄橋ハ國府か谷橋なるへし　世に長禄年間の江戸の旧図と称するものに青山の辺に國府方といへる地名あり永禄二年北条家の所領役帳にも森弥三郎といへる人の江戸の所領の内に國府方といへる名を注しかへたり是等を合せ考ふるに此所を昔國府方と称せし地ゆゑ其谷に架せし橋なれハ國府か谷橋と唱へしなるへし　やといハ通音なり　俗に谷間市谷越谷鳩か谷なといふにひとしくやとのみ唱へ来りしより後人髪搔に因てさまくの臆説をハなせしと見えたり

渋谷長者墳墓　同所松前家の第宅の地にあり小高き塚にして頂に松樹繁茂す相伝ふ應安の頃迄此地に冨農ありて是を渋谷長者と称せしとあり　今同所百人町の南を長者か丸と唱ふるも其宅地の旧跡なれハさハいふとそ　其長者か子孫近き頃まて幽なる百姓にてありしとあり

按に江戸砂子に渋谷百姓町岡部家の別荘の地ハそのかミ冨民慶福といひし者の宅地ありとあり又青山恩田の松平藝州侯の別荘に稲荷の叢祠ありて其前に古き石の燈籠あり其棹石に康暦二年十月日領主四郎太夫とゑりたるを是を渋谷長者建立のものとも御ハ四郎太夫慶福なと称せしなりされと其姓氏詳ならす江戸砂子にも渋谷長者の名ハ宗順といひたるとあれと

通明観　渋谷岡部家別荘の号なり風景他に越四時共に美観なり


青山善光寺
玄関
客殿
庫裡
本堂
手水や
三社宮
二王門

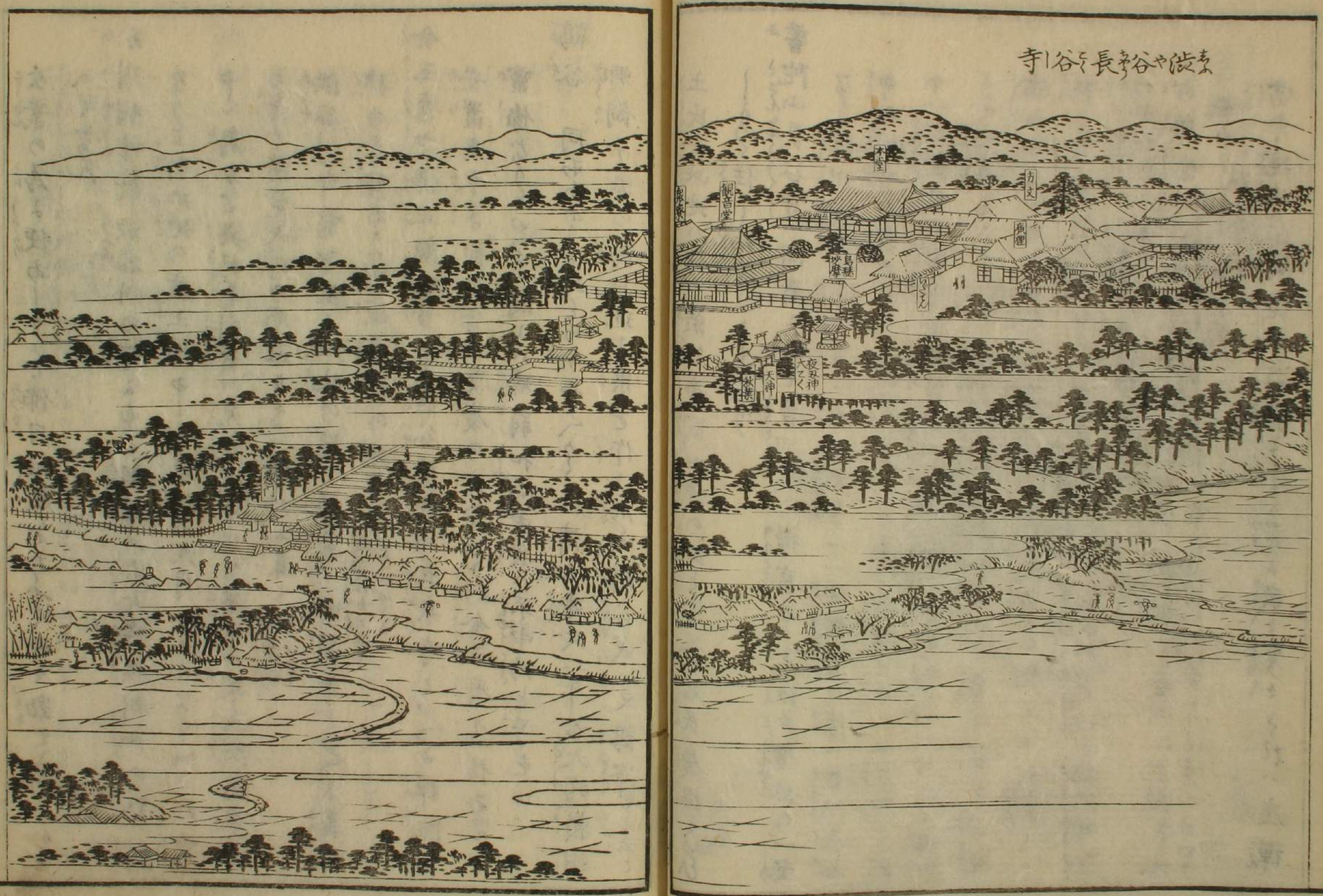
土民云此地ハ往古渋谷重國旧館の跡とも又ハ冨民慶福といひしもの住し跡なりともいへり

普陀山長谷寺 同所にあり曹洞派の禅窟にして江戸檀林の一室なり野州冨田の大中寺に属せり本尊十一面観音の像ハ和州長谷寺の観音の摸形にして立像二丈六尺あり御首の中に長丈四寸の十一面観音の霊像を安置す則和州長谷寺の本尊と同木の樟にして同作なりといへり開山ハ門庵宗關和尚なり當寺昔ハ赤坂溜池の上にありて龍雲院といひしを天正十二年甲申此地へ移し寺号をも改むるといへり 或人云當寺昔ハ山口氏重政の開基にして青山のやしきの中に建立し母堂龍雲院の号を寺号とし山口家の香花院なりしとなりされど後故ありて離檀ありし由其家の記録にありといへり

古佛倉 本堂の右にあり希世の霊佛灵神の像を安置して庫中に充満せり此地の旧民鶴見内蔵助秀治といふ人當寺へ納むる所にして百四十一躰ありと云世に渋谷長者といへる跡なりとぞ

當寺境内ハ古杉老松蓊欝として常に寂々寥々たれハ座禅

笄橋


麻布笄谷長谷寺
本堂
方丈
観音堂
庫裡
烏枢沙摩
夜叉神
大こく
天神
秋葉

公案の為に便あしかりを佛目祖風をわかくかを勤てよろしかるへくなん

氷川明神社　渋谷川の端にあり相傳ふ右大将頼朝卿の勧請なりと則此地の産土神にして祭礼ハ九月廿九日なり此日社前にて角力を興行す別當ハ天台宗にして恵日山薬王院宝泉寺と号す慈覚大師の闢基なる八薬師如来之作者詳ならず

渋谷川寺前を流る此北の端に源秀山室泉寺といへる真言律の寺院あり閑寂玄隠の地なり（近頃法如比丘もここに住せり）

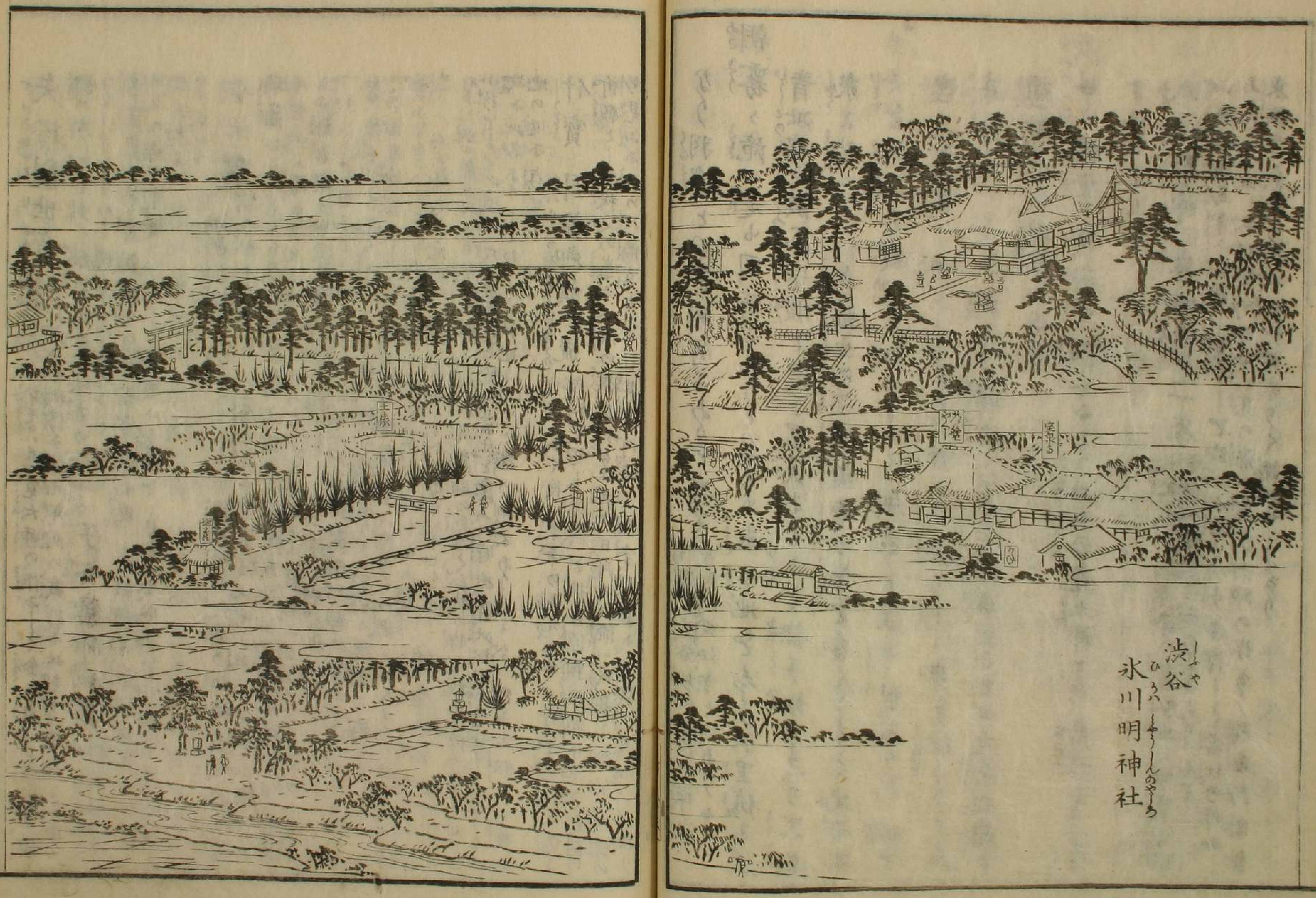
金王麿守佛正観世音　上渋谷慈雲山長泉寺といへる禅院に安置す本尊観世音ハ運慶の作にして則金王麿が信ぜし霊像なりといへり開山ハ瑞翁和尚中興ハ不中的と号す

鶴谷　同所にありといへども今さだかならず傳云建久二年右大将頼朝卿飼ふ所の鶴此地に巣を作るゆゑに鶴谷或ハ又鶴澤とも云となり羽澤といふも同所にありといへり（羽澤ハ花洛妙心寺派の禅宗普光山吸江寺と云ありや）

朝霧が滝　是も同所にありといへども未だ其地をしらず里諺にいふ昔此地に渋谷宗順といへる富民あり女を撫子姫となづく容貌衆に勝たり一年弥生の頃圓證寺の櫻を看んとして父母其女を誘引て彼寺に往しに朝霧といふ可髪ありて姫を戀慕し竟に思を遂ざるを恨て此滝の下に身を沈めけるとぞ其傍に小高き岡あり甌山となづく其塚なりと云又東の傍に圓證寺の旧跡もあり

渋谷八幡宮　同所中渋谷にあり此所の産土神とす祭礼ハ八月十五日なり

本社祭神　應神天皇一座（社記に云く此神像ハ上古弘法大師豊前國宇佐八幡宮の告あるによりうつし奉りて山城國鞍馬寺に安置し奉りしを渋谷次郎高重護持して当社の神躰とあがむると云く本地佛阿弥陀如来の像ハ慈覚大師の作なり圓證阿闍梨東福寺創建の時統御の僧来りて授与せしとなり）


渋谷氷川明神社

矢拾観世音

社前にあり本尊ハ慈覚大師の作にして金王麿が信の霊像なりとぞ又社傳に保元年間の戦ひに此仏戦場に化現し敵の弓矢を多く拾ひあつめて味方の陣中へ入給ひしよりかく称しまつると云

子安薬師如来

洞前にあり龍宮出現の尊像ありとぞ義朝誕生の時龍宮より出現し又頼朝尾張國幡屋にありて誕生の時も守護ありしとぞ佛躰に念珠をうけさせ世俗是を安産守護の念珠と唱へ大に崇信せり

金王櫻

一名憂忘櫻とも号たりしとぞ傳云往古久寿の頃源義朝鎌倉亀が谷の館に植られしを金王丸に給ふの後此地に移し氏神八幡宮の瑞籬にうゑるとあり或社記に云文治五年七月頼朝公奥州泰衡退治凱陣の頃當社に詣ありて太刀一振を収めあり又金王丸の影堂に立寄り其誠忠を感じあり鎌倉亀が谷より櫻一株を栽られまた金王櫻と号られたるともあり又おもてさかの一本といへる冊子に紀州亞相頼宣卿の御母堂養珠院殿此櫻の実を取度に植させらるゝ生立て花も開んとせし頃八幡の社内にありたる元木の櫻既に枯たりしが家臣渋谷善入といふ人ハ金王丸の遠裔なれバ他の人の植たるよりは祖先への孝養にもあるべしとて作の実生の櫻を善入に下しあたへ善入恭しく是を拝受して其枯株の跡へ植継たる今の櫻是なりとあるせり

鎮座の松

境内本社の前左の方にあり大永四年五月十三日北条氏綱と上杉朝興高輪の原にて合戦の時氏綱の後陣大道寺八郎左衛門小杉をまつりて渋谷へ攻入放火せし其餘煙當社を露ふ此時神躰此松樹の上に遷りとまりたまふ故に此名ありとぞむかしハ社地に三十六株の神木ありしが今ハ僅に古松五六株社地の辺に存せり

什寶

月輪御旗一流

社記に云後一条帝の長元元年五月平忠常北總にて兵乱を起し近國を掠む源頼信朝臣忠常追討の祈願として秩父の峯に八流の旗を収め其内日月の二流ハ武基に給り大宮の妙見山に収め八幡宮とあがむ其後河崎土佐守基家に白旗一流給ハり独り仙北金澤城を攻落せしに依て義家朝臣基家を召れ此軍勝利ありしも全く正八幡の加護によれりとて寛治六年正月義家朝臣凱陣の時谷盛庄へ立寄らせたまひ月の御旗を八當社にとゞめおかされしとも此御旗をみるに拝する者あるときハかれらも崇ありといふをもつて能證阿闍梨深く社檀にをさめ置写しを出して置るゝのみ開帳の時節諸人に拝せしむる八此寫を掛しなり

兜建観世音

社記云源義家公陣中奉持の霊佛にして後年基家に給ハり重家および金王丸常に信仰しまつりて猛威を振ひ城を攻破ると云云

獅子丸太刀

河崎土佐守重家勧賞として義家朝臣より給ハりし

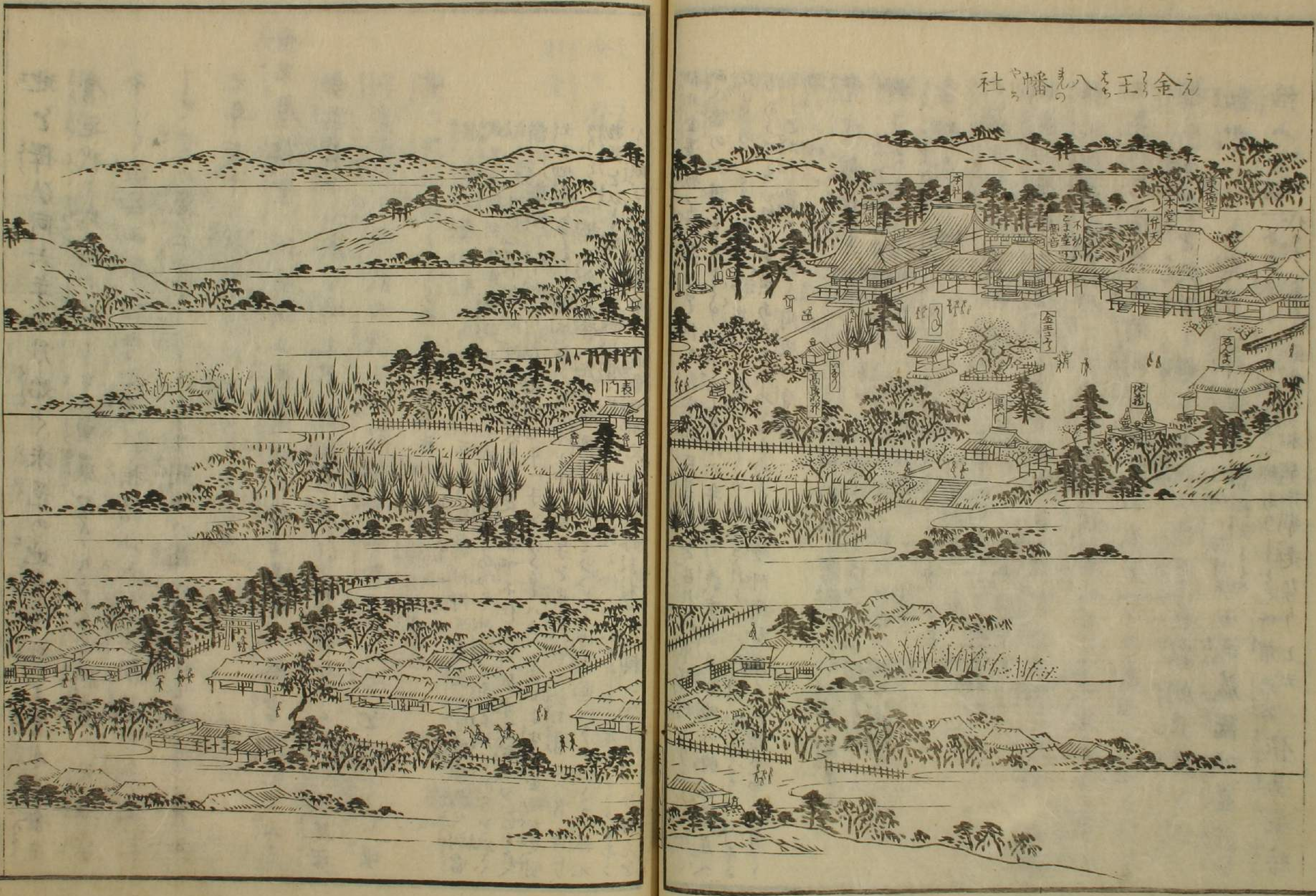
毒蛇長刀

金王丸長田が館野間の内海において勢ひを振ひしもひとへに此薙刀の威徳ありとぞ

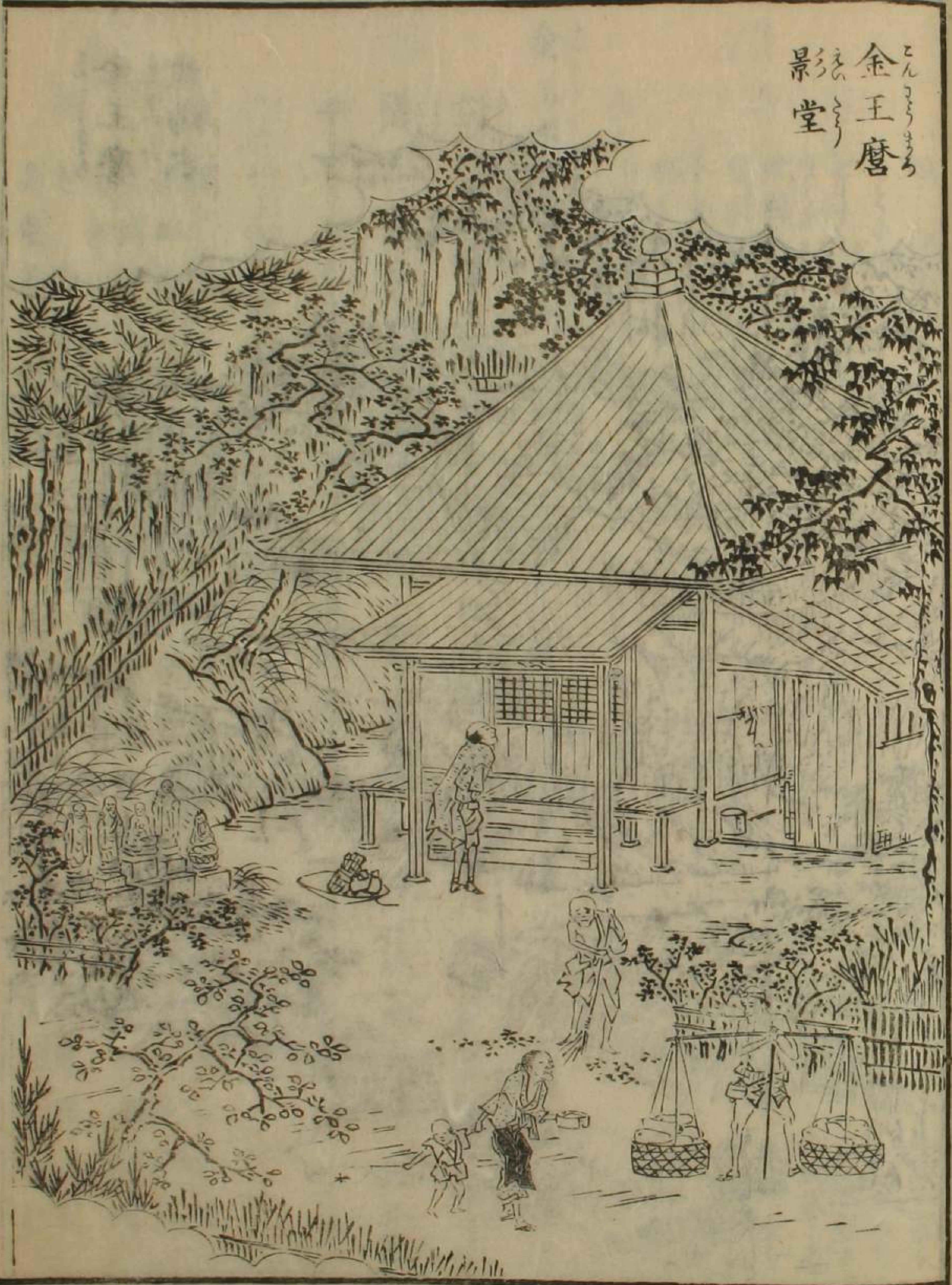
六孫王経基髪搔

経基より権守興世に給ふを義家朝臣當社へ納められしとあり幷擣是にもとづく

社記曰當社ハ高望王より五代の後裔村岡五郎良文が曽孫秩父別當武基の一子に同十郎武綱といへる英雄あり寛治三年六月清原武衡同家衡が猛威を摧き奥羽の間に勢を揮ひ名誉を天下に輝かしぬ故に将軍義家朝臣是を感じ勧賞として其子六郎基家河崎土佐守と云由社記によるに武蔵國谷盛荘を給ふ谷盛一に矢盛に作る此庄ハ七郷ありしとぞ所謂渋谷赤坂代々木麻布飯倉一ツ木今井等是なりと云依基家勝



金王八幡社

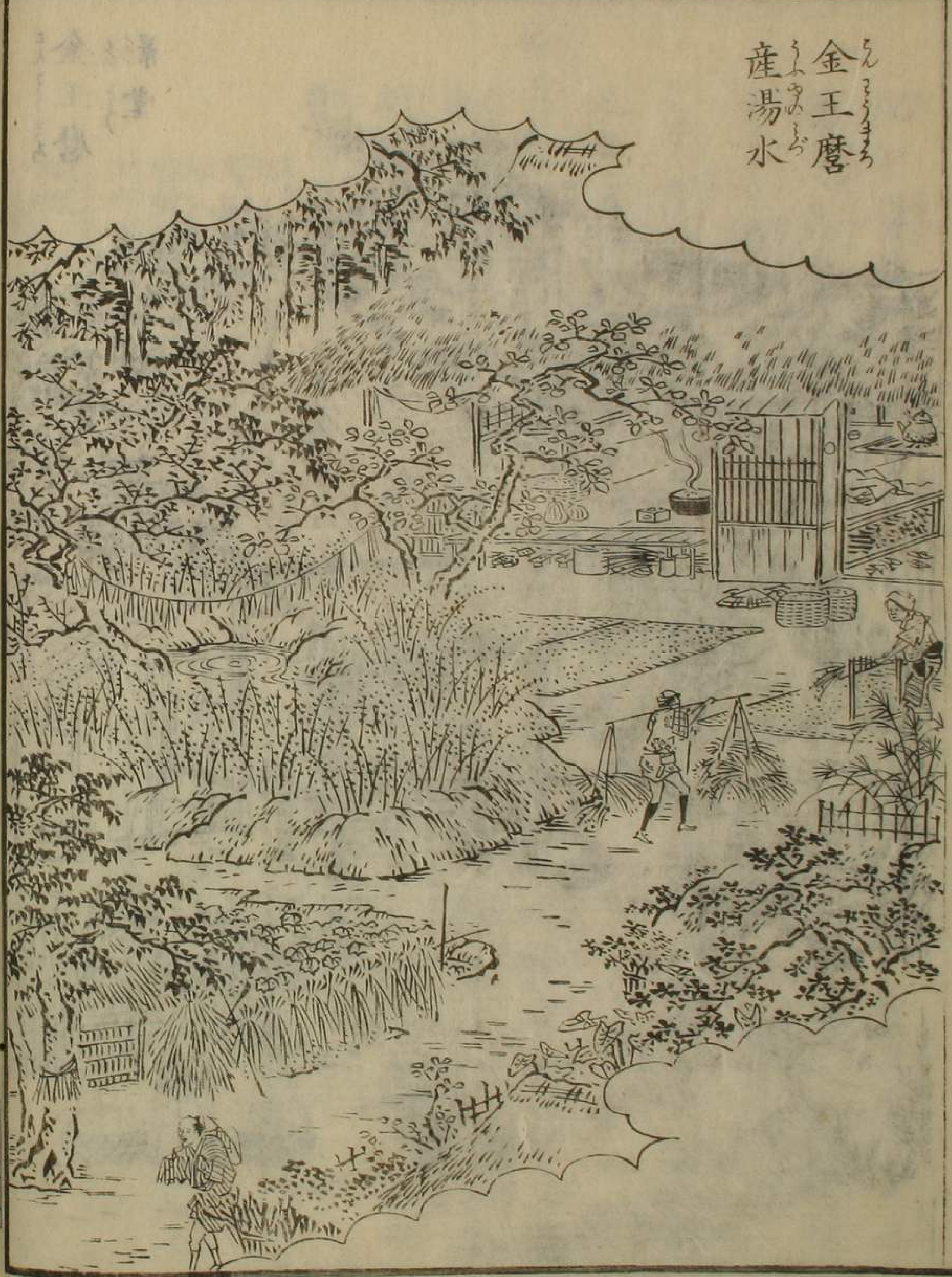


地を撰ひ同六年正月始て釆邑の地に當社を営建し金王麿迄代々氏神と称しける重嚴なりけることを別當ハ天台宗にして渋谷山東福寺と号す相傳ふ六孫王経基の開創にして昔ハ親王院と呼しとなり開山ハ圓鎮僧正と号す養和元年百十一歳にして化寂ありしと云云

金王麿影堂　同所向ふ側叢林の中にあり八幡宮社記に云く金王麿十七歳の時主君義朝の命により鎌倉に赴く頃其母別れを惜ミ悲歎の涙に沈む依て金王麿自ら姿を造りて母堂の許に残しとゞめけると云云　其像ハ鐵衣二刀を帯せる容形なり

按に金王麿祖先ハ髙望王より五代の後裔村岡五郎良文の曽孫秩父別當武基の子同十郎武綱其子を六郎基家といふ此時に至て始て渋谷を以て氏とす同く一子重家河崎平三大夫後従五位下に任し土佐守と云爾初め子なきをうれへ當社八幡宮に祈請しまつり永治元年一子をまうく八月十五日に生る金剛夜叉明王の化身なりとて霊示あるを以て上下の文字を借用ひて金王麿と名付けりとぞ一説に金王麿ハ庄司重國の子なりといへとも時代違へるに似たり保元物語を以て考ふるに金王麿ハ左馬頭源義朝に仕へし童にして度々ほまれをあらハし頗る大功の者なり義朝平治元年に大納言藤原信頼にくミしてむほんを

金王麿産湯水



起し待賢門の軍に打負尾張國野間の内海にありし此家人長田庄司忠宗が
ために落伸まひしを長田心かはりして浴室に義朝を弑する金王麿くち
をしく思ひ走り出りむかふ者共をきりふせて後都に登り義朝の妾常盤が
もとに参り其ありさまをかたりて後義朝の跡をとふらひまゐらせんが為出家して
諸國を修行して終る所をしらずとあり金王丸より渋谷と唱ふるよし縁起に見え
重家寛治六年渋谷の姓をたまふとあれども違へり系図をかんがふるに重家の
子重國其子高重其子金王丸とあり社記には重家一子なきをうれへ八幡宮へ
祈りて授かる金王丸といふ高重は金王丸より後にして文治年中頼朝時代の人
なりといふ
と違へり

金王麿産湯水 同所一町ばかり西の方堀の内といふにあり
誕生池とも号く八幡宮の社記に一度此霊泉に觸る者は
齢千歳を保つと云伝ふとあり此辺すべて渋谷氏居館の地
にして土人城跡と称せり馬場の形築地の跡など存せり古井
もこゝかしこにあり

東鑑 治承四年庚子八月二十六日入夜定綱盛綱
高綱等出筥根深山之處行逢醍醐禪師全成相伴
之到于重國渋谷之館重國作喜憚世上之聽招于
庫倉之内密々羞膳勸下畧
同 書養和元年八月二十七日渋谷庄司重國次男
高重竭無貳忠節之上依令感心操之隱便給知行

渋谷下郷所濟乃貢等所被免除也云云

河崎庄司次郎高重宅舊趾　同堀の内にあり土俗傳へ云此重國ハ違論のことありて六郷の河崎へ引移されし其頃此地にありし山王の社をも彼地へ引うつして其旧地に稲荷の叢祠を残し留めしとぞ

姉尾平次左衛門光景旧館地　是も同所にあり今も光景か馬を冷したりといへる小池あり旱魃にも涸ることなく霖雨にも溢ることなし常に岩間をくゞり出て清冷たり傍に駒繋榎と称するあり光景か愛せし安達栗毛といひし駿足を繋ぎおきて水を飼ひしとなり

甘露水　同所にあり里俗傳へ云天慶年間六孫王経基朝臣此地に旅宿ありし頃此水を掬く味美にして甘露のごとくなりと褒詞ありしより名とせりとぞ

玉池　同所にあり里人云く天文の頃天下大に旱魃し河水ハ流を絶し池沼ハ平地に異ならざる時此水涌出せること常に倍せり此里に住る一女子水を掬んとして水器の中に手鞠のごとき一顆の宝珠を得たり玉精其女子に託して云く是ハ是れ八幡宮の神器なり大永の兵火をさけて此井中にあり直に神祠に収むへしとあり依里民大に恐れ謹て是を神祠に収むるとぞ 此宝珠今渋谷八幡宮に収むと云 此故に玉の井とも唱へられしとなり

神仙水　八幡の西にあり相傳ふ往古空鉢仙人此谷に入て不老長生の仙丹を煉られし霊泉なり故に神仙谷とも云とあり鉢山といふは法道仙人の鉢此所に自ら飛来る故に号くともとあり

冨士見坂　渋谷宮益町より西へ向ひて下る坂をいふ斜に芙蓉の峯に對ふ故に名とせり相模街道の立場にして茶店酒亭

富士見坂一本松

ありて麓の小川に架せる橋をも冨士見橋と名つけたり　相州街道の中坂の数四十八ありとなり此冨士見坂ハ其首なりとなり

道玄坂　冨士見坂の下耕地を隔て向ふの方西へ登る坂をいふ

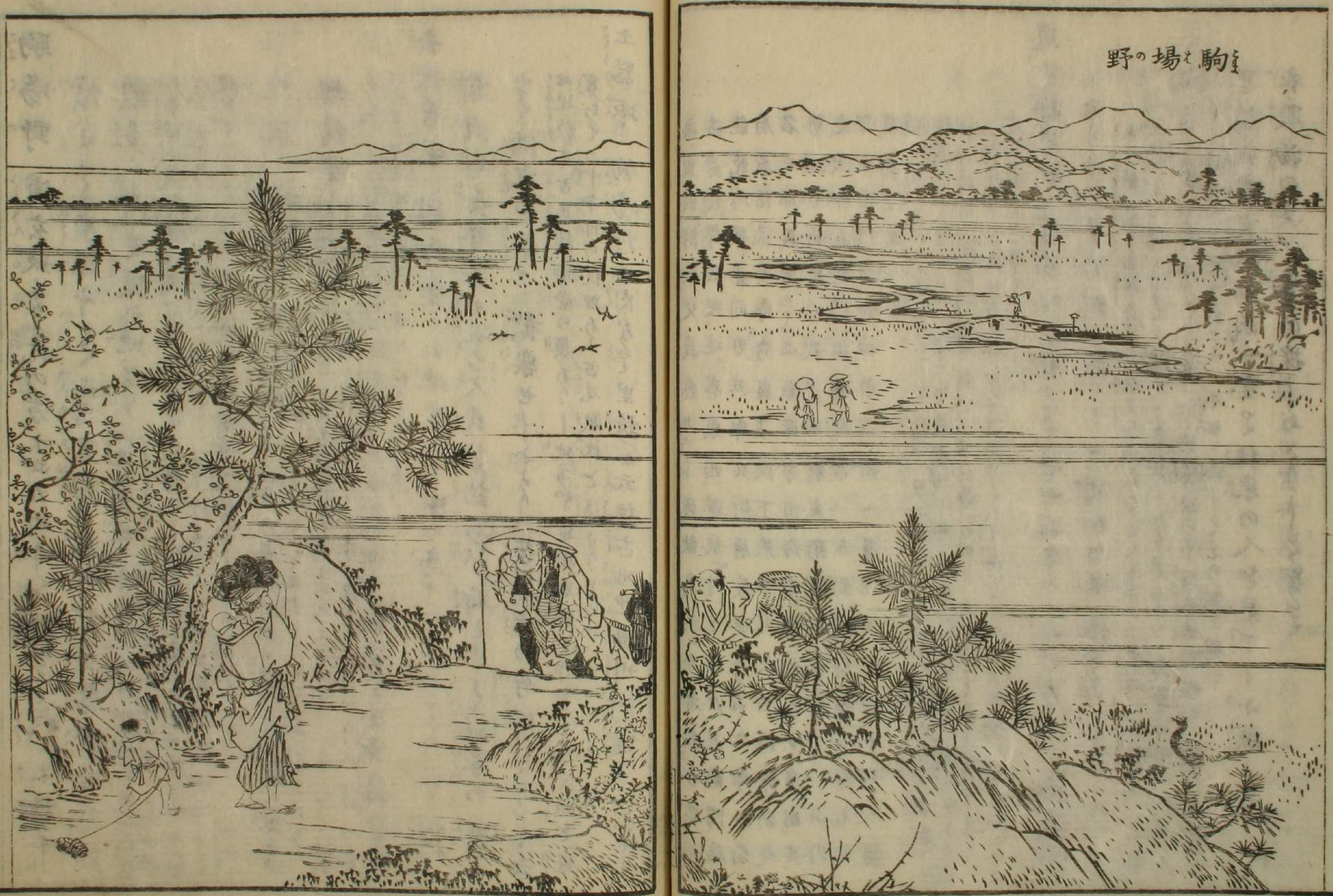
此坂を登る事凡三丁程行ハ岐路あり直路ハ大山道中しるく三間茶屋より登戸の渡まて二子の渡へ通す右へ行ハ駒場野の御用ある前通て北澤淡島への道也

世田ケ谷へ行道なり　道玄坂ハ道元と作る　里諺に云大和田氏道玄ハ和田義盛か一族なり建暦三年五月和田の一族滅亡ノ其残黨此所の窟中に隠れ住て山賊を業とせし故に道玄坂と呼となり

東鑑廿一云　建暦三年癸酉五月二日壬寅和田左衛門尉義盛率伴黨忽襲将軍幕下謂件與力衆者嫡男和田新左衛門尉常盛同子息新兵衛尉朝盛入道三男朝夷名三郎義秀四男和田四郎左衛門尉義直五男同五郎兵衛尉義重六男同六郎兵衛尉義信七男同七郎秀盛此外土屋大学助義清古郡左衛門尉保忠渋谷次郎高重横山権守時重中山四郎重政同太郎行重土肥先次郎左衛門尉惟平岡崎左衛門尉實忠實田与一義忠カ子梶原六郎朝景同次郎景衡同三郎景盛同七郎景氏大庭小次郎景兼深澤二郎景家大方五郎政直同太郎遠政塩屋三郎惟守以下中略和田四郎左衛門尉義直年卅七為伊具馬太郎盛重被討取父義盛年六十七殊歎息於今者勵合戦無益云云揚聲悲哭迷惑東西遂被討于江戸左衛門尉能範所従云云同男五郎兵衛尉義重年三十四六郎兵衛尉義信廿八七郎秀盛十五以下張本七人共伏誅朝夷名三郎義秀三十八並數率等出海濱棹船赴安房國其勢五百騎船六艘云云又新左衛門尉常盛四十二山内先次郎左衛門尉岡崎余一左衛門尉横山馬允古郡左衛門尉和田新兵衛入道以上大将軍六人遁戦場逐電云云

按ずるに大和田ハ大多和なるべき歟三浦一族の中に大多和と号するあり東鑑ニ治承四年八月廿二日三浦次郎義澄同十郎義連大多和三郎義久子息義成和田太郎義盛同次郎義茂中略三浦を出て参向すとあり或人云道玄ハ沙門にして此地に昔一宇の寺院ありて道玄寺と称しけるが故に坂の名に呼べり来ることもいひて一なりし

道玄物見松　道玄坂を登る事七町あまり西の方同じ街道大坂と云より此方右側にありしが明和の頃枯たりしハ伐さると云　木の圍五尺ほどありて根より三丈あまりも上にて東西へ廿間あまり南北へ十六七間あまりも枝をなして蒼々たりしかば炎暑の頃ハ行人この樹下にやすらひしとなり今駒場坂の下用水堀の傍に一株の古松あるを混じて道玄松と称すれども一本松と称してこの松と別なり里諺云道玄此松樹に登りて往来の人を見下し小賊に命じて衣服物の具を奪ひ採しめたりしとなりとも


駒場の野

駒場野 道玄坂より乾の方十四五町斗を隔て代々木野より續きたる廣原にして上目黒村に屬す雲雀鶉野雉兎狐類多く御遊獵の地なり 此地の官林ハ享保の初御狩場に定させられたりとなり又此地の里正加藤氏某ハ小田原北条家の臣加藤丹後守といへる人の後裔にして小田原落去の後此地に緣ありて以て蟄居し終に農氏となりしとなり丹後守ハ武州多摩郡箱根崎村に死せしとなり其一族の墳墓箱根崎圓福寺といふに存せりとぞ

蛇池 官林の中にありといふ享保三年此地御遊獵の地に定させられし翌年此夏風雨激しく此池中に栖みし蛇たちまち立去りしといひ傳ふ故に此名あり

鐘鑄塚 駒場野の中にありといふ方九尺斗高サ七八尺斗なりとぞ むかし此所にて梵鐘を鑄たる舊跡なりといひ傳ふれども何れの寺の鐘なりや詳ならず 或人いはく冨士見坂の下の水流下澁谷分水掛口の地の名に道場が淵と云あり むかし此近辺に盛大の寺院ありしなるべし

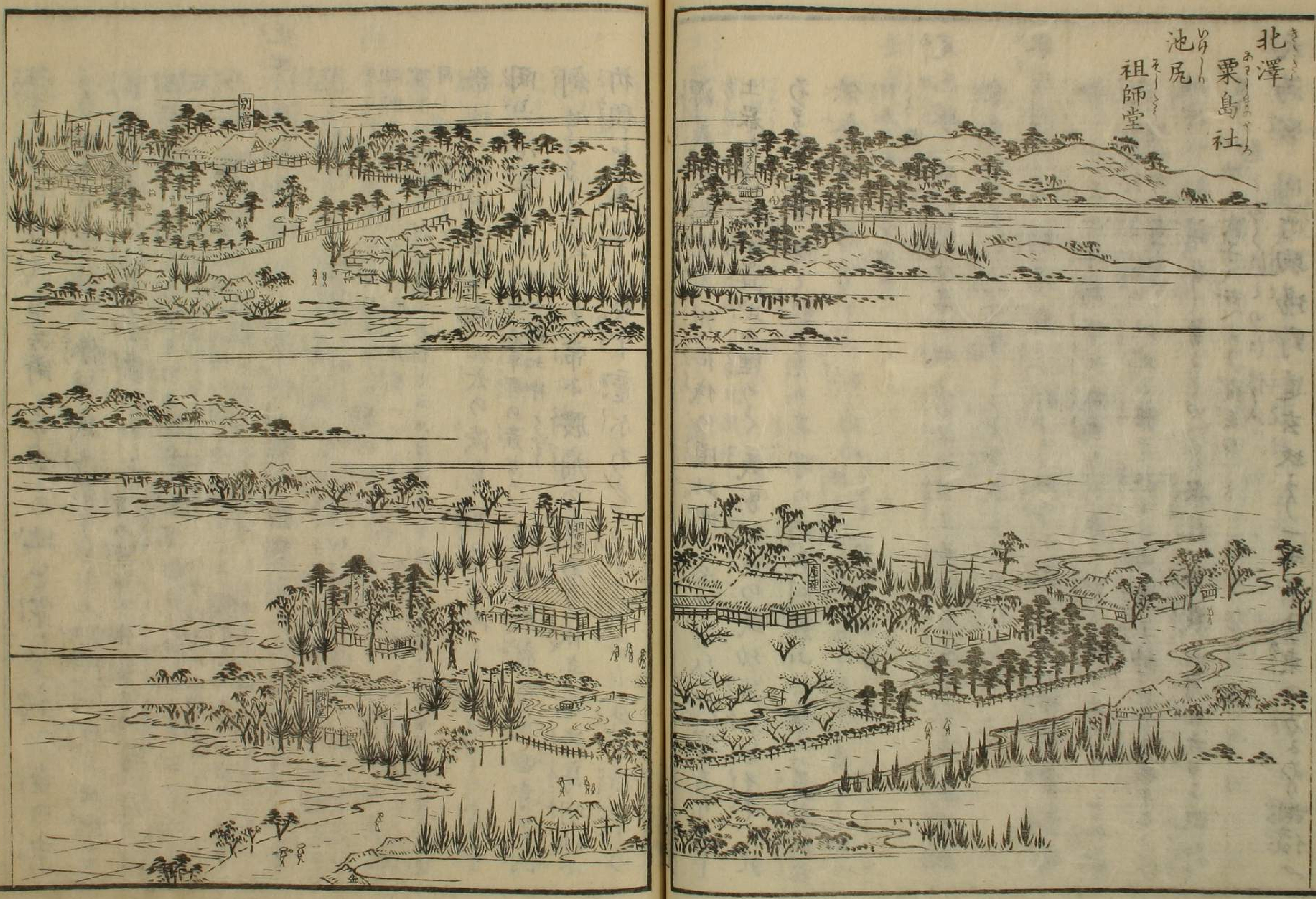
去我苦塚 別所臺と云地にあり 塚の高サ一丈あまりありといひ傳ふ 昔澁谷長者某此辺の人民を語らひ時として此塚の邊にて酒宴を催し歡樂せしによりて苦を去の所謂なりと云 此辺都て古居館佛堂の類ありし地にや 近頃道路を作らんとして山を堀穿ちて土中布目の紋理ある古瓦數枚を得たりといふ

土器塚 駒場野の内なり 里諺に云 往古此地奥州街道なりしによりて源義家朝臣奥州征伐の頃此地に至りたまひ酒宴ありし土器を後土人ども此地に埋めて義家朝臣の武功英名を慕ふに非ずやといふ 故に土器塚と称すと云 其塚の側を同勢山と呼ぶハ義家朝臣供奉の輩の居たりし舊跡といふ 按に此地に芦毛塚と称するものあり 疑ふらくハ土器塚も驄塚を誤るものにや 往古ハ馬なとを埋めたる塚なるべし

足毛塚 宿山と小地名に称する地の里正金子氏構の内にあり 頼朝卿乘せられし芦毛馬の斃れたるを埋藏せし舊跡と云

氷川明神祠 駒場野官林より此方の岡にあり 祭神素盞鳴命一座 天正年間甲州郡内上の原といへる地にありしを加藤氏 加藤氏の先祖ハ先の駒場野の條下に出せり 此地に移り住する頃産土神なるが故にこゝに此神を勸請なしまゐらせしとぞ 祭礼ハ毎歳九月廿九日に執行せり 此神の氏子ハ古へより疱瘡の患ひなしといひ傳ふ

天滿宮 同所駒場野道玄坂より一町半斗東の方にあり相傳ふ



北澤 粟島社
池尻 祖師堂

往古此地の農民市兵衛といふもの地を穿ちて小き壺の中より印子の菅神の像を感得せりといふ 坐像一寸四五分ばかり 故に此地に宮居を営みて鎮守と崇むると云 昔の菅神の像は賊のために奪はれしを 今一尺ばかりの石を以て造れる菅神の像を宮中に安置す 往古神躰を堀穿ちし地は封じて松を栽て験とす 其松は宮居より半丁ばかり西の方にあり 今中川氏の山中にありて其中に入と云

石劔 同じ社地稲荷の小祠に収む 長二尺二寸ばかり 圓木のごとく八九寸廻りなり 往古菅神の霊像を感得せし時同じ土中より得たりといふ

北澤淡島明神社 北澤村八幡山森巌寺といへる浄土宗の寺院に勧請す 当寺は此地八幡宮の別当にて故に八幡山の号あり又森巌寺浄光院と称するは越州黄門秀康卿の法号を採て寺の号とせしと云 清誉上人其師萬世上人の遺命を奉じ慶長十二年丁未四月当寺を開創し恵心僧都の作の座像一尺五寸の阿弥陀如来を本尊とす 脇士観音勢至の両像は行基大士の作と云 此辺西瓜を産す上品とす 世田が谷大丸の辺同じ西と称せり

祭神は紀州名草郡加太の淡島明神に同じ 相伝ふ当寺開山清誉上人 紀州名草郡の産なり 故に産土神とす 修行成就の後当寺を創せられしとき常に腰痛の患あり依て年月淡島明神に祈願を篭まゐり夢中霊示あるを以て灸治し終に積年の病痾を遁れたりしかは其報賽として紀州加田淡島明神の神主に告て此御神を此地に勧請なしまゐり法楽ありしと云 此故に累世の住僧連綿として此灸治の法を口授相伝し衆病悉除の為毎月三八の日是を施せり依て灸治を求むるもの筆遠きを厭はずして此地に至る者少からず祭礼は三月十九日と云

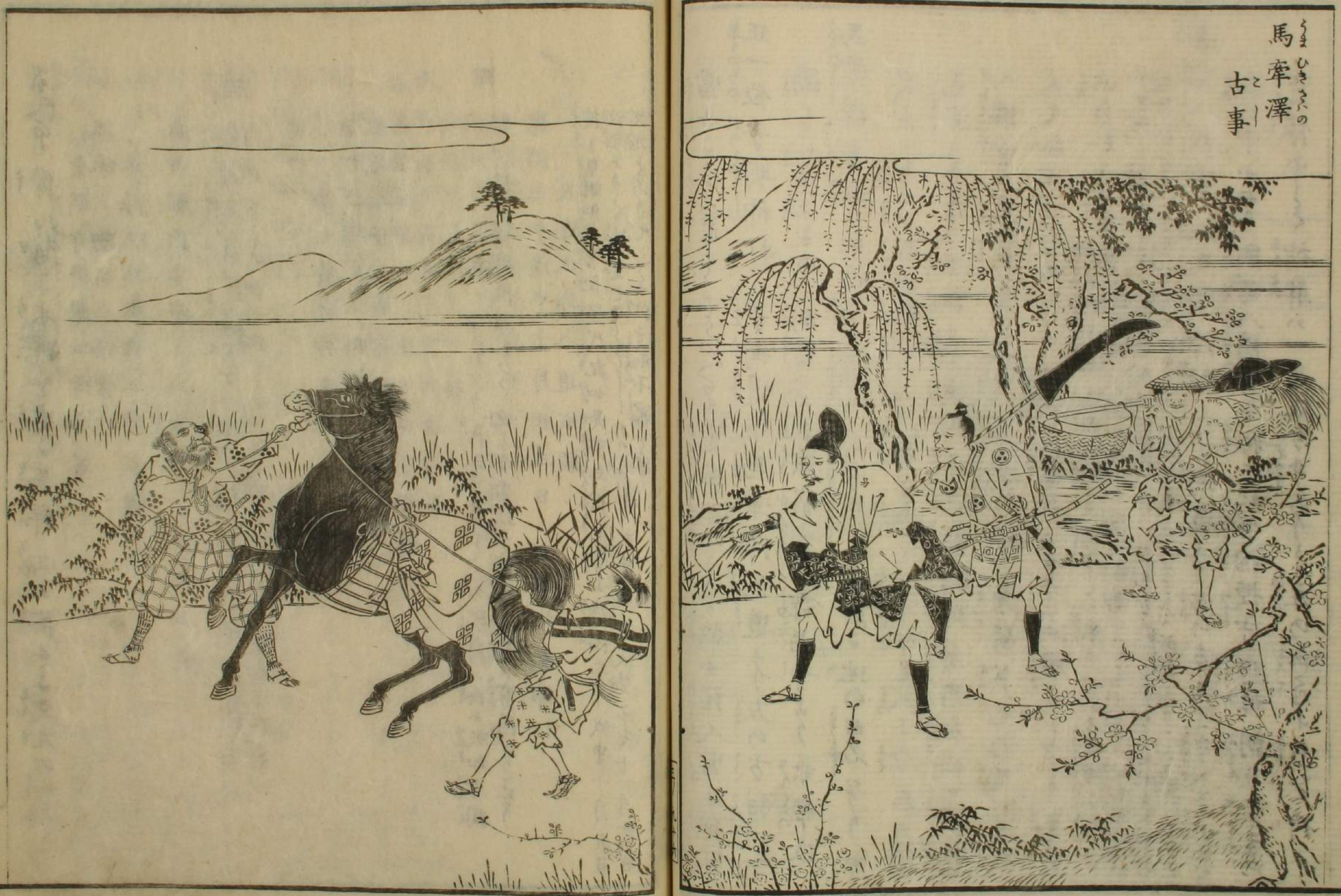
除剣難日蓮大士堂 同所八町ばかり南の方池尻村二子街道の右側常光院といふ日蓮宗の寺に安置せ 此寺は日義上人の開基にして往古は碑文谷法華寺の南坊なりと云 日蓮大士の木像は丈二寸二歩あり 相伝ふ文永八年辛未九月十二日相州龍口に於て大士誅に伏せんとせられし時刀尋段々壊の奇瑞あるを以終に北條時頼の赦免ありて誅を遁れ給ふ 同国依智に移て本間六郎左衛門重連が家に入給ふ重連大士の化を蒙り大士手刻の自像をあたへんことを乞依自ら此像を彫造ありて重連に附属せられけるとぞ後故ありて

當寺に安置せるところにして靈驗照〻たるが故に詣人常に絶す

正一位子明神社　二子街道下馬牽澤邑道より左の方耕田を隔て丘の上にあり別當ハ天台宗宿山村壽福寺より兼帯ス

馬牽澤舊跡　同所子明神の前今田畑となれる地の旧名なり[illegible]のこと今ハ上目黒世田ヶ谷へ跨て都て上中下と三に分れたる邑名となれり里諺に云文治年間頼朝卿奥州征伐の時渋谷八幡宮へ参籠あり其時荏原野より東條芦毛の馬を撰んて献せられんとし　此地を牽れるに頭ふるはずして進まず是を止られしと云　或云頼朝卿御狩の時この邊の乗の馬頻に驚き躍て澤に溺入て死せり故に塚に築籠ぬとも云其の八疋毛塚の跡を下馬と照し合せくらへし　又云頼朝卿の馬ハ芦毛なりしとて今も此地にて八芦毛の馬を蓄はすとなりもしあやまりてこれを蓄ふる時ハ必祟ありとて恐れつゝしめりと云

若宮八幡宮　上馬牽澤村二子街道より右の方三丁斗入て小き森の中にあり駒留八幡宮と称す北條相模守時頼朝臣崇るの靈像にして神躰ハ一寸五分斗ありて左の手に弓を持し


馬牽澤(うまひきさは)の古事(こじ)

ゑへ里像の背に木牌を建る其牌面に銘ある文左の如し

經塚
最明寺時頼公守本尊
駒留八幡宮
北條左近太郎入道成願
奉安鎮所徳治三戊申年十月廿三日

經筒 紫銅にて合せ目を鋲にて留たるものとおぼしくあれども損して鋲の跡のミ存せり圍ミ五寸六分長五寸あるも

敬白
八幡大菩薩御寶前
奉加法書寫六部妙法蓮華經
右奉讀誦妙法蓮華經一千部
志者爲身心大施主現世安穩
後生善所親類安穩福壽增長
南無法界平等利益
紫銅にして圍ミ八寸あまり長五寸ありて二の経筒ハ共に天和年間
當社修造の時経塚とよぶる地より當社の神躰と共に穿得たりとあり
同
徳治三年戊申十月廿三日
左近太郎入道成願
沙弥見佛

按に皇朝年代記皇代記如是院年代記等に徳治三年戊申十月九日改元ありて延慶と改元ありとせしをありされと將軍執權次第にハ十一月廿五日改元とありてこれを不審とす

田中辨財天祠 同じ社地にあり常盤御前此地に崇ると云一説に常盤御前没する後弁天に崇むともいへり神躰ハ座像にして一尺五寸計ある龕の背面に左のごとく記してあり

天文四乙未年七月
香林院殿海岸寶樹大姉
田中辨天之施主 常盤御前御法号也

按に上馬牽澤村の隣村若林村に香林寺といふ洞家の禪刹あり其寺に常盤御前の靈牌墳墓あり過去帳に香林寺殿海岸宝樹大姉天文四年未七月七日とあり香林寺ハ則常盤御前の剏創なりといふ常盤御前と称せるハ吉良家の令室なり

社記云當社八幡宮ハ何ものの時世の創建なるをしらず社廟傾廃神躰も又あるをなし然に天和二年此地の領主大久保矦藤原忠誠當社を修造せんとして其頃経塚と云地を穿ち土中一の壺を得たる又其壺中小銅器あり前に挙る徳治三年戊申北条左近太夫入道成願沙弥見佛等の名を銘し内に今存する所の神躰を蓋らして又其一箇ハ法華経六部を書寫し又一千部を讀誦せる由銘せり依て忠誠當社を修造

経営落成の日新に法華経六部を書写して銅壺に収め社の礎下に埋蔵し駿州建穂寺の僧隆範をして遷宮の式を執行せしむるとの

八幡山宗圓禅寺　同所二子街道の左品川上水の端にあり当寺ハ若宮八幡の別当寺なり洞家の禅院にして江戸駒込の大圓寺に属す本尊ハ座像の釈迦如来を安置せり当寺ハ北条左近太郎入道成願の開創にして存應林可和尚中興より北条左近太郎入道成願霊牌

文保元丁巳年十月廿三日寂

当寺開基　心覚宗圓庵主

北条家孫左近太郎入道成願

長立山常光寺　弦巻村世田谷上宿の南にあり日蓮宗身延の末にして天正十三年乙酉八月草創也開基ハ越後人泉蔵院日禮と号日禮ハ深雲の頃此地青山氏の家にある此人嗣なきを

愁ふ日禮妙経秘咒の奇特をあらハし一子を出生せしむ故ふ此人宗教を改め日禮ふ帰依し更ふ精舎を創立し日禮を開山祖とし弟子の礼を儀く　清山氏後日林と号せ當寺の第二世なり
本尊釋迦如来額ハ如松の二字ありて廣澤の筆なり石水盤ハ喜多見家寄附なり又浅野内匠頭長矩の寄附の三方あり　黒漆を以て塗松ふ雀の描畫あり此器ハ馬牽澤大教寺ふあり　ことごとく彼家の寄附なりしか後所々ふ分散せりといふ

常盤橋　二子街道中馬牽澤村世田ヶ谷入口三軒茶屋の往還角の所より向へ三丁斗入りて小溝ふ渡せる石橋をいふ名法く里諺ふ云く昔吉良頼康の妾常盤といへる婦人不義の事ありて此所ふ害せらる然ふ其靈里人ふ祟るを依其霊を弁天ふ崇め其腹ふ出生の男子を若宮八幡と崇まるといふ何よりよと上馬牽澤村ふあり此常盤といへる女ハ大平出羽守か女なるよし世田ヶ谷私記ふみえたり

按ふ此より二十歩許東の方道より北側ふ松を植る塚あり是を常盤の墓と云上ふ不動の石像あり又同し南の方にも塚あり是なりともいへどいづれか実ならん

大渓山豪德禪寺　常盤橋より五丁斗西の方ふあり曹洞派の禅刹ふして江戸高輪の泉岳寺ふ属す當寺ハ文明年間吉良家創建の精舎ふして旧ハ弘德庵と号其頃ハ済家ふして馬堂昌誉禪師開山祖たり　其後門庵宗関禪師今のごとく曹洞派にあらたむ　中興の開基ハ井伊掃部頭直孝侯同中興開山ハ天極秀道和尚なり

佛殿　本尊釋迦弥勒弥陀等の三世佛の木像を安置す

額　佛殿の二重家根の軒ふ揭る月舟の筆あり

選佛場

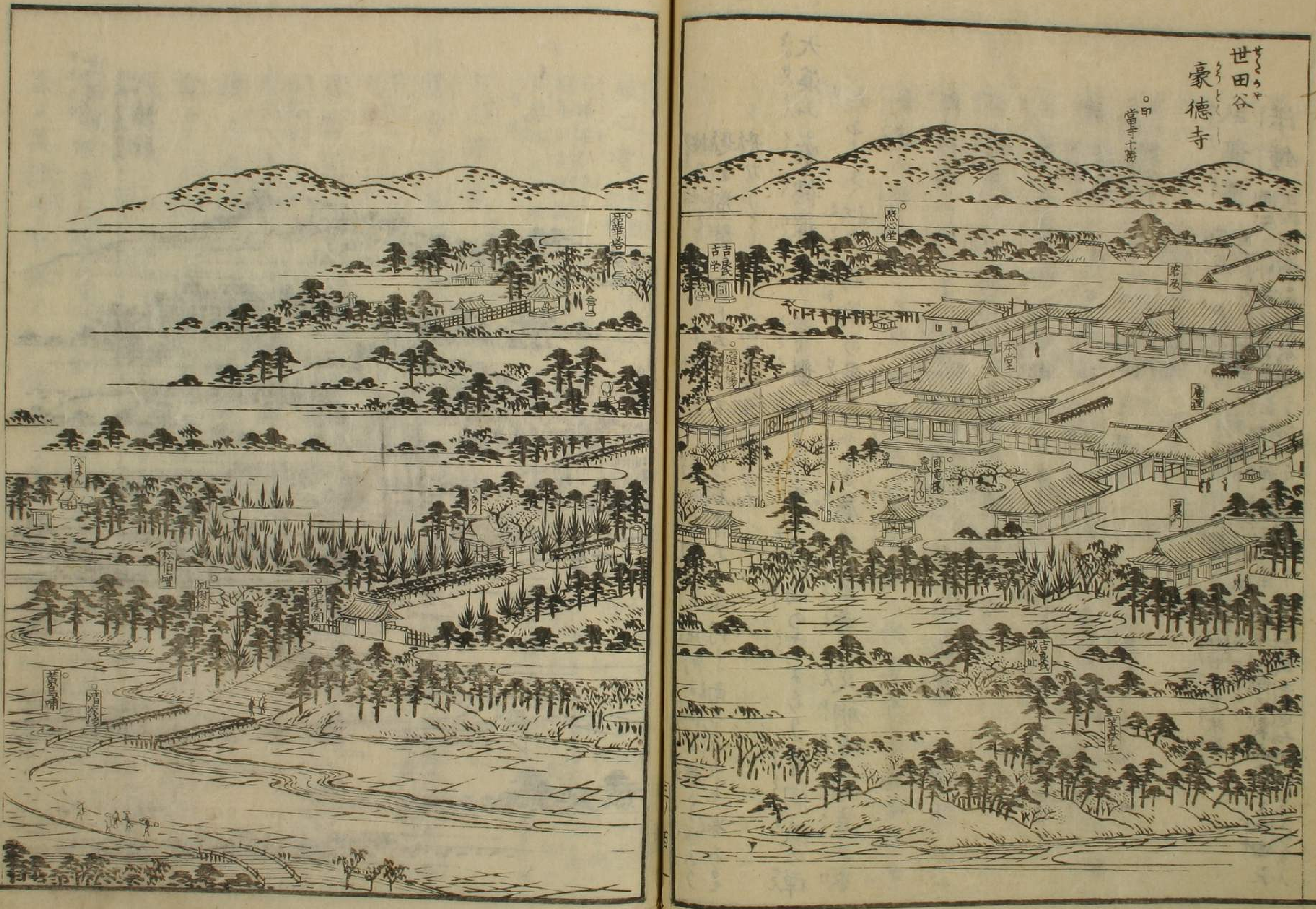
選佛場　佛殿の右ふ並ぶ當寺十勝の一なり額ハ二重家根の軒ふ揭く當寺十五世靈潭の筆なり

式垚佛

石燈篭　佛殿前左右ふ立り延宝五年井伊家掃雲院殿の寄附なり

臥龍櫻　佛殿の前右の方ふあり當寺十勝の一ふして往古吉良政忠園中ふありしと云然ての老樹ふして單瓣白花なり

洪鐘　佛殿の前左の方ふあり旧鐘の銘ハ寛文十二年鐵牛和尚の製文ふして自校摘稿ふあり今存するものハ延宝七年中興天極秀道和尚の製文ふして和尚みつから銘をかきたり



世田谷（せたがや）豪徳寺（がうとくじ）

○印 当寺十勝

世田谷八幡社

照心堂 客殿の左林叢の中にあり 當寺十勝の一員なり

吉良氏古塋 照心堂の前卵塔の中にあり 松樹の下にあり古き五輪の石塔並び立て一ハ世田谷御所吉良右京大夫政忠朝臣の墓なり當寺過去帳に前の開基洞春院殿照岳道旭居士文亀二年壬戌六月十七日卒とあり又一ハ政忠の伯母弘徳院久栄理椿大姉の墓なり弘徳院ハ當寺過去帳に文明十二年庚子十二月二日逝とあり

古石燈籠一基 同じ墓の前にあり政忠庭中のものありと云 世に云地蔵形これなり

當寺開基碑 佛殿の西に立る寛政十一年の冬當寺十五世霊潭和尚の撰文にして往古吉良家に因ある者力を戮せて霊潭和尚の志を補助しこれを立るといへり

碧雲関 總門の名なりこれも當寺十勝の一なり其余黄鳥哺ハ同じ門の左の叢林の中にある所の梅樹を云 松柏壇も又同じ方の樹林を云 楓樹林も同じ奥にあり 晩秋の紅錦賞すべし

清涼橋 總門の前の小川に架する橋の名なりこれも十勝の一なり

當寺ハ文明年間 開創或十二年庚子 世田谷御所吉良右京大夫政忠其先吉良治部大輔治家上野國飽間の地にありしに基氏より此世田谷郷を賜はり初てこゝに移住せし夫より後世田谷殿と称せり 伯母弘徳院殿久栄理椿大姉の為に創建する所の精舎なり 過去帳に文明十二年庚子十二月二日とあり 直に其法号を採て弘徳庵と号け昌誉禅師を請して開山

祖とす 其始ハ済家の禅刹なり 天正年間に至て宗関禅師来りて薫席ト洞門にあらたむ 万治年間江州彦根城主正四位上左中将井伊直孝侯此世田谷の地を賜ふ 或寛永十年癸酉にありとも 万治二年己亥六月廿八日逝す 法号久昌院殿豪徳天英大居士と号す 當寺に葬す 故に弘徳を豪徳に更む 弘豪同音 遺言によりて令嗣直澄其遺骸を 爾後直孝侯の賢娘掃雲院殿無染了心禅尼先考の冥福を弔はむかために許多の浄資を喜捨して堂宇を経営し三世佛の木像を安置して良田数十頃を寄らるゝとなり

吉良氏古城跡 豪徳寺構の内右の方に續る地を云 今ハ井伊家の林となれり 其封内一町四方堤の形二重に残れり 空堀の跡とみゆる所もあり 櫓を構へたりしと覚しき跡三ヶ所迄存せり 又居館の跡と称するもの築地或ハ林泉の形残りて水を湛へたる地などあり 冨士見松とよべる老樹あり 其地より斜に芙蓉の峯を眺望せり

旧ハ同じ所に御所櫻と称せしものありしか後世枯たりと云て今ハ此樹なし 世田谷の吉良家ハ清和天皇十世の苗裔足利左馬頭義氏に二子あり嫡男を義継と名け次男を長氏と名く長氏ハ三州に居るこれを三州の吉良と称す 義継ハ奥州に居る故に奥州の吉良と称す是則吉良姓の祖なり 義継六傳を吉良治部大輔治家と号く治家始武州世田谷城に住す時の人世田谷御所と称す又六傳を吉良政忠と称す法号を洞春院といふ 其後頼久の世に至て吉良家ハ三州東城西城の外称号になるべからず 宜く時田に改むべき旨台命ありしかハ時田と号く 則久良郡の時田村に住する故に在名をとらると云 小田原北条家関東を領せられし頃ハ其縁あるを以て許多の地を領せしよし云へり 然れとも其貫高詳ならず 今世田谷領と称せし村数五十七箇村あり其頃一圓所領なりし歟

宮坂八幡宮 同じ寺より西の方北岡續にありて其間三町計を隔つ 鎌倉鶴岡八幡宮の摸にして勧請の年歴詳ならず 天文十五年吉良頼貞當社を建立すと云 或ハ義家朝臣勧請せられし御神にして吉良家再興すとも云傳ふれとも 義家勧請と云ハ疑ハし 祭礼ハ八月十五日にして社司大場氏の奉祀なり 社内に存する北櫻ハ頼貞親植るなりと云傳ふ 按ずるに頼定と云ハ頼康の事なるへし 當社建立の棟札に注する所の頼貞の花押と等々力村大平某所蔵の頼康の古文書に印する所の花押と同じ 然時ハ頼貞ハ頼康の始の名なるへくありしならんとおぼし

當社梁牌一枚 當社に蔵す其文左のごとし

天文十五丙午八月廿日立柱 同十二月十六日上棟 同廿日癸卯 御迁供養導師ノ鶴岡相承院法印大和尚位快元 □□□□□□□□□
同等覚院権律師□□

當社八幡宮新建立大檀那源朝臣頼貞（花押） 鍛冶奉行鈴木藤十郎有宗 熊澤入道々弥
同松原藤六貞 大工青木右馬助安重

于時惣奉行江戸摂津守法名浄仙 大工奉行石渡戸新兵衛常久 惣大工番匠山井大蔵丞 番匠由木内匠助 鶴岡兼住法橋丈圓 法橋丸喜
西村左近持監吉重

延命山勝光禅院　豪徳寺の前の道を隔て向ふにあり洞家の禅刹にして八王子安下の心源院に属せり本尊ハ虚空蔵菩薩にして座像二尺計あり　作者知らず　建武二年乙亥世田谷御所吉良兵部大輔源頼氏開創の精舎にして往古ハ済家の禅宗にて龍鳳寺と号し　豪徳寺所蔵吉良系図に左京大夫とあるも又當寺に相伝ふ頼氏法号ハ興善寺殿月山清公と号す故に始當寺を興善山と号せしと云ひ世田谷私記とのふものにも興善寺を治氏の法号とせり又豪徳寺吉良系図の中に政忠の二男文貞といふ人の名の下に禅興寺ともありて諸説紛々其實を得かたし　吟峯龍公禅師開山たり　文和三年甲午五月七日示寂せ　其後天文十五年丙午世田谷吉良家六世の孫左兵衛佐源頼康　豪徳寺吉良系図に正三位武衛左兵衛督とす法号ハ勝光院殿睨山浄森大居士とあり　中興開基たり然に天正元年癸酉同吉良家七嗣の孫左兵衛佐従四位下源氏朝　豪徳寺所蔵吉良系図に左兵衛督とし法号を實相院殿と号し弦巻の實相院を建るとあるも　當寺の号を勝光院とあらため又天永琳達和尚　琳達和尚ハ小机村梅林寺の住持なりしを氏朝　請して當寺に今の如く曹洞派の寺院とせ居らしむ　當寺過去帳に延命院殿高山宗久大居士と云法名を載たり疑ふらくハ當寺の山号此号より出るならん故に此延命院没卒の年号忌日をしるさゞれバ又何人なるやを知らず按に世田谷私記とのふものに延命院ハ吉良経家なりとあり経家ハ奥州の吉良家にて又太郎と号せし人なり

愛縁薬師如来　丈二尺斗木像運慶の作なりと云相傳ふ往古北条氏康卿の息女崎君常に此霊像を崇信し天文六年の春此尊像の霊なるより　蒔田の地にて三千石けそひ料として添らるといふ　終に永禄元年世田谷御所頼康卿の室となられしより縁起にみえたりといへども中興のとのふべく尤拙文ことに疑はしきすく少からざれバ故に其文略しくこゝに記さゞれ

按に崎君ハ氏綱の女にして氏康にひろも

廣戸備後又三郎正之碑（当寺佛殿の右にあり正之ハ駿州の産にして二階堂山城三郎行村十三世孫其先ハ京都）柳営社稷の臣なり高祖五郎久行江州廣戸郷を管領せり因て氏とす永禄十二年己巳召に應して　御當家に仕へまつり後仕を致して世田谷の地に退居し慶長十七年壬子十一月廿二日行年八十八歳にして終る依て當寺に葬むるなり延宝八年の冬孝孫行隆正武江戸大森等これを立るなり銘せり

吉良氏古塋（堂前左の方にあり頼康の古墳も當寺にありといへとも定かならす蒔田の勝國寺にあるをの信るありといへり又興善寺の墓塔も並びてあり）

鶴松山實相院　登戸通道世田谷元宿の左の裏通弦巻村にあり曹洞派の禅林にして同所勝光院に属せり當寺ハ世田谷の吉良家七世孫左兵衛佐氏朝閑居の旧跡にして其閑居の号を学翁斎と称せしと云学翁斎卒去の後（学翁斎ハ慶長八年癸卯九月六日卒すとあり）息頼久當寺を開創ありて法号實相院殿学翁玄誉大居士の文字を採りて寺号に用ひ天永琳達和尚開山とす（或ハ應天和尚ともいふよしいへり）本尊阿弥陀如来作詳ならす

学翁斎の墓碑　境内にあり又當山開闢鶴松院殿快窓壽溪大姉と称する石塔並ひ立り鶴松院何人なることを志らす猶可尋（氏朝ハ吉良左兵衛佐頼康の養子にして今川の一族堀越治部少輔貞基の次男にして駿州瀬名陸奥守一秀の弟なりといへり）

弦巻郷　世田谷にあり此地ハ昔柔原右京進といへる人の所領なりし由永禄二年小田原北条家の所領役帳にみえたりとそ

世田谷八幡宮　同所にあり相傳ふ八幡太郎義家朝臣の勧請なりといふ則此地の産土神にして祭礼ハ八月十五日なりとそ

龍華山永安寺　長壽院と号す天台宗にして東叡山に属せり本尊千手観音ハ恵心僧都の作なりといふ開山ハ清仙上人（俗姓ハ二階堂氏なり）開基ハ鎌倉公方源氏満朝臣なり中興開山ハ秉海法印（俗姓石井氏なり）同中興開基ハ石井内匠兼雄法名を良賢居士と号す

龍華樹（堂前櫻樹を号く今ハ枯たり當寺の開山清仙上人鎌倉大蔵谷永安寺の旧地より遷し栽たりとなり當寺を竜華山と号するも此樹によるとあり永安寺の旧跡ハ鎌倉大蔵谷瑞泉寺の門外右の谷を云往古永安寺ハ源氏満朝臣の菩提所なりしと云）

石井氏移塋碑（本堂北の側にあり）

相傳鎌倉公方氏満朝臣（左馬頭基氏子なり）應永五年十一月四日逝去

あり永安寺殿壁山全公と号ス仍鎌倉の大蔵谷に新に一精
舎を造りて直に其法号を採て永安寺と号し建長寺の曇芳
和尚を請して寺主たらしむ（諱周應夢窓國師の法嗣なり夫より後建長寺瑞林菴の開祖なり）
満兼朝臣持氏朝臣相継て重修ありしに永享十一年二月十日
持氏朝臣此寺に於て自害せられしかハ（管領上杉憲実の所為なり）其男成氏
公（永壽王殿と云）幼稚なるに依て暫く難を美濃國に避たまふ然に嘉吉
元年京都将軍の命を奉して再ひ鎌倉に帰入したまふといへとも
上杉の両執事良からされハ上を蔑し権柄を争ひ闘諍遂に止
時なく享徳四年六月十六日今川上總介か為に鎌倉を追補せらる是
當社宮殿民居に至る迄悉く灰燼となり永安寺も又廢ぬ然
るに於て足利六世の繁昌一時に滅し都會空しく草莽の
地となれり爰に二階堂信濃守なる者あり持氏朝臣に仕へて
不二股肱の臣なり永享の時公の従臣悉く永安寺にて死す

信濃守一人公の遺命あるを以て倶に死することを免さ
れして遁る其後裔孫名ハ某法名清仙と云者あり永安寺を
鎌倉幕府世々の墳壟安鎮の地たりしに荒亡年久しく兵馬馳
走の巷となれるを患へとし終に再復の願を発し延徳二年三月
勝長壽院の門主（寺記に持氏公の季子とのミ記して其諱を注さす）の命を奉して此武州
中丸郷大蔵村ハ其名鎌倉の旧地に同しきを因拠として禅刹
一宇を建立し鎌倉幕府世々の神主を安置し寺号をも又永
安寺と称す門主某の功を挙て長壽院と云（當寺の開山なり）天正年間
當寺第六世良深より以後台密の二教に改て堂宇を修補せ
然といへとも衰へて柴椽草堂のミなりしを明暦の頃石井兼忠と
いへる人其父良賢居士の没後追福のため堂塔を重修し佛殿を
荘厳す是中興開基なり
不動明王画幅（妙澤筆聖護院道興准后開眼せられしと云傳へ即紙中に華押を注しくあり）

妙泽和尚ハ嘉慶の頃の人にして足利三代義満公の時世に當まり大草紙に
妙澤ハ夢窓國師の法嗣にして不動明王の化身なり児の時より好みて不動明
王の像を画き（本朝画史云毎日一紙を画き敢て怠らず灵験甚多しと云く）奇特をあらハせしるを挙て旌明
十八年道興准后東奥下向の時其門徒なりし松井坊に宿しかひこれを旌眼ありし
とて即紙中に花押をおされしるを後石井氏の家に傳へしを兼重とせる人の時當寺に
附与せしとぞ

岡本半助裁許状一通　武蔵七黨系圖　古写本なり

氷川明神社　大蔵村にあり永安寺別當奉祀せり祭神五坐大已
貴尊素盞嗚尊奇稲田姫手摩乳脚摩乳等なり祭礼ハ毎年
九月廿一日なり相傳ふ暦仁元年（九月九日始祭祀を行ふといふ）同廿一日當地の主江戸氏
（此江戸氏ハ桓武平氏の裔良文の流畠山の一族にして北見氏の祖也）足立郡大宮の御神を勧請せしと云
唯一宗源の社なりしに其後二百有餘年を経て天文年間松井
坊といへる山伏奉祀の宮となり両部習合とす（此松井坊ハ武州都筑郡の人にして大田道真の臣
なり依て道真の崇せし処の十一面観音の像を傳来しそ當社の別當に
補せるの後氷川明神の本地佛となしまつるとそ或云永禄の頃迄ハ松井坊奉祀
なりしに後田中三河守といへる人神職となり再ひ唯一とせしと云）當社昔ハ五所に並ひ建て宮居巍々たり
しかるに其の頃よりや荒廃して唯此一社のみ残れりと云　其證の棟
札に載て氷川明神第四ノ宮とあるなるへし　然に明暦年間永安寺第九世辨栄法印
別當に補せられしより再ひ習合の社となし神躰及ひ本地佛
等を新に安置せられたりとあり　昔の神躰ハ江戸氏の兜の立物
にして黄金の瓶子に畠山重忠と銘しておましとなりされとも
何の頃にか失ひけるにや今ハなしといふ

棟札一枚（當地石井氏の家に傳ふ　棟札に神主田中松井坊敬白とあり　其ころハ田中と松井坊別人にあらすして田中ハ松井坊か俗姓にてありしなら）

面

哀愍衆生者　永禄八年乙丑正月十九日
武蔵國荏原郡石井土郷大蔵村氷川大明神第四ノ宮
我等今敬禮　神主田中松井坊敬白云云

裏

再建副願主　長島源太郎　伊丹孫次郎
清水源兵衛　河野大學
石井玄蕃

大旦那
武運長久　石井内近助平兼實敬白云云
庄屋

大野新兵衛　大工石渡

帯刀先生義賢之墓　大蔵村石井土の内殿山といふ地の東南（北見村の堺）農家清水氏の宅地の傍にあり（清水氏ハ清水冠者義高の後裔なりと云先に挙る氷川宮の鳥居の中に清水源兵衛とあるハ則この清水氏の事なりといへり）土人ハ大将塚と呼へり

東鑑曰　治承四年庚子九月七日丙辰源氏木曽冠者義仲主者帯刀先生義賢二男也義賢者久壽二年八月於武蔵國大倉館為鎌倉悪源太義平主被討亡于時義仲為三歳嬰児也乳母夫中三権守兼遠懐之遁于信濃國令養育之云云

相傳此地ハ義賢居館の旧址なりし故に殿山の称ありといふ（天明年間此地の農民清水氏義賢の塚をあばきしに石壁の中に古刀及び砂金の類を獲せしとありされと祟あるにより旧のごとく埋蔵しけりと云）其後大永年間石井氏某法名良覚と云し人京都より此殿山の地に移り住せり（土人云く同所新坂の上神明宮の服に大六天の宮あり此良覚の霊を祭ると云）或伊田中務大輔兼紀と云人の居跡なりともいへる

（按に石井家の先祖良覚ハ武州久良岐郡釜利谷の伊丹氏にゆかりて小田原に属しあるらく伊丹氏を冒せしなり然を後世丹を田に誤りて伊田と稱へしならん されと中務大輔兼紀と名乗られし其家なと所伝なしとぞ後世土人伝へ誤るなるへし又先に挙る氷川明神の棟札に石井内匠助兼實とあるは良覚の子にして其子孫今猶連綿たり）

大神宮祠　殿山の中にあり永安寺より別当兼帯す神木ハ至ての老松にして土人乳垂の松と号す

石井神社　弦巻村より西南の方大蔵村石井氏某が地にあり（大蔵邑古荏原郡に属せ明暦より己降多摩郡に入たり）祭神詳ならず寛永年間石井氏兼忠社を旧地（石井土谷と云）より今の地へ移しまつり稲荷を相殿に合祭せり又近世故ありて同兼昌磐井と斎の假名ハ違へとも其訓の相似たるを以て斎稲荷とも称せりとなり　土人云當社ハ武蔵國荏原郡二座の内延喜式神名帳に載られたる磐井神社是なりと（石の文字古事記日本紀等に伊斯或ハ伊波ともありて一字二訓なり土人云磐の文字最筆畫多くして書しけきゆへに其便なるを厭ひて石の文字に改めたりとの地名の文字改めたる其例多し）舊地ハ今の社より七八町を隔てゝ同邑石井土谷にありて其地に甘泉あり武蔵國風土記残編に所謂荏原郡磐井神社の辺磐井ありと記されたるハ則此靈泉なりと

氷川明神社
禱善寺
慶元寺

云云相傳ふ往古鎌倉右大将家の幕下安達藤九郎盛長の孫同出羽守景盛の次男石井石見守兼周その子同左衛門尉兼章仁治元年庚子執權武蔵守経時の吹挙により始て武州石井郷を賜りて此地に移り住む石井郷も明暦の頃大蔵邑と共に多摩郡の内に加へられ今ハ大蔵邑に属して小名となれり今石井神社の旧地を石井土谷とよひて古の称をうしなはさりの證なり此地古き御図帳あるひハ古碑の類ひにも荏原大蔵邑とあれハ證とすへし又等々力満願寺古文書の中に弘治二年丙辰十二月十八日吉良左兵衛佐頼康より狛江入道の文に大蔵村年貢四十貫皆納石井戸新開二貫満願寺へ一貫分と云々故に石井を以て氏とし則當社を尊崇しまつり石井氏累世鎮護の神とすとのみ按に荏原郡不入斗村に鎮座ましませる鈴の森八幡宮を以て社司等ハ式内磐井神社と称し又石川中納言豊人卿武蔵守に任し荏原郡に在せし頃霊示によりて経始せし宮社なりと云傳ふ按に續日本紀に延暦七年二月中宮大夫従四位上石川朝臣豊人を兼武蔵守とも同年七月大蔵卿とすと云く然に國の守ハ上古ハ府中に在せしなり旧史にも當国の府古多摩郡にあり大蔵村ハ此頃荏原郡に属せしとも多摩郡に接しまつも府に遠からは恐らくハ豊人卿此地に在してより後世大蔵の号あるなるへし又武蔵国風土記残編荏原郡磐井神社の條下に社辺に磐井ありと云つたへり然るに當社旧地石井土谷も今ハ多摩郡に加へられしかとも昔ハ荏原郡なりて其旧地故泉涌出して石井と号く旁鑑られハ因あるに似たるを猶第二巻鈴の森

八幡宮の条下を照合せてみるへし

東覚山吉祥院地蔵寺と号す大蔵邑の南鎌田村にあり天平十二年庚辰行基大士開創にて新義の真言宗なり小杉の西明寺に属せり

本堂 本尊地蔵菩薩 立像丈長一尺七寸 行基大士の彫像なり

不動尊 同堂内に安置す良弁僧都の作なりとも刑部少輔源義光願所の本尊なりといへり

印子歓喜天 弘法大師の作鎌倉副元帥平泰時祈禱の本尊なりといふ

七観音画影 興教大師の筆なりといふ往古當寺盛なりし頃ハ仁和寺に属せしなり久安四年己辰守覚法親王兵乱をさけて此地に下りまひ同年中夏の頃より初秋に至る迄當寺に宿せられし頃に寄附ありし 日輪弘法大師画影 嵯峨帝八宗論の御影なり同大師の真筆にて是も仁和寺宮より寄附なりとのへあり

縁起曰天平十二年庚辰行基大士勅をうけて諸國に伽藍を造立しのふより其頃當國に至りたまふ然に此地に齢六十にあまれる貧女住り幼より地蔵尊を信し常〃称名志らくも止時なく供養しまつりける彼貧女一日行基菩薩の御許に至りて

未来成佛の道を問ける同十三年辛巳正月廿四日行基菩薩此地に至りたまひ地蔵尊の像を彫刻ありてこれを貧女に与へて曰く此地ハ則本尊有縁の灵地なり汝直に精舎を営むへし吾其勝地を卜しおくへしとて拄杖を以て地上に畫して是を定む 今地蔵屋敷と云ハ其旧跡なりとぞ 依て貧女ハ 其頃世に地蔵尼と字せしとなり 薙染して寺院建立の大志を企つるに同郷の冨民秦氏某なる人糧財を喜捨し田園找附しされハ精舎僧坊悉く落成し称名散花梵唄の声絶るすなかりし然に建武二年の兵乱に堂宇悉く灰燼となりしより已降本尊のミ假に草堂に安しまゐらせしに遥の後世田谷の吉良氏不測の霊夢を蒙り大に崇敬ありて寺院再興ありしかと竟に天正の頃小田原北条家没落の後ハ吉良氏の家も共に亡ひたりしかより其後ハ漸香花の備もおろそかになりて今ハ僅乃草堂一宇を存するのミ 往古堂舎兵火の為に灰燼せし頃も本尊ハ自ら火焔を遁れ給ひて恙なし 其後此里に住る川辺氏某妻の

安産を祈りまゐらせ奇瑞ありしかハ報恩の為永世當寺の檀那となり 其頃田園等を喜捨しまゐらせしとなり

観音寺

吉祥院より八町ばかり西の方宇奈根村にあり當寺ハ永正年間天台の沙門實海 河越喜多院第十四世なり 天正五年八月十七日化寂す 創建せる所の寺院にして深大寺に属す本尊十一面観音の木像ハ傳教大師の作なり故に寺号とせりといふ 昔ハ相州小田原にありて圓正寺と号せしか兵火に亡ひしといふ故に炎上の音あるをいとひて寺号を更るといふ

荒井對馬治義墓 當寺にあり 相傳ふ治義天文中上野國新田より来て小田原の北条家に仕へ後此地に遁れて民間に交る 天正元年癸酉二月十七日没する由碑面に見えたり 此地に荒井氏の子孫今に連綿として相續するものハ此ゆゑなり

永劫山慶元寺

華林院と号 観音寺より七町あまり西の方喜多見村にあり浄業の精舎にして小机の泉谷寺に属す本尊阿弥陀如来の座像ハ一尺計ありて恵心僧都の作なりと云 開山ハ真蓮社空誉上人と号せり 當寺ハ江戸遠江守の後裔 江戸刑部少輔頼忠の子を江戸摂津守朝忠とよへり此人も頼忠に同しく小田原に属せり頼忠の次男勝重 始勝忠と云 より江戸氏を改て其采邑喜多見の地名を以て氏

とし喜多見若狭守勝重とよべり小田原没落の後遊客となり御當家に屬しまゐる於江戸ハ御當家の居城の地なるを以てちなみありて氏を改めて勝重の二男喜多見五郎左衛門重恒其子若狭守重政より後其家滅す　喜多見氏建立の寺院なりとのみ

天神森　慶元寺の前小高き岡にあり　北見氏陣屋の跡なりと云　歌枕天神と号く奇地の来由　天王を相殿とせり　相傳往古澤庵和尚堺南宗寺に勧請せられしを承應年間喜多見久太夫重勝大坂にありし頃神木の梅樹と共にこの地に移し自の園中に勧請ㇱ天神森其旧跡なりと云神影ハ画像にして古土佐の筆と云　後故ありて此地石井兼重の家に傳へ梅樹も又自庭前に迂したりしか後兼重の子通兼と云人大蔵村の永安寺に安置せしむなりて故に永安寺にも神木の若木あり

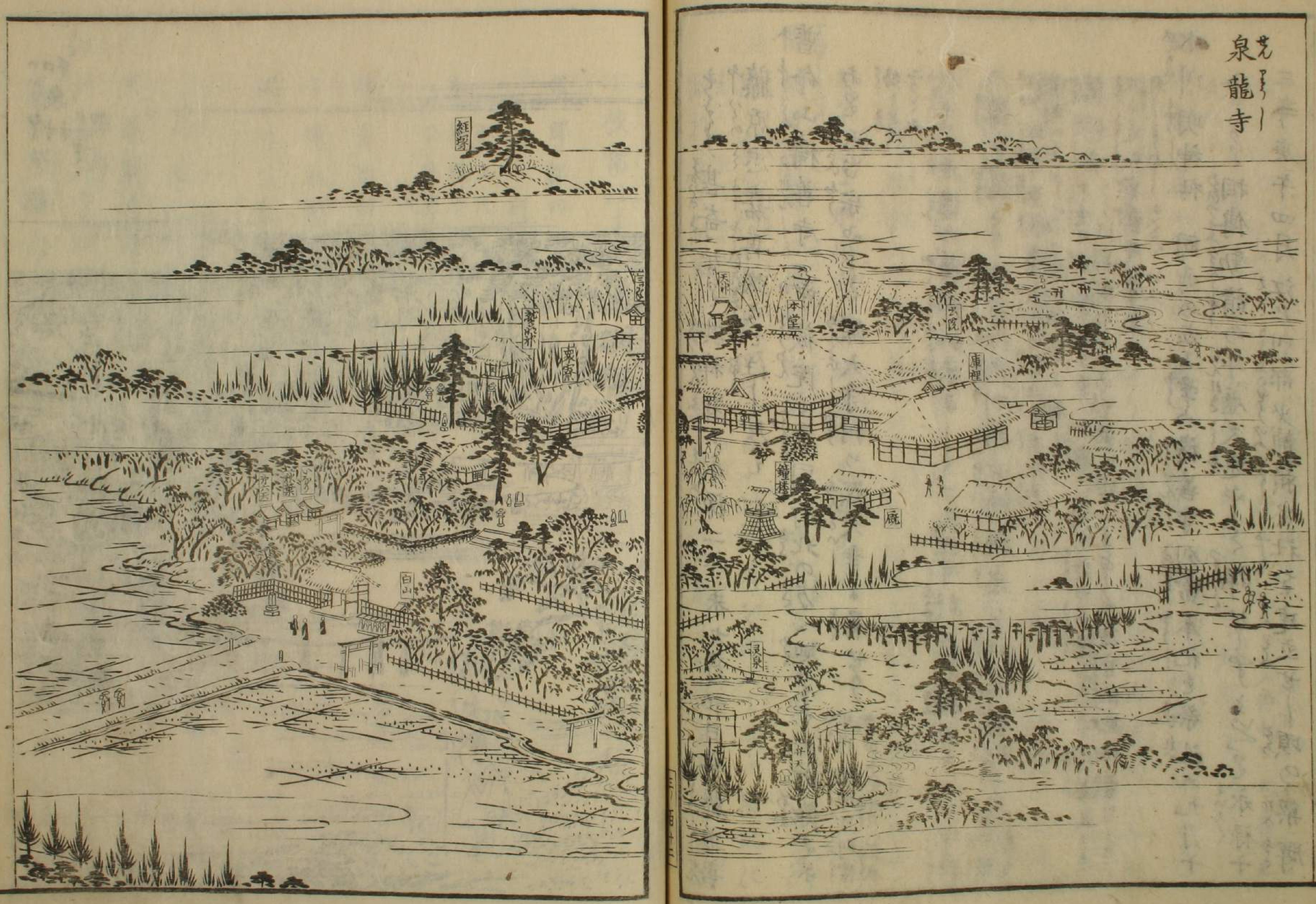
除蝮蛇神符　北見村の内宿といへる地に住る農家斉藤伊右衛門某か家に傳ふ毎歳四月八日に此神符を諸人に与ふ蝮蛇に嚙れたる人此家に至りて禁咒を乞へハ忽ちに痛を去毒を消ちるよし甚奇なりそ其神符は永禄二年未九月廿日斉藤道善藤原忠嘉再改之と注したりと

普命山禱善寺　華蔵院と号同所北の方へ廻りて三町餘にあり天台宗にして深大寺村の深大寺に属せり　氷川明神の別當寺にして背八宮本坊と号なと云

本尊ハ座像の薬師如来にして二尺五寸計あり脇士に十二神将の像を置り往古江戸刑部少輔頼忠を以大檀那とす　頼忠ハ江戸太郎重長より五代の孫江戸彦次郎常光の子にして小田原北条家に属す

薬師堂　本堂の前左の方にあり立像一尺八寸計の木像にして作者知れす宿願あるものの其家へ迂しまゐらせ通宵法施供養なしまゐらす故に道俗宿薬師如来と称しまゐらするとの

氷川明神社　同所の左に並ぶ禱善寺別當奉祀を祭礼ハ九月十八日なりそ相傳勧請の年歴久遠にして詳ならずといへ共永禄十三年庚午四月江戸刑部少輔頼忠社を建立せし頃の棟牌



泉龍寺

一枚當社に存す 寛永二年乙丑五月江戸氏の遠裔喜多見勝重當社を重建せしとかや

梁牌銘曰

別當宮本房　代官　香取新兵衛

聖主天中天　加陵頻伽聲

奉再造氷川明神社頭一宇天道納受依

哀愍衆生者　我等今敬禮

大檀那江戸刑部少輔頼忠　大工石渡　鍛冶正吉

同背面曰

于時永禄十三庚午歳卯月二十七日

武州下多東郡中丸江喜多見村

石華表 左右石柱に承應三年甲午九月喜多見氏久太夫重勝同五郎左衛門重恒等建立せるよし鐫付てあり

馬頭観音堂 華表の右の方にあり喜多見重勝の乗馬の斃れしを埋蔵し観音に崇むるといへり

江戸遠江守旧館地 氷川明神の社地より一丁計巽の方小篠の猥雑たる地を名づく今ハ除地とす延文三年十月十日

竹澤右京亮と共に謀て矢口の渡にして新田左兵衛佐義興を亡したりし江戸遠江守是なり 其事ハ第二巻矢口明神の條下に詳なり

雲松山泉龍寺　氷川明神より八町ばかりを隔て西北の方和泉村にあり 曹洞派の禅刹にして相州高座の宝泉寺に属せり 本尊釈迦如来の坐像ハ八寸計ありて脇士には阿難迦葉の像を置けり 丈七寸なり 脇檀に聖観音の像を安置せり良弁僧都の作なりと云 當寺ハ良弁僧都の草創にして往古ハ法相華厳を兼て大伽藍なりしとなり 中興を鐵叟瑞牛和尚と号れり 相伝孝謙天皇の御宇天下大に旱魃す 依て良弁僧都請雨の法を修せられしに奇特ありて清泉湧出すと云 即門外南の方に有て霊泉是なり 此地を和泉邑と名けるも此清泉によるとぞ 又小田原北条家の分限帳に川村某の所領に江戸泉村七貫文とある地を加へたり

霊泉 總門に并ひて右の方にあり 槻の樹さへ根より湧出して泓沸て此池水いかなる旱魃にも枯る事なく此近里悉く耕田の用水に引とぞ 寺号も此霊泉に依て名付と見えたり 池の中島は蛇形の弁天の像を安せし宮居あり 此霊像ハ良弁僧都の作なりといふ

経塚 寺より後の方用水堀を越て一丁あまり艮の方畑の中にあり 少き岡の上に三間ばかりの老樹あり 往古良弁僧都此所に仏経を埋め松を植て印とせし 此樹下に古碑六枚あり 一ハ上に梵字を刻し下に六字名号を記し左右に明應六年巳正月十六日とあり 又一ハ上に梵字を刻し下に阿舎梨良弁と記し右に明應三年壬申六月十二日とあり 又左に毎自作是念以何令衆生得入無上道速成就仏身とあり 其余の四枚ハ缺損して文字読得がたし

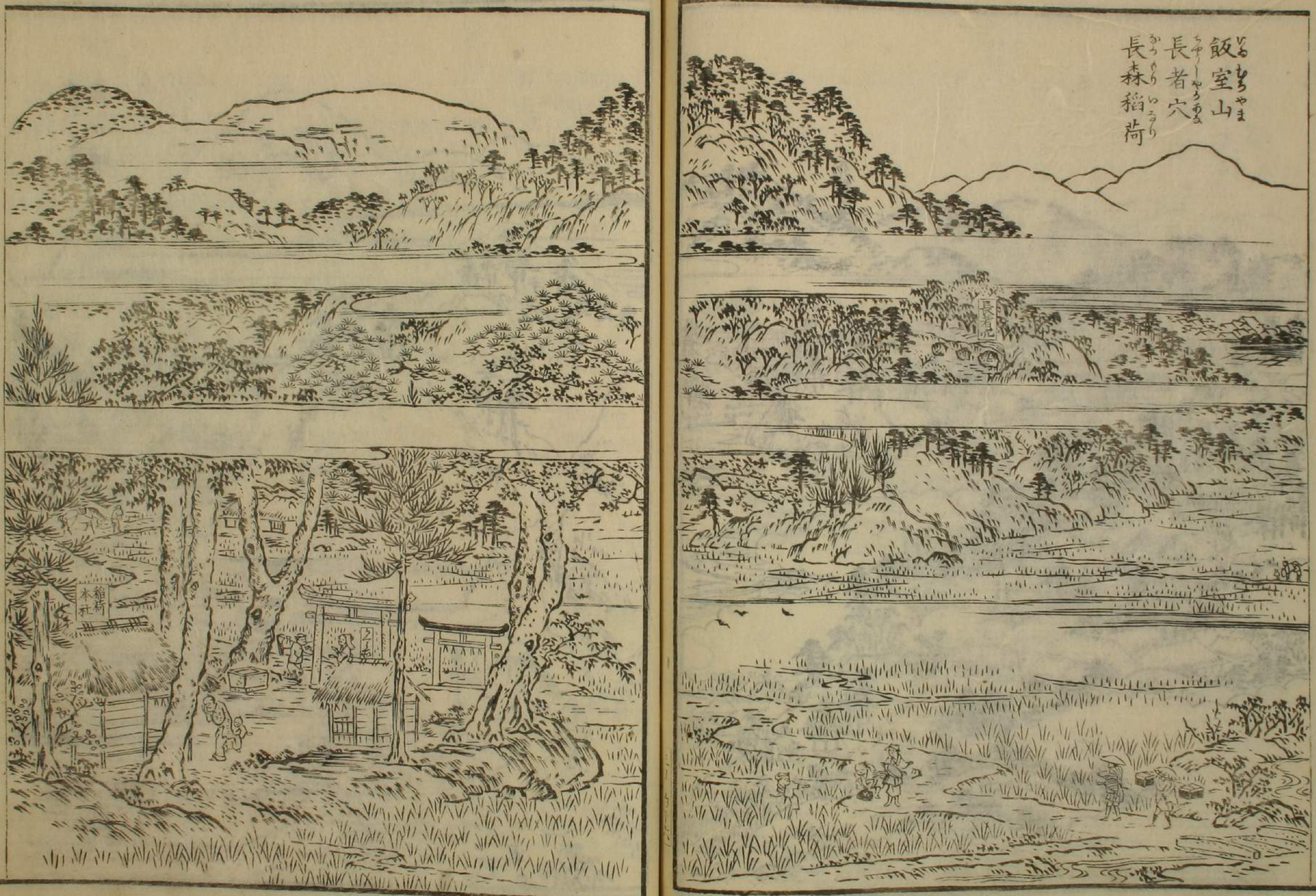
松本山廣福寺　昔ハ稲毛山と号しけりとぞ 菅村の内府中往来の道よりも右の方四町ばかりにあり 新義の真言宗にして三ッ沢の高勝寺に属せり 本尊ハ五智如来ハ座像九尺計なり 開山を慈覚大師中興ハ長弁阿闍梨と号す 安貞元年丁亥正月十日化寂せり

観音堂 本堂より後の山の上にあり 本尊ハ正観世音の像五寸ばかりなり 胎中に稲毛三郎重成念持仏の観音の小像を収めしとぞ 此堂中に重成の肖像ありしが今ハ重成以下の位牌を置けり

稲毛三郎平重成禅門法名道全 名の上に丸の中に上羽蝶の下に一文字の紋を画けり

元久二乙丑年六月廿四日

韋駄天山
廣福寺



飯室山（いゐむろやま）
長者穴（ちやうしやあな）
長森稲荷（ながもりいなり）

其餘重成の父小山田別當平有重法名寂照同舍弟榛谷四郎平重朝法名諦悟同甥の榛谷太郎平重秀法名蓮岡同小次郎平重秀法名如月一子小澤次郎平重政法名真悟等以上五人の霊牌ありいづれも元久二年乙丑六月二十三日とあり又同じ形の霊牌に森五郎平行重法名玄理と注せしものも存すれども没卒の年月忌日を注さず追て考ふべし

按に元久二年六月北条時政の室牧の方小山朝政が讒訴を請け重忠父子を誅さむと計議ありて同廿二日由比濱において畠山六郎を誅す同日申刻二俣河において重忠愛甲三郎季隆が箭に中りて誅せらる後小次郎重秀ならびに郎従等自害を遂る廿三日又鎌倉中騒動して三浦平六兵衛尉謀て榛谷四郎重朝同嫡男太郎重季次郎秀重等を経師が谷に誅す稲毛入道ハ大河戸三郎が為に誅せらるる子息小澤次郎重政ハ宇佐美与一に誅せらると由東鑑にみえたり何れも此時死亡の人々にして重成の一族なる故に當寺に霊牌を置たるべし又按に榛谷太郎當寺霊牌にハ重秀とあり大系図東鑑等にハ重季とす同小次郎霊牌にハ重秀とし大系図にハ季重に作る孰か是の考

一室圓如大禪定尼

建久六乙卯年七月上四日

かく注せし霊牌もあり寺僧も其人をしらざれども東鑑に因て考ふるに即稲毛三郎重成の室なること明けし

東鑑曰建久六年乙卯六月二十八日辛巳稲毛三郎重成妻北条殿女於武蔵國病悩太危急之由飛脚到着下略

同書曰同年七月四日丙戌稲毛三郎重成妻於武蔵國他界日来病悩雖加醫療終被侵風病畢重成不耐別離之愁頻催勇敢心忽遂出家云云

稲毛三郎重成墓　觀音堂の後の方山の上にあり小き五輪の石塔にして半土中に埋れたり

當寺境内ハ櫻樹多く春時爛漫たり故に近邑の土人閑花の時を待得て此地に来り宴を催し遅々たる春の日も移暮惜く思ふなるべし

韋駄天宮　廣福寺の前の小路を隔て向の山の中腹にあり廣福寺奉祀する所にして韋駄天の多像ハ廣福寺の佛殿に安置せり祭礼ハ九月十五日に修行す

按に此地の小名を稲の目と称ふ𦾔人云延喜式神名帳に武蔵國男衾郡稲賣神と云云又神名帳頭註に稲乃賣神ハ稲田姫なりとあり疑らくハ當社往古ハ稲乃賣社なりしを後世稲田姫と韋駄天とを混して誤るなるなるらん歟とのつまりハ稲毛も又稲の目の誤なるらん歟

升形山　廣福寺より南の方の後の山を云稲毛入道重成居城の旧趾にして山頂八町四方ありて升の形状をなせる故にしか号く

重成ハ小山田別當有重の子北条時政前腹の女の聟なり秩父大夫重弘が甥重忠従弟にして頼朝公の幕下に属しく

稲毛の地を所領とせり然に重成ハ重忠と日頃不和なるにより牧の方と共に時政に讒しけれハ元久二年乙丑六月廿二日重忠野心を企つとて時政勢を向けて畠山一族を誅伐す重成親族の好を忘れ重忠を讒害せしより天道に背の罪遁るゝことなく終に和田義盛大河戸三郎宇佐美与一等をして武蔵國へ発向せしめ同廿四日稲毛入道父子を誅せらるとぞ　東鑑北条九代記等の書に見えたり

稲毛と称する地尤広大なりし登戸の渡より川崎の辺までの地すべて稲毛領と称して往古ハ四萬八千石の地なりしといへり　太平記に小八江戸遠江守同下野守伯父甥が所領稲毛庄十二郷とあり又小田原記に信玄江戸を廻りて小田原へ押寄むとせしとの条下に矢口の渡を船にて越えて稲毛の平間と云地へかゝり稲毛の十六郷を追補せしともあり又永禄二年北条家の分限帳に竹内木月小倉長尾鈴木小田中分鹿島田端宿中田分鹿島田中村分矢向平間孫屋経久末長久本小田溝口平の村高田等いづれも稲毛の内なり證とすべし又同じ頃北条家の武士行方彈正明連が家臣田島兵部左衛門之房横山式部弘成駒林図書定朝等皆此地に住しけりといひ傳ふ

飯室山　同所左の山續にして山頂に七面冨士浅間を勧請す

長者穴　同じ山の東の裾にあり入口ハ一間四方ばかりなれども窟中甚廣く同じ程の巖室二ツ並びてあり土人も其名義を知らずといへり

長森稲荷社 同所四丁計を隔て菅生村府中往来の街より右の方蒼林の中にあり同所日蓮宗安立寺奉祀せり

祭神長森稲荷明神右星夜明神左海光曜明神 以上三神

眷族の神長現金狐神渡一銀狐神阿通桐狐神阿参玄狐神阿権白狐神 以上五神

相傳元禄十年伊豫國宇和島の浪人相馬左仲といへるもの花洛にありし頃鳥羽繩手にして一人の美女に逢ふ其美女の云く我ハ伏見藤森長森明神の臣渡一銀狐神と称せりとて霊示あり翌る十一年の夏四月廿日又神告あるに任せ江戸に至り麻布日ヶ窪に住る中原与兵衛といふ者の家に勧請なし大に奇瑞霊験あり然に正徳五年の夏の頃左仲没せるの後一子加藤次といへる者此御神を譲請くる信も終に元文五年十一月安立寺の主僧日現上人此地に遷しまゐらせて法華勧請の御神となせり

中原与兵衛が聟なりける有隅次兵衛といふ人此神を尊信し稲穂および銀封伽羅等を感得せし奇瑞ありて今ことごとく安立寺に收めて稲荷の

大師穴

宝物

雪ヶ坂　飯室山の南の嶺より曲折して西へ下る坂路を云登戸の辺より平村辺への通道なれども頗る美景の地なり

薬師堂　長尾村の内二子街道の右側山の上にあり本尊薬師如来の霊像は影向寺の本尊と同木にして慈覚大師の彫造なりと云　秘仏にして常に拝する事なし　天台宗同所妙楽寺別当

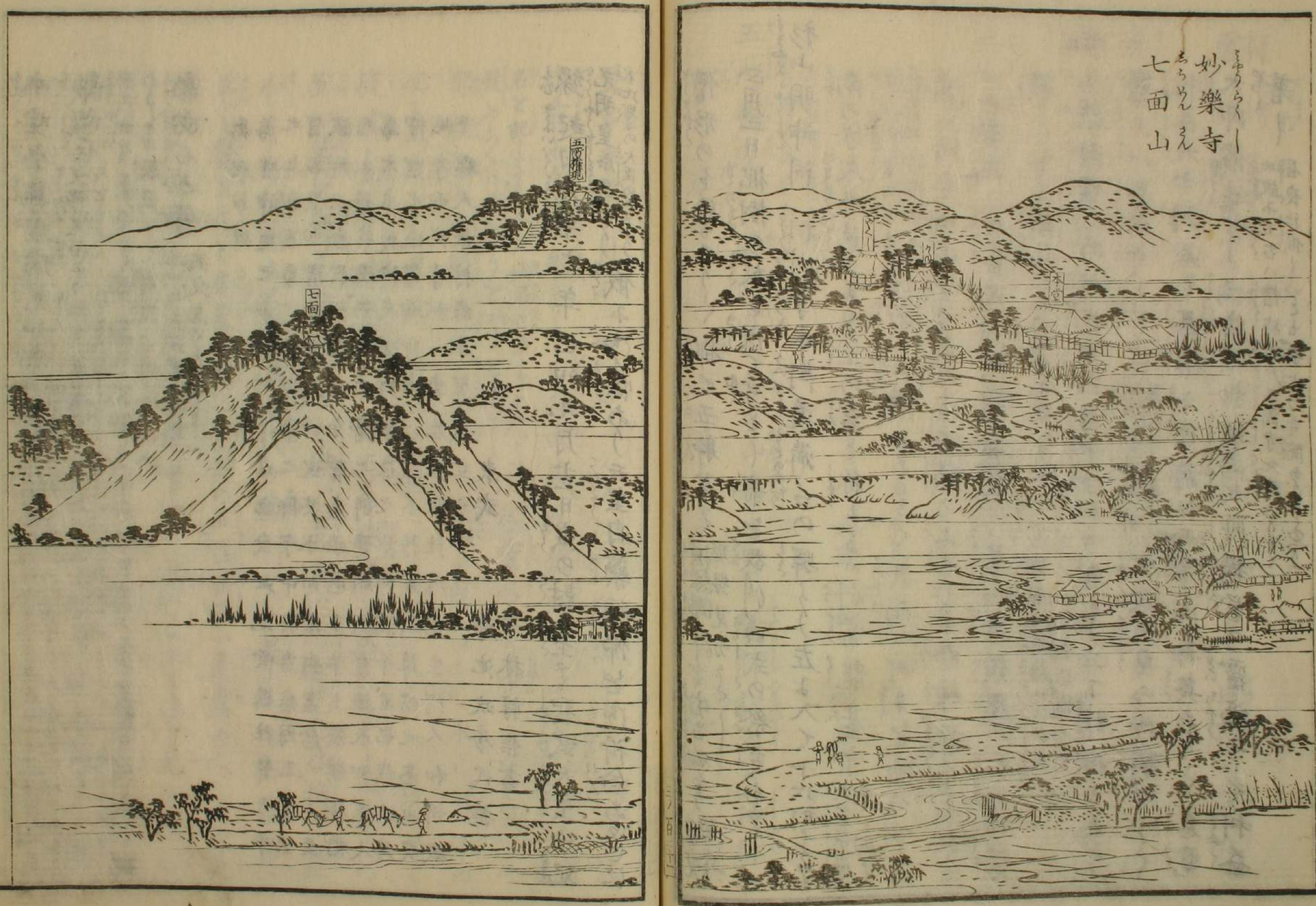
大師巌室　土人大師穴と称ふ薬師堂の山の後西向の所にあり入口は一間四方ばかりあり空中は二間四方にして高さも相同じ享保の頃一人の山伏心願のありけるとて断食して此窟中に一七日の間籠りたりと云伝ふるのみにて大師と称する所謂知りがたし　今窟中に青き板石の古碑四五枚あり

五所権現社　薬師堂の南の山續にあり祭神詳ならず神躰は何れも座像にして丈七八寸なる烏帽子を冠りたるものの或は

僧形のものもありて都て五躯なれども　荒木彫にして尤古物なり形勢見分がたし　毎年正月二日桃樹の枝を伐て弓とし箭を放ち旧式の祭事あれども

杉山明神祠　相州厚木街道溝ノ口の驛より左に入て十六町ばかり南の方久本邑にあり上の宮と称するは別当龍臺寺　天台宗深大寺に属す　毘沙門堂の本尊は慈覚大師の作なり　の西の山續にありて其間一町ばかりを隔つ下の宮も同じ寺の堂の左の方石階の上にあり祭神詳ならず　もとゝいふ當社は延喜式内同國都筑郡星川邑鎮座の杉山神社の摸なるべし　祭礼は九月廿九日なれども　此社へ觸穢の者詣れば必災ありとて土人甚恐怖せり

稲毛薬師堂　野川邑の内府中往来の道より三丁計西にあり　医王山影向寺と号す　天台宗多麻郡深大寺に属せり　聖武天皇の御願にして行基大士開基も其後文徳清和両帝御再興ありて慈覚大師修造せり　三帝の勅願両大師構営の霊場にして利益著し　此域に上古は僧坊百戸三箇寺九院ありて昼夜仕候しいとも盛大の寺院なりしとなり


妙樂寺（めうらくじ）
七面山（しちめんざん）
五所権現
七面
本堂

本堂本尊瑠璃光如来 御頭ハ行基大師の作にして再興のかたハ慈覚大師の作なり 座像長五尺 脇士日光月光天共に五尺五寸あり

影向石 又佛足石とも称す 堂前右の方にあり 垣をめぐらし入口に戸鎖ありて人をして入しむることなし 石の大サ六尺四方 石面ハ平にして中に真に一尺五寸計の凹なる所ありて常に水を湛へ上に家根を覆ふ これを醫王水と称し 病ある人この水を服飲して霊験を得るといふ

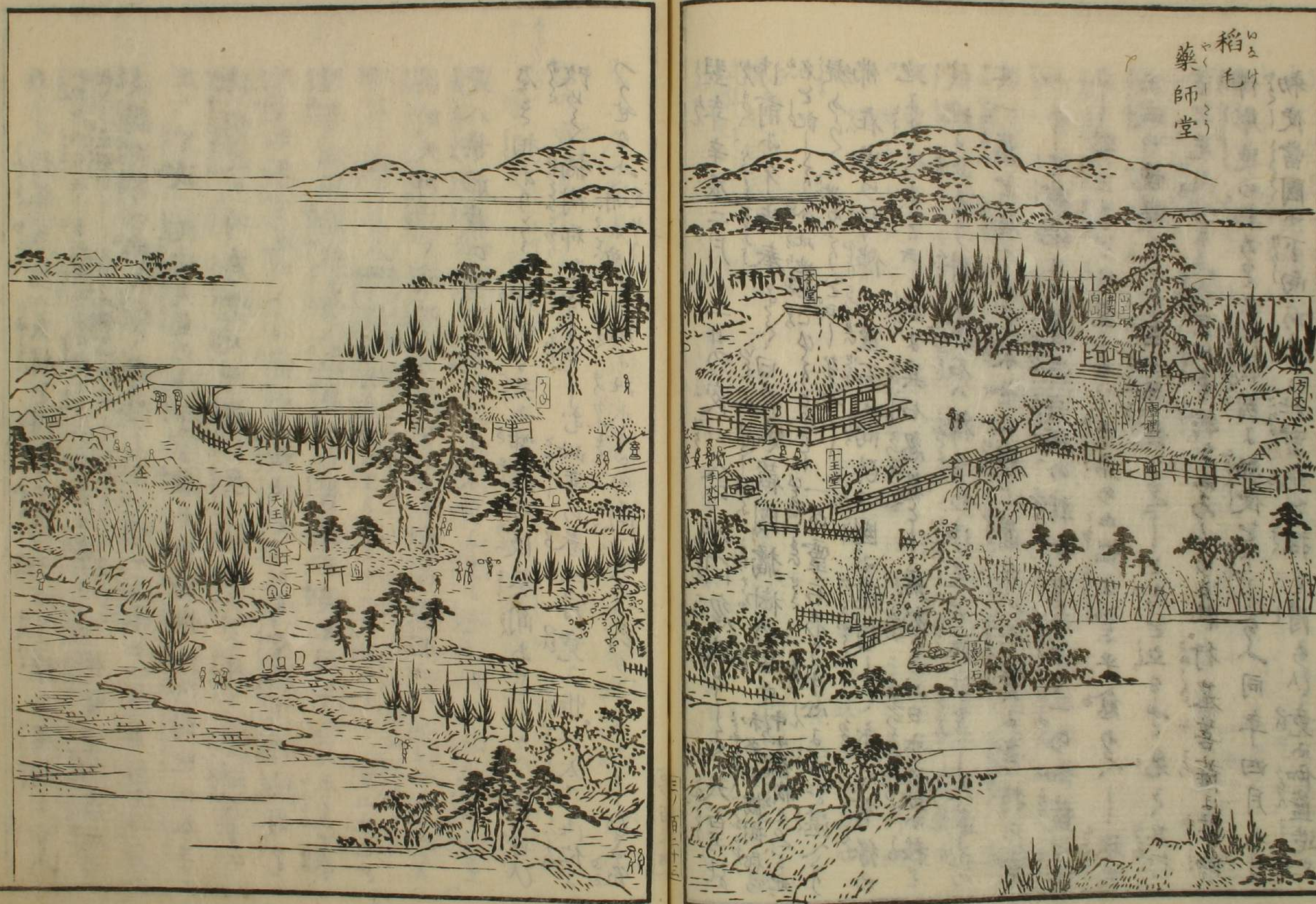
影向石之碑 入口の左に建り 其文左のごとし

影向石碑
嗚呼神道之妙聰明正直也哉此地堂構往昔天平
之年初基焉 文德帝之御宇中興焉悉因王造云
有石象凹清泉常滿一飲其水則沈痾盡愈人々至
誠所以感於神也矣余曾患眼也多年矣醫藥極術
而未得其驗偶至此禱之則變明漸愈雖未如平人
焉大半獲快矣鳴嚀靈泉之妙河潤千里也哉敬拜
神靈之威德而片石以識不朽且表尊信之志也矣
延享丙寅季秋 東都法眼桂川先生門人和州城
下郡大泉村森本亙直立之
東武
菊池政房代撰
平林惇信書

縁起曰天平十一年己卯九月十二日寅の尅に至て聖武天皇の妃光明皇后是なり 不比等の大臣の二女なり 俄に御悩あり天皇自薬師佛を御祈念ありしに

翌年辛辰二月十二日の夜一人の沙門忽然として天皇の御前に来り告奉りて曰く武蔵國橘樹の里に 和名抄橘樹郡の中に橘樹といふ地名を記しあり今此地名亡ひうせぬといへり 一の霊石あり中心に水を湛へたり佛在世の時佛此霊石に向ひ三國に飛行して永く有縁の地に止るべしと云く然に其石忽然として飛行し此日本の地に移て彼地に止まり件の霊石ハ釋尊の御足を捧けまし大蓮花の其一葉を踏とゞめて末世に残し置なる所實に奇特の霊石にして彼地も又霊佛安座の勝刹なり早く一の伽藍を建立し醫王尊を安置しなば皇后の御悩立所に平愈あるべし殊更王城の鎮護として國土豊饒なるべしと坐を立なと見て其行方を見失ひぬ天皇此奇特をあやしめされ行基菩薩に薬師佛彫造の勅ありて又武蔵國に勅使を下しなる同年四月八日勅使當國に下向ありて此霊地を探り得たまひ竟に伽藍造立

稲毛(いなげ)薬師堂(やくしどう)



ありて又行基菩薩ハ良材を得て薬師佛の尊像を彫刻しまします
此地を去事五十余町巽の方小倉と号る地に一の池あり此間夜毎に竜燈をささく又石の灯籠も四月八日よりおとうのあかりあり 佛堂造立落成の
後橘樹郡の地を以て寄附しありし時に天平十二年庚辰十一月
なりし後 文徳天皇の御宇に當て惟喬惟仁御同胞の太子
御位定の時慈覚大師惟仁皇子の法為に種々の秘祈ありて
天安元年丁丑の八月當山に勅使を立られ一堂塔法再営ありし
翌年戊寅初秋悉く落慶して舊觀に復も同年八月本尊を京
師より移しのみ 本尊駿河國青島の里に至てある夜自ら光つく當山辰巳の方の大盤石の上に立せ給ふ人〻奇異とす則影向石是なり
其時大師曰く我此山の躰をみるに靈石靈水四の谷四の峯あり
是八葉胎蔵の徳を備へたるは末世に至る迄二世の悉地圓滿を
なさしむ相ありとて勅使と共に帰洛の後奏聞ありしかハ天皇再ひ
改めて橘樹郡を寺に充しむ此年の春三月竟に惟仁太子位に
つかせ給ふ 清和帝是なり 是偏に此本尊の衛護のよつてしかしむるなれ

なりしんとそ威徳山と号けられ近江國蒲生郡の地を御寄
附の宣旨ありしとなん
十三塚 土人ハ十三本墓と呼べるも野川村の耕地の中此所彼所に
散在せり雑樹茅草茂まり 相傳ふ新田佐兵衛佐江戸遠江守らの
為に伐れて矢口の渡にて亡ひたまひし時随ふ所の家臣の墳墓
なりしと云へとも詳ならす
舟田 子母口村の内府中道の右にあり橘明神の神田なりしと長
二十歩ばかり幅十四歩あまりなる水田なりしを舟の形をして其田をも
悉く陸田なり舟河原と称する地ハ社より十町ばかり東に當りて
今ハ民村の字となりたるも次の橘明神の条下と合せ見るべし
橘明神社 同所府中道より四町あまり右の方山の上にあり別當ハ
真言宗にして蓮乗院と号す祭礼ハ隔年九月九日に修行す
祭神ハ弟橘媛を祀ると云神體ハ一尺三四寸計ありて男躰女躰二

十三塚

軀を安置せり（女躰ハ弟橘媛 男躰ハ日本武尊）勧請の始詳ならず此地の人他邦へ出る事ある時は必先當社に詣て然して後發足せざれハ路中過あり

とて大に恐怖せとも

古文書一通（子母口村の里正伊藤氏の家に蔵む子母口 背ハ渋口なりけり 此書によりて明けし）

渋口郷目録

一町　大戸宮　神田

二段　立花宮　神田

領家方　能登出作

宇田壹町四反

田壹町　散在

合貳町四反（此内四段小せきあんゆるかり免のとく 以上一貫貳百三十七文 分銭）

以下略之

岩松礼郡代國経ヤス武藏國稲毛ノ新庄ノ内

橘明神祠

瀬口ノ郷ノ事任セ寄附ノ御下文ノ旨ニ差遣ニ使者ヲ欲
沙汰ヲ付ニ下地ヲ於ニ国経ガ処ニ愛ニ江戸ノ蔵人入道
希全同信濃入道三貞同ク四郎入道道儀等
率テ多勢ヲ構ヘ城郭ヲ為ニ是非ノ擬ス及ニ合戦ニ之間
不能ニ打渡ニ若此条偽リ申サハ
八幡大菩薩六所大明神ノ御罰ヲ可ニ罷蒙ル以此
旨ヲ以テ可被披露恐惶謹言

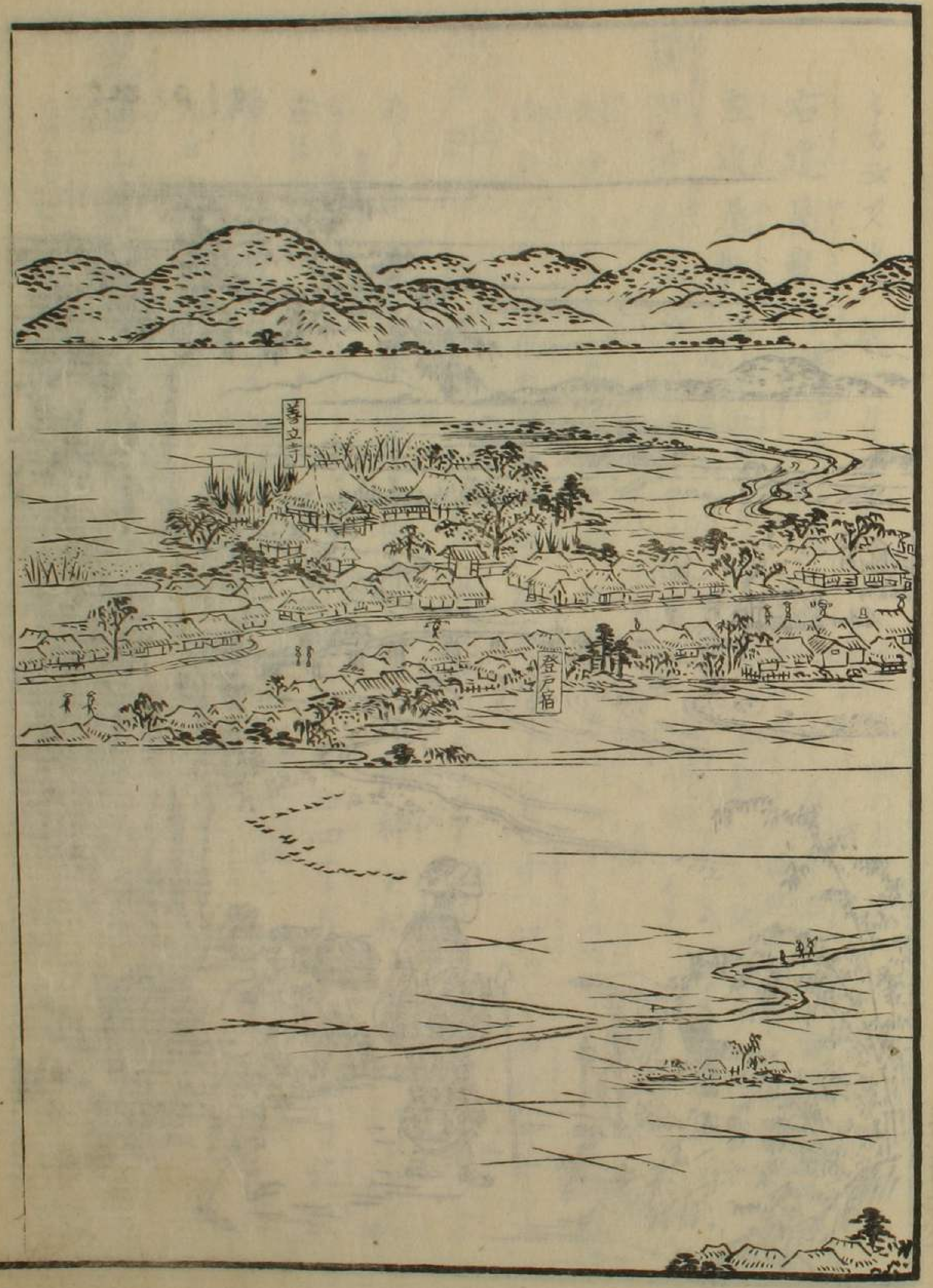
至徳元年七月廿三日　　沙弥重阿

在判

進上　御奉行所

相傳往古日本武尊東征の時此地より發船ありしと云
先に挙る所の記は河本具明なりと云上古ハ
品川神奈川の地共にひとつの海なりしとあり
或ハ武尊此海中風浪の難に
逢ひし頃橘姫の御衣及ひ冠等の具拆此山の下に漂着せし

のぼりとしゆく
登戸宿
菅村
光明院


善立寺
登戸宿

ともいふてその説一ならず 舟田も其の御船の着てありし旧跡なりと云

右近屋敷 社地の右にあり農民藤七といふ人居住す右近古ハ当社を奉祀の
そのかみより藤七ハ其末裔なりとして今猶連綿として子孫繁昌せり

左近屋敷 同じく社地の左にありて右近屋敷と共に除地なりしかれど
左近屋敷の方ハ今畑となりて人居ハあらず

橘姫神廟 社地より二丁ばかり東は当社の山の中腹にあり
五六歩の地を封じて茅篠の類鬱茂せり

相傳日本武尊東征の時此海上逆浪の災に逢ひ給ふ其頃弟橘姫の
御衣及ひ御冠の具など流れ寄たりしを土中へ収めし旧跡なりといふ

大戸明神 橘明神の社より後へ二町ばかりも田間を隔て西の方此山の上に
あり蓮乗院兼帯す祭神大斗乃辨神を祀ると云 神世七代の中にして二柱神
なり則女神にましまして男神を神躰ハ一尺三四寸ありて男女の容貌
意冨斗能地神と申奉る 按に男神形ハ意冨斗能地神女神の形ハ大斗乃辨神の神影なるべし
ましく二躯ありて 祭礼ハ隔年九月
九日に修行せり

龍宿山最明寺 金剛院と号丸子街道の西小杉邑にあり新義の
真言宗にして江戸愛宕下の真福寺に属せり大日如来を本

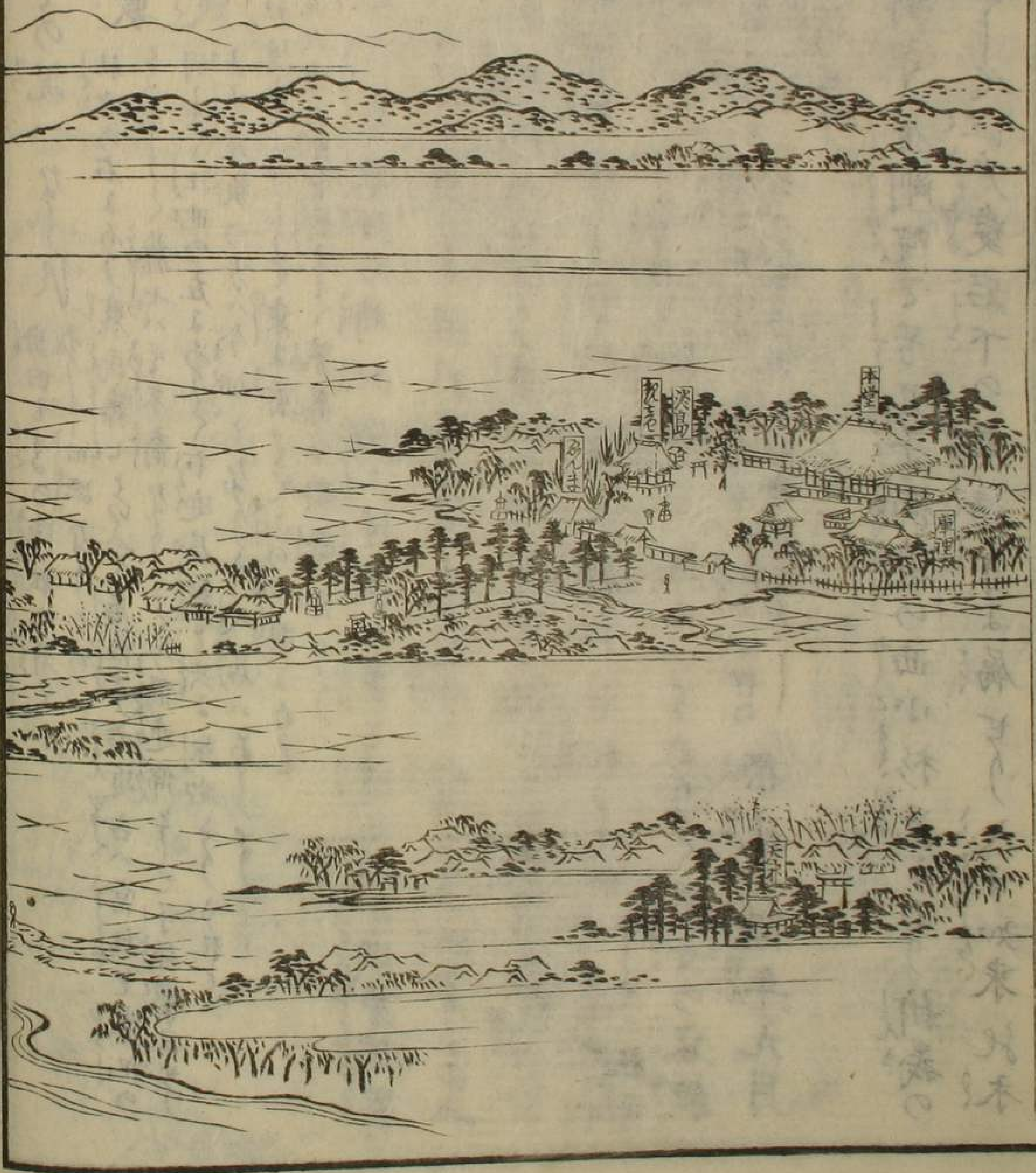
最明寺

囬國雜記 まりこの里にまかりてよめる

東路のまりこの里に行かゝりあしもやすめず過るけふかな

駒林といふ所にいたりて云々

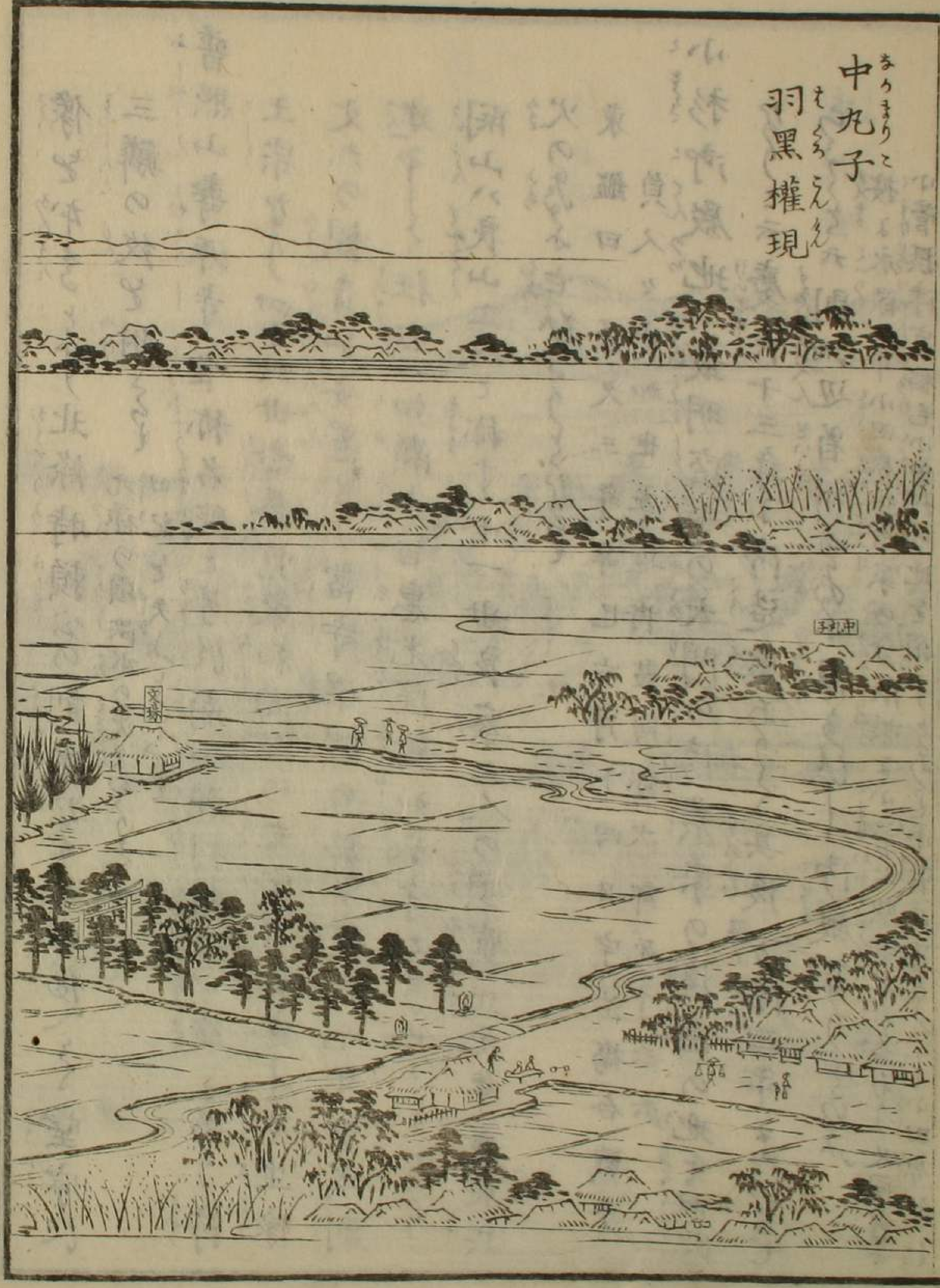
道興准后



像を本尊とす北條時頼公の創建なりと云傳へて堂宇に
三鱗の紋を附るも 元禄の頃洪水の災にかゝりて旧記を失ふといへり
普照山壽源寺 唯称名院と号す南加瀬村岡の中腹にあり浄
土宗なり四十六世念誉覚栄和尚今の堂宇を営建して坐像
丈六の観音を安置せり當寺梁牌の銘に建武元年甲戌創
建にして往古ハ加瀬山智恵光院新如来寺と号せしとなり
開山ハ良山上人と称す十一世良察上人の項寛正元年庚辰兵
火のために亡ひけりとなん

東鑑曰 承久三年辛巳六月十四日宇治橋合戦手
負人々 中加世左近将監同弥次郎死了云云

小杉御殿地 最明寺の大門の傍農家の後園の地は旧跡
なりと云 慶長十三年に御造営ありて其後万治三年にたゝませ
られしと云 則此辺省耕のために徴まひし御殿なりとぞ
按に永禄二年小田原北条家の分限帳に小菅大炊助と云名あり又同書に
小菅摂津守稲毛小田村の地を領すとあるも小菅は正字なるべし小田原記に



中丸子（なかまりこ）
羽黒権現（はぐろごんげん）

大永四年正月十三日上杉の家臣大田源六同源六郎謀反を起し小田原へ相図を定め氏綱伊豆相模を引卒せしに江戸の城に入上杉修理大夫朝興居住しくましつ居なから敵をうけむかふ武略なきにや叶かたくとそ品川小杉へ打向て敵をまつ川とあるも此地のことをいへるか

山王権現社 上丸子渡口より五町ほかりも西南道より左の小路にあり

祭神大已貴命一座なり 祭礼ハ六月十四日 神主山本氏奉祀す

此山本氏祖先を山本平内左衛門と称す往古当社勧請の頃近江國より此地に遷り住むものに相伝ふ人皇三十代欽明天皇の御宇庚申の年元年あり近江國坂本より移しまゐらせんと云 淩平重盛公上下の丸子及ひ今井等れ地を当社の神領に寄附あらましとあるも

其頃重盛公奉納の短刀と称するものあり又重盛公の印と云伝ふる物あれとも今秘しくなしといふ

今二十石の神領を添ふ 文明八年当社焼亡より旧記を亡すといへり 小田原北条家の古文書二通今猶存せり

羽黒権現 稲毛山王より八町ほかりも南の方中丸子村にあり 別当ハ真言宗にして瑠璃光山無量寺と号 相伝天正年間羽州羽黒山よりも勧請すと云ふ本地仏弥陀薬師観音等れ木

像を安置す行基大士の作なりとそ

土人云く昔奥州会津若松の辺より小町三蔵といへる馬追ありし江戸に住せりしか年久しく中風の病に侵され半身不遂にして既に非人となりて此所彼所にさまよひ歩行其頃当社を己か栖となせしか承應三年甲午六月一日山伏一人来り告て曰く汝此社殿にありとも其身甚穢れし早く薙染して名を珎海と改むへしとありしかは姿をあらため珎海と号く同四年乙未正月十一日当社の御神の霊によりて病全快せり此神恩を報しまゐらせんか為此地にありて朝夕神前へ香花神燈をそなへ奉り生涯此御神に仕へ奉りしとあり

華表の額に羽黒大権現と書せしは朝鮮國雪峯の筆と云

丸子渡口 相模街道にして其邑上中下に分れたるも 上丸子中丸子ハ西にありて橘樹郡に属せり永禄二年北条家の分限帳に上丸子の地千葉殿所領とあり又下丸子ハ荏原郡に属して川より東にあり下丸子ハ布施善三といふ人領せられし 同書にみえ

東鑑曰

治承四年庚子十月十日以武蔵國丸子庄賜葛西
三郎清重今夜御止宿彼宅清重令妻女備御膳但
不申其實為御給構自他所招青女之由言上云云

回國雑記

ゆりこの里にてよめる

東路のまりこの里に行かゝり足もやすめす急く旅かな

駒林といへる所にいたりて云く

道興准后

按に回國雑記にまりこの里とあるによりて東海道鞠子驛と混ずるものあれど
然れども此記行に載たる丸子のうたをみるに此記行は芝の浦といふ所に
いたり此浦をながめてあそびたるより後この里駒林に宿をかり新羽を立て
鎌倉にいたりしことを記せるを以て此所の事なるをしるべし